

てこのやうに夕顔は物に  
 恐れなきのか。  
 ○引き動かさし——源氏の  
 君が夕顔の身を引き動か  
 しなされるのである。  
 ○我にもあらぬさま——  
 生気の無いさまをいふ。  
 ○氣どられ——物に氣を  
 奪はれるをいふ。  
 ○せんかたなき——しよ  
 うのないこと。

うな恐れ具合であるなあ、斯うした荒涼とした所には、狐などのやうな化物が、人をおどさう  
 として、吾等に恐ろしく思はするのであらう。吾が茲處にゐるからして、そのやうな狐などに  
 はおびやかされることはないぞ」と仰せられながら、右近を引き起しなされた。右近は「私を  
 引き起しなされるとは大變なことであります。私は只今病氣になつて、心地が悪うございますか  
 らして、俯伏して居るのです。まあ私よりは夕顔の君の方が非常に惱ましく苦しんでゐられる  
 やうであります」と申し上げた。源氏の君は「嗚呼さうであつた。なぜまあ、このやうなこと  
 になつたのか。」と言はれながら手で夕顔の君の身體をさぐつて御覽になると、こはいかに呼吸  
 は絶えてゐる。女房の身體を引き動かさないと、ぐにや／＼として、一向生氣のない有様で  
 あつたから、源氏の君はこの夕顔の君はまあ甚だ子供のやうな弱々しい氣だての人であつた爲  
 めに、妖怪に生氣を奪はれなかつたのであらうと、詮方ない思ひに沈みなされた。

補 ○弦打ちして絶えず聲づくれ——弓弦を鳴らしたことは、萬葉集卷四に「梓弓、爪引夜音之、  
 遠音爾毛、君之御幸手、聞之好毛。」とある。○弓弦——萬葉集卷十一に「梓弓、末之腹野爾、  
 鷹田爲、君之弓食之、將絶跡念變屋。」とある。○瀧口——藏人所に屬する官人で、中古禁中守  
 護の武士である。禁中の軒下を流れてゐる細流を瀧水といひ、その流れが集つて瀧となり流出  
 してゐる。その瀧の口に陣屋を構へて警備する武士であるから「瀧口の武士」といふ。又單に  
 「瀧口」ともいふ。宇多天皇のとき創設せられ、始めは定員が十人であつたが、その後は定員二  
 十人となつた。職原抄には「堪武勇之輩、可補之」とある。その職掌は勘番宿直して警備

の任に當り、宿直したものは、姓名を名乗り、藏人がこれを取り次ぎて奏聞する。これを「宿  
 直奏し」「問藉」「名對面」といふ。拾芥抄に「瀧口本所在御所近邊、清涼殿良邊敷。」とある。

○火危し——本朝文粹に源順の作の夜行翁に「夜々警火舊府中、呼曰火危彼誰何」と見える。  
 ○名對面——禁中では亥の刻に、内豎が時の札を奏すると、その晚殿中に宿直した侍臣どもが、  
 互に名を尋ねられて名のことがある。これを名調といふ。即ち名對面である。それが終る  
 と瀧口の宿直武士の宿直奏しがある。これも名對面と同じことである。宿直奏は延喜元年より  
 始つたといふ。亥の刻と言へば、夜九時から十一時までのことであるから、まだ夜もいたく更  
 けない頃といつたのである。延喜近衛式に「凡行夜者内裏官人一人近衛一人、起亥一刻迄子  
 四刻、但右起丑一刻迄寅四刻」と見える。

評 源氏の君は太刀を抜いたり、右近を召したり、隨身を呼んだり、あづかりの若い男を召した  
 りなさつて、自分一人だけは如何にも元氣よくつくろつてゐられるが、凄愴陰鬼の氣は遂に夕  
 顔の魂を奪つてしまつたのである。「こはなぞ、あな物狂ほしものおぢや」以後の文には、源  
 氏の君の驚きの中に、あはてゝゐられる有様が活躍として描かれてゐる。愛してゐた夕顔の君  
 は遂に魂を奪はれてこの世の人でなくなつた。けれどもその死の悲しみをしみ／＼と感ずるま  
 での、心の餘裕はまだ源氏の君にはなかつた。  
 夕顔の巻は最初から陰鬱の氣に充ちてゐたが、それはこの段の凄愴の景を叙するための前程で  
 あつた。



○紙燭持て参れり——瀧口の若者が紙燭を付つて来たのである。  
 ○近き御几帳か引き寄せて——源氏手づから几帳を引き寄せて、夕顔隔てて、瀧口を召されるのである。これ人々に夕顔を見せまいとの考へである。  
 ○なほ持て参れ——もう少し近く紙燭を持つて来いと源氏の君が仰せられるのである。  
 ○例ならぬことにて——この男は源氏の君の身邊近く接近したことがないからして。  
 ○長押——敷居の事である。  
 ○所に隠ひてこそ——尙近く紙燭を持つて来い。遠慮するものも所によることだ。  
 ○昔物語などにこそ——補欄参照。  
 ○むくつけけれど——氣味の悪いこと。

紙燭持て参れり。右近も動くべきさまにもあらねば、近き御几帳を引き寄せて、「なほ持て参れ」と宣ふ。例ならぬことにて、御前近くもえ参らぬ慎ましさに、長押にもえ上らず。「なほ持て来や。所に随ひてこそ」とて、召し寄せて見給へば、ただこの枕上に、夢に見えつる容したる女、面影に見えて、ふと消え失せぬ。昔物語などにこそ、かかる事は聞くと、いと珍らかにむくつけけれど、先づこの人いかに成りぬるぞと、思はず心騒ぎに、身の上も知られ給はず。添ひ臥して「やや」と驚かし給へど、ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶え果てにけり。云はむ方なし。頼もしく如何にと言ひ觸れ給ふべき人もなし。法師などをこそは、斯る方の頼もしきものにはおぼすべけれど、さこそ心強がり給へど、若き御心地にて、云ふかひなくなりぬるを見給ふに、遣る方なくて、つと抱きて、「吾が君、生き出て給へ。いみじきめな見せ給ひそ」と宣へど、冷え入りにたれば、氣はひ、物疎くなりゆく。右近は、ただあなむつかしと思ひける心地、皆醒めて、泣き惑ふさまいといみじ。

○この人——夕顔をいふ。  
 ○身の上も——夕顔の君のことが心配になるので、源氏の君は御自身のことば打ち忘れてゐられるのである。  
 ○言ひ觸れ給ふべき——どうしたらよいだらうと言ひ合せ給ふべき人もないから。  
 ○斯る方の頼もしきもの——法師は加持祈禱などをなすから、斯様なときは頼みとなるものであるが、そのやうな法師もないから。  
 ○さこそ心強がり給へど——前の段のところ、磨あればさやうのものに威されじと、精神だけは心強くしてゐられたけれども。  
 ○むつかし——氣味悪い。こわい。恐ろしい。

瀧口の若者が自分達の部屋から紙燭に火を點して来た。右近もまたどうしてゐるのだらうかを見ると、これも亦、身動きもならぬ程に恐れてゐたから、源氏の君は御自身で傍近くにあつた御几帳を、引き寄せて夕顔の姿を隠し、他の人々には見えないやうにして、「その紙燭をもつと手近なところまで持つて来い。」と仰せられる。然しその男は、今迄に於て源氏の君の傍近くまで召されたことがなかつたから、源氏の御前近くへは恐れ多くてなかく参らない。斯うした慎ましい態度であるから敷居の上にも上らない。「もつと近くへ火を持つて近寄れ、そんなに遠慮するのも時と場所によることであるぞ、今は何にも遠慮するには及ばない」と源氏の君はその男に仰せられる。さて紙燭を近くへ持つて来させて夕顔のあたりを御覽になると、こは不思議に、夕顔の休んでゐた枕もとに、先き程夢に見た妖怪と同じ姿をした女が、はつきりとその姿をあらはして、ふつと又その姿が消え去つた。このやうな妖怪のことは昔の物語にてはよく聞いたこともあると、源氏は甚だ珍らしく、又恐ろしく氣味の悪いことだと思ひなされた。けれどもこの夕顔は一體どうしたのであらうかと、心配なさることが烈しかつたので、我が身の恐ろしさなどは打ち忘れてゐられる。源氏の君は夕顔の傍近くに寄り添ひなまつて「やあ、どうした」と、眠りをさますうとなさるけれども、夕顔の君は、この時既にひどく冷えきつてしまひ、呼吸もすつかり絶え果てゝゐた。何とも言ひやうがない程悲しいことである。源氏はこのやうなときに信頼する相手として、どうしたらよいだらうと相談を持ちかける人もない。僧侶などこそはこのやうな場合の頼りとなるものであると思ひなされるが、その僧侶もこ



の場合にはない。前の段では「鷹あれば、さやうのものに威されじ云々」など、御自身では氣丈にしてゐられるが、まだ年も若くゐられる源氏の君の御心持としては、夕顔が云ひ甲斐もなく死んでしまひなかつたのを、目のあたり御覽になると、立つても寝ても居られず、しつかりと夕顔の屍に抱き付いて「吾が夕顔よ、再び生きて下さい。このやうなひどい悲しみを吾に見せなされるな」と、仰せられるが、夕顔は既に冷たくなりなかつたから、皮膚の色も變じ、様子が恐ろしくなる。右近は、専ら嗚呼、氣味が悪いと思つてゐた心地もすつかり醒めて、おどろくと泣き悲しんでゐる様子は非常なものである。

○昔物語などにこそ——江談抄第三、雜事のところに融大臣靈抱寛平法皇御腰事。として「資仲卿曰。寛平法皇與京極御休所(褒子)同車渡御河原院。觀覽山川形勢。入夜月明。令取御車疊爲御座。與御休所令行房內之事。殿中塗籠有入。開戸出來。法皇令問詰給。對云。融候。欲賜御休所。法皇答云。汝在生之時爲臣下。我爲主上。何猥出此言哉。可退歸者。靈物乍恐抱法皇御腰。御休所半死失顔色。御前庭等皆候中門外。御聲不達。只牛童頗近侍。召伴童。令召人々差寄御車。令扶乘御休所。顔色無レ能起立。令扶乘還御。召淨藏大法師令加持。纒以甦生云々。法皇依先世業行。爲日本國王。雖去寶位。神祇奉守護。追退融靈了。其戸面有打物跡。守護神令追入之跡也。又或人云。法皇御腰中。融靈參居檻邊云々。」とある。こゝに云ふ昔物語云々の句は必ずしもこの江談抄中の話をさしたるものとも限るまい。然し當時かうした話がいろ／＼とあつたのだからそれ等の物語と共に、この寛平法皇の話もその一つとして含まれたものに違ひない。

又河海抄以下この話を引用してゐるが、今日の江談抄とそれ等注釋書との文の間には少しづつ、の文字上の異同がある。

源氏の君はこの場合あはて騒いでゐられるが、紙燭をもつて來た男は、それとは反對にいとつゝまじやかにしてゐるところが面白い。「なほ持て來や、所に隨ひてこそ」と、叱るやうに仰せられる源氏の言葉は眞に、源氏の面影を彷彿せしめてゐる。

南殿の鬼の、某の大臣を脅かしける例を思し出でて、心強く、「さりととも徒になりはて給はじ。夜の聲はおどろ／＼し、あなかま」と禁め給ひて、いと惶しきに、あきれたる心地し給ふ。この男を召して、「ここにいと怪しう、物におそはれたる人の惱しげなるを、唯今惟光の朝臣の宿れる所に罷りて、急ぎ參るべき由言へと仰せよ。某の阿闍梨そこにもものするほどならば、此處に來べき由忍びて云へ、彼の尼君などの聞かむに、おどろ／＼しく云ふな。斯る歩免さぬ人なり」など、物宣ふやうなれど、胸は塞りて、この人を空しくしなしてむことの、いみじく思さるるにそへて、おほかたのむく

○南殿の鬼の——某の大臣とは貞信公藤原忠平を指す。昔忠平が南殿の御帳のうしろのほどか通りなかつたときに、御帳のこじりを捉へたものがあつた。怪しみなかつておさぐりになると、毛髻しく生え、爪のいと長く刀の刃の縁なものであつたので、これは鬼であつたといふことをお知りになつたことが大鏡に見えてゐる。

○おどろ／＼し——すこい。恐ろしい。



○あながま——嗚呼やかましい。これ右近の泣くのを源氏がいさめなさるのである。

○この男を召して——瀧口の男である。

○言へと仰せよ——この瀧口の男をして別に他の使つかはせと仰せられるのである。

○某の阿闍梨——惟光の兄である。當時比叡山の僧であつた。その阿闍梨がそこに居たならば、此處へ来いと言へと仰せられるのである。加持祈禱のためである。

○彼の尼君——大貳の乳母をさす。

○おほかたのむく／＼しさ——凡てのもの恐ろしいこと。

○けしきある鳥——「けしきある」は唯ならぬ、普通とは違つてあるといふことで、聞きなれぬ鳥。○枯聲——枯びたる嗚聲。

く／＼しさ、譬へむ方なし。夜中も過ぎにけむかし。風のやや荒々しう吹きたるは。まして松の響、木深く聞えて、けしきある鳥の枯聲に啼きたるも、梟はこれにやと覺ゆ。うち思ひ廻らすに、此方彼方氣遠く疎ましきに、人聲せず。などて斯くはかなき宿はとりつるぞと、悔しさもやらむ方なし。

その昔南殿(紫宸殿)に居た鬼が某といふ大臣をおびやかしたことがある。源氏はそのこともを思ひ出されて、心を丈夫にお持ちになり「なにこのやうなことに夕顔はなつても、この儘死んでしまひなさることはあるまい。夜泣く聲は聞いてゐても、ものすごいものである。嗚呼やかましい。そんなに泣くことは止めよ」と、右近などの泣いてゐるのを制しなさる。さうは仰せられてゐるが源氏の君御自身は意外な事件が起きたので甚だせわしく、茫然と途方に暮れてゐられる。瀧口の若者を召されて仰せられるのは「茲處に甚だ怪しい化物におそはれた人が惱んでゐるから、早速惟光朝臣の宿つてゐる五條の宿に行つて、彼惟光に直ぐ參上するやうに、誰か使者を遣し、それに右のやうに命ぜよ。若しその五條の宿りに、惟光の兄である比叡山の何某といふ阿闍梨が其處に居たならば、その阿闍梨にも惟光と一緒に來るやうに言ひ傳へよ。彼の大貳の乳母などが話聲を聞くかも知れないから、あまりやかましく話してはならない。大貳の乳母はこのやうなそゝる歩きをやかましく責める人である」などと、瀧口の若者をして、使者に言傳をなさるやうであるけれども、源氏の君は驚きと悲しさで胸が一杯になつてゐられる。この夕顔の君を遂に死なしてしまつたことが、甚だしく悲しまれるについても、何や彼やに物恐しく思召さることは、譬へやうがない。夜も随分更けて眞夜中も餘程過ぎた頃であらう。風も可なりに強く吹いてゐた。そのために松の梢の響は一層木立深くすごい響をなしてゐた。時折は聞き馴れない鳥が、しはがれた聲で鳴いてゐたが、これは梟といふ鳥であらうかと思召された。斯うした深夜の物凄いと、いろいろと考へめぐらしなると、彼方でも此方でも人氣なく寂莫として、人のゐるけはひもない。まあ、どうしてこのやうなつまらぬ宿に泊つたことであるぞと思ひなると、悔しさは一方のものではなかつた。

○南殿の鬼の某の大臣云々——大鏡卷三、眞信公鬼を捉ふの條に「延喜、朱雀院の御ほどにこそは侍りけめ。宣旨うけ給はらせ給ひて、おこなひに、陣の座さまにおはしますみちに南殿の御帳のうしとらのほど、通らせ給ふほどに、ものゝけはひして、御太刀のいしづきをとらへたりければ、いとあやしくて、さぐらせ給ふに、毛はむく／＼とおひたる手の、つめはながく、かたなのはのやうなるに、鬼なりけりと、いとおそろしく、おぼしめしけれど、おくしたるさま見えじと、ねんじさせ給ひて、おほやけの勅定うけ給はりて、さだめにまゐる人となふるは、なにもものぞ、ゆるさずばあしかりなむとて、御太刀をひきぬきて、彼が手をとらへさせ給へりければ云々」と見えてゐる。源氏物語のこゝの記事はこの大鏡の記事を指したものである。○梟はこれにや——梟については説文に「食父母不孝之鳥」と見えてゐる。又、白氏



文集卷一凶宅詩に「鼻鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢、蒼苔黃葉地、日暮多旋風、前主爲將相、後主爲公卿」とあるのを思ひ合せて作者が書いたものであらう。

評 「忍びて言へ、かの尼君などの聞かむに云々」は、源氏の君がせはしいおどろきの中にも、大貳の乳母に氣兼ねをしてゐられるところを見逃さず叙したのは、作者式部の抜目のない筆致である。「風のや、荒々しう吹きたるは云々」以下は、眞夜の荒涼なる宿の景を描き、更に凄愴の氣を加へてゐる。

○君につと添ひ——右近も源氏の君をたよりとしてより添ふてゐるのである。  
○わななき死ぬべし——ぶる／＼とふるひ恐れて死ぬのではないかと思はれたとの意。  
○またこれも如何ならむ——この右近も死んでしまふのではないかと源氏の君が心配なさるのである。  
○我れ獨り賢しき人——源氏の君、唯一人が、しつかりとしてゐて何かよい考へはないかと思つてゐられる。

右近は物も覺えず。君につと添ひ奉りて、わななき死ぬべし。またこれも如何ならむと、心空にて捉へ給へり。我れ獨り賢しき人にて、思しやる方ぞなきや。火はほのかにまたたきて、母屋の際に立てたる屏風の上、此處彼處の隈々しく見ゆるに、物の足音ひし／＼と踏み鳴しつ、後より寄來る心地す。惟光疾く參らなむとおぼす。在所定めぬものにて、此處彼處尋ねけるほどに、夜の明るるほどの久しき、千代を過さむこちし給ふ。からうじて鶏の聲遙に聞ゆるに、命をかけて何の契に斯るめを見るらむ。我心ながら、斯るすぢにおほけなくあるまじき心の報に、かくきしかた行先の例となりぬべきことはあるなめり。忍ぶとも、世にあること隠れなくて、

○屏風の上——屏風のおたりをいふ。  
○隈々しう——聞くなつて見える。  
○ひし／＼——めきめき。  
○疾く參らなむとおぼす——早く惟光が來てくれるならばよいと願ひなさるのである。  
○在所定めぬ——惟光は好色の男であるから、忍び歩いて居所が一定してゐない。  
○千代を過さむこちし給ふ——後拾遺集卷十二戀二に「くるるまはちとせをすぐす心地してまつはまことにひさしかりけり」とある藤原隆方朝臣などの歌によつたものと思はれる。  
○命をかけて——どのやうな前世の因縁によつて今斯く夕顔の命を亡くするやうな難儀にあふのであらう。  
○おふけなくあるまじき

内裏に聞し召れむことをはじめ、人の思ひ言はむ事、善からぬ童部の口ずさびになりぬべきなめり。あり／＼てをこがましき名を取るべきかなと思し廻らす。からうじて惟光の朝臣參れり。夜中曉といはず、御心にしたがへるものの、今宵しも侍はて、召にさへ怠たりつるを、憎しとおもほすものから、召し入れて、宣ひ出でむことのあるまじきに、ふと物も言はれ給はず。

評 さて右近はどうかといふに、この女も恐れて人事不省のさまである。源氏の君の傍近くにより添ふて、ぶる／＼と身振いをし、今にも死ぬのではないかと思はれる。夕顔ばかりではなくこの右近女も亦死ぬかも知れないと、源氏の君の心は落着かず、無中で右近をしつかりと抱きなされた。あたりの人々は皆恐れおのゝいてゐる中で、源氏の君だけは、しつかりと氣丈夫によそほひ、何とかよい考へはないものかと思案をめぐらしてゐられる。燈火は吹く風に薄暗く明滅してゐる。母屋の境に立てゝある屏風のあたりには、あちらこちらに暗いものが見え、めき／＼と踏み鳴らしながら、何だか源氏の君の背後の方から來るものゝ足音が聞える。源氏は益々恐れなされ、惟光が一刻も早く來てくれればよいがと思召される。元來惟光は好色の男であるから、どこにゐるか分らない。そのために此處彼處と彼を捜しもとめてゐる間に、夜はだ



―あつてはならぬ身分不相應なこと、即ち源氏の女御に戀されたことな

〇忍ぶとも世にあること  
―たとひ昨晚あつた夕顔の死を隠してゐても、事實あつたことは、すぐあらはれるものであるから。

〇内に―内裏をいふ。即ち宮中のこと。

〇善からぬ童部―口さがない京童にとやかく言はれること。

〇口ずさみ―口に浮んだことをいふ。

〇あり／＼て―斯くの如きことがあつたその果てには。

〇あへなきに―はりあひがないから。

夕

四一〇

ん／＼と明けて行く。その間を待つ、持ち遠いことは千年を経るやうな心地がする。かく苦し  
い思ひをして待つてゐられる間に、やう／＼鶏の曉を告げる聲が聞え出し、夜はだん／＼と明  
け放れる。源氏の君の心も少しは落着かれたが、さて吾と夕顔とはそも／＼前世に於て、どの  
やうな因縁があつて斯く命懸けの苦しい目を見るのであらう。自分ながら思ふには、斯る色事  
に關したことで、身分不相應にも藤壺の女御を戀するといふが如き、あつてはならぬ悪いこと  
をなしたその心の報に、このやうな夕顔を死なせるが如き不吉な一大事を起し、過去や未來に互  
つての語の種となるほどな事になつたのだらう。如何に之れを隠して置かうと思つたとて、到  
底隠し切れるものではない。宮中にも遂にはお知りになるだらう。それを初めとして、世人が  
とやかくといふであらう。又善くない京童どもは口やかましく喋り散らすだらう。斯うした  
ことがあつて遂には馬鹿らしい不名譽を取るのであるかなあと思ひなされる。とかくしてゐるう  
ちに惟光の朝臣がやつて来た。ふだんは夜中と言はず、朝と言はず、始終源氏の君の傍に伺候  
し、君の御心に隨つて働いてゐた彼惟光が、今晩に限つてまあ、お呼びに遅れてくるとは、憎  
い男だと思つてゐられるから、お呼び入れになつたが、話しをすることも張合がないので、直  
ちに物も仰せられない。

〇召しにさへ―惟光は源氏の君の忍び歩きをなさるときは、必ずつき添ひ申したのである  
のに、今宵は源氏の君の宿に伺候申さねばかりではなく、猶且つお呼びになつたのに、斯く遅  
參するとはにくらしき者よと、源氏の君は思召しになつたが、まづ御座所に召し入れ給ふたの

である。

評 ふと物も言はれたまはず―先輩はこの語を以て、源氏の君のこの場合に於ける様、宛然と  
して見るが如しと評してゐるが、實にさも思はれる。

〇右近大夫のけはひ聞く  
に―惟光の来た様子を  
いふ。  
〇始めよりのこと―そ  
の初め惟光がたばかりで  
源氏の君を夕顔の宿へか  
よはしたるを思ひ出すの  
である。  
〇この人に息を伸べたま  
ひてぞ―惟光が參上し  
たのによつて、今まで張  
りつめてゐられた氣をゆ  
るめなかつたのである。  
〇あさまし―あきれ  
る。  
〇とみのこと―俄かの  
事をいふ意で、夕顔の死  
なす。  
〇通經などなこそ―邪  
氣を退げんためによます  
るのであるといふ。なほ  
夕顔蘇生をもとめるため  
ともいふ。

右近、大夫のけはひ聞くに、初めよりのこと、うち思ひ出でられて、泣く  
を、君もえ堪へ給はで、我れひとりさかしがり抱き持ち給へりけるに、こ  
の人に息を伸べたまひてぞ、悲しきことも思されける。とばかり、いといた  
くえもとどめず泣き給ふ。ややためらひて、「ここに、いと怪しきことのある  
るを、あさましといふにもあまりてなむある。かゝるとみのことには、誦  
經などをこそはすなれとて、その事どもせさせむ、願なども立てさせむと  
て、阿闍梨ものせよと言ひやりつるは、」とのたまふに、「昨日山へまかり登  
りにけり。先づいと珍らかなることにも侍るかな。かぬて例ならず、御心地  
の物せさせ給ふことや侍りつらむ。」と「さることもなかりつ」とて泣き給ふさ  
ま、いとをかしげにらうたく、見奉る人もいと悲しくて、おのれもよよと  
泣きぬ。

夕

四一一



○昨日山へ罷り登りにけり——兄の阿闍梨が比叡山へ還り上りたるをいふ。ただ山とばかりいふときは比叡山を指す。  
○先づいと珍らかなること——夕顔の死んだことはいと不思議なことである。  
○かれて例ならず——以前から御不例にておぼせしか。即ち御氣分でも悪かつたかの意。  
○おのれもよよと泣きぬ——源氏の君の泣きたまふを見奉りて、惟光も世に所謂、もらひ泣きをするのである。

夕 顔

四一二

源氏の君に抱きつきながら、怖れ入つてゐた右近は、惟光が入つて来た様子を聞くと、惟光が源氏の君を夕顔に接近せしめた當初からのことが思ひ出でられ、悲しさにおのづと泣き出した。これまで源氏の君は自分一人賢さうに強くなつて、右近を抱き持つてゐられたが、今や萬感交々胸に迫り、惟光の入り来るを見ると、緊張してゐた氣分が一時にゆるみ、こゝに始めて夕顔の死についての悲しさを思された。暫しの間は強く涙を止められることもなく泣きなすつた。暫し、ためらつてゐられたが、こゝに夕顔の急に死すといふ不思議なことがあつた。これは實にあきれることであると言つても足らぬ程奇怪なことである。斯様の俄なことには、邪氣退散のために經文を誦すことであるといふから、それをもしようと思ひ、又夕顔の蘇生の祈願を爲ようと思つて、そなたの兄なる比叡山の阿闍梨をも共に来るようと言つてやつたが、それはどうしたか。」と源氏の君が仰せられる、「私の兄阿闍梨は昨日比叡山に歸りました。夕顔の君が斯く急に死なれるとは、先づ甚だ不思議なことでありませぬ。さて夕顔の君は以前に御氣分でも悪くしてゐられたことがありましたか」と惟光はお對へした。「そのやうなことは無つた」と仰せられながら泣きなざる源氏の君の有様は、甚だおかしいやうで愛らしくあつたので、それを傍から見てゐた惟光までが甚だ悲しくなり、遂によよともらひ泣きをした。

○よよと泣きぬ——六帖卷の四に「君によりよい〜とよよ〜と音をのみぞなくよよ〜と」とある。

人間は感情興奮して悲哀の頂點に達したるときは、心氣極度に緊張して泣くにも泣かれぬも

○さいへど——何といつても。  
○しほじみぬる人——鹽の物にしみゆく義で、物事に度々出逢ひてよく経験に馴れたる人。  
○言はむ方もなけれど——何れも皆若き者どもでせんかたもないことであるが、さりとしてこの院守に聞かすことも出来な

さいへど年うち老び、世の中のとある事もしほじみぬる人こそ、ものをりふしはたのもしかりけれ。いづれも〜若きどちにて、言はむ方もなけれど、「この院守などに聞かせむことは、いと便なかるべし。この人一人こそむつまじうもあらめ。おのづからもの言ひ漏しつべき眷屬もたち交りたらむ。まづこの院を出ておはしましね」といふ。「さて、これより人ずくなる所はいかてかあらむ」とのたまふ。「げにさぞ侍らむ。かの故郷は、女房などのかなしびに堪へず、泣き惑ひ侍らむに、隣しげく、咎むる里人多く侍らむに、おのづから聞えはべらむを、山寺こそ、なほ斯様のことおのづから行きまじり、もの紛るること侍らめ」と思ひまはして、「むかし見給



の事を言ひ漏すべき一族のものどもも、その中には立ち交つてゐることであらう。

○眷属——親族、一族、宿をいふ。

○山の寺云々——山寺には死人を葬るやうなことも自然とあるからしてそれとまぎれて、世人の目に立たないだらう。

○むかし見給へし女房の云々——昔私(惟光)が見知りたる女房で、今は尼になつてゐるのがゐますから、この女は惟光と關係があつたのではなくして単に知り合ひであつたのである。

○みつはくみて——髪白くて老姫の體をいふ。

○かこか——ひそみかくれて静かなるをいふ。寂寞の意。かこやかに同じ。

へし女房の尼にて侍る、東山の邊に移し奉らむ。惟光が父の朝臣の乳母に侍りし者の、みつはくみて住み侍るなり。あたりは、人しげきやうに侍れど、いとかこかに侍り」と聞えて、明け離るる程のまぎれに、御車寄す。

年も老い、世上のとある事も、斯る事もよく経験した人こそは、假令老人であるとはいへ、さうはいふものゝ一旦物事の起つた時は頼みとなるものであつた。然し只今は源氏の君も、惟光も右近も皆若い者同志で、どうすることも出来ないけれども、「さてそれだからとて年老いたこの院の番人に相談することも、甚だ不都合なことになるだらう。勿論この番人一人だけは源氏の君に對して、睦しい間柄であるから、何事もないだらうが、彼れに話した事が自然と言ひ漏すやうな一族の者も中には居ることであらう。それで先づこの院を出で、他へ行かれた方がよいであらう。早く御出發なさへ」と惟光は申し上げる。すると源氏は「さて、汝はさう言ふが、此處より一層人の少い靜かな所はどうしてあるだらうか」と仰せられる。惟光は直ちに「成程さやうでございます。彼の夕顔の君が嘗てゐられた故郷は、女房どもが悲しみに堪へないで、この夕顔の死を泣き悲しみ騒ぐことでせう。なほその上、隣近所もこみあつてゐることでありますから、見咎めてあれやこれやと噂する人も多くあるだらうし、自然と夕顔の變死も世間に傳はつて宜しくありませんが、山寺の方は葬儀のことも自然とあることですから、夕顔の後の營みをなしても、他の葬儀と入り混つて分らないこともありませう。」と考へめぐら

し、なほ語を續け「私が以前嘗て見知つてゐた女が、只今は尼となつて住んでゐる東山のほとりに夕顔の死骸を移ませう。私の父君の乳母であつた女が、年老いてそこに住んでゐるのであります。そのあたりは人が澤山住んでゐるやうでありますが、極く閑靜な場所であります。」と源氏の君に申し上げ、夜も明け渡る頃、人の騒ぎに乗じ、御車を引寄せた。

○さへど——この「さへど」は、「たのもしかりけれ」に係る意で、云々の人こそかゝるものゝをりふしは、さはいへどたのもしかりけれといふ意になる文法である。かゝる用法は源氏物語中到處に用ひられてゐる。玉の小櫛に「必しも上にうくることなくてもいふ詞也」と言つてゐるが、これはひがごとである。○みつはくみて——この語三條西家本になし。この語の意については、「年よると腰かがまり、せぐくまりて、二つの膝とがり出たる中にかしらまじりて三の輪をくみ入れたるが如くなる云々」といひ、又「老いて齒のまばらに落ち、上の齒下の齒と三つさしあひくみあふ様になるをいへり云々」といひ、「みつははみづは即ち瑞齒の意で、老人になると生へる齒である」とも言ふ。然し是等の説は今直ちに受けられない。暫く年老いたかたちと心得てよいだらう。

平素老人を蔑視し、若きを誇つてゐた若人達も、一旦人生の悲境に陥るとそゞろ老人の尊さを知るのである。源氏の君といひ、惟光といひ夕顔の死に臨んで始めて「さへど年うちねび、世の中のとあることもしほじみぬる人こそ、物のをりふしはたのもしかりけれ」と述懐し、院守の老翁にたよらうとしたが、ことの露顯を恐れてそれも叶はぬと述べてゐるところ、この場



○うは席に押しにくくみて  
 惟光夕顔を直にいだくは恐あることであるから上に敷く筈につつんだのである。くくむは包む意。

○ささやか——ささは總て小さきことをいふ。  
 ○したたかにしもえせれば——惟光がしつかと夕顔を抱き乗せることが出来なかつたから、髪が車からこぼれ下つたと云ふのである。

○目もくれ惑ひ——目も昏くなりて思ひ亂れる。  
 ○右近を添へて乗すれば——この「れば」については玉の小櫛に「このれば」といふ詞、下にかかるところなし。いかゞと言ふ。げに折文か誤脱であらう。

○くくり引き上げ——指貫の袴の裾の括りを引きあげるのである。  
 ○おぼえぬおくりなれど

合一層の哀さを催さしめる。

この人をえ抱き給ふまじければ、うは席に押しにくくみて、惟光乗せ奉る。いとささやかにて、疎ましげもなくらうたげなり。したたかにしもえせねば、髪はこぼれ出でたるも、目くれ惑ひて、あさましう悲しと思せば、なりはてむさまを見むと思せど、「はや御馬にて、二條の院へおはしまさなむ。人騒しくなり侍らぬ程に」とて、右近を添へて乗すれば、君に、馬は奉りて、われは徒歩より、くくり引き上げなどして出で立つ。かつは、いと怪しく、おぼえぬおくりなれど、御氣色のいみじきを見奉れば、身を捨てて行くに、君はものもおぼえ給はず、われかのようにおはし著きたり。人々、「何處よりおはしますすにか、惱しげに見えさせ給ふ」などいへど、御帳の内に入り給ひて、胸をおさへて思ふにいとみじければ、などて乗り添ひて行かざりつらむ。生き返りたらむ時、いかなる心地せむ。見捨てて行き別れにけりと、つらくや思はむと、心惑の中にもおぼすに、御胸せきあぐる心地したまふ。御頭も痛く、身も熱き心地して、いと苦しく惑はれ給へば、

かくはかなくて、われも徒になりぬるなめりとおぼす。

——思ひがけない野邊の送りであるが。  
 ○御氣色のいみじきを——源氏の君の御様子、如何にもお氣毒であるから。  
 ○われかのように——源氏の君は悲しみに胸もふさがり、夢が幻かの様で二條院にお歸りなされたのである。  
 ○御帳——帳臺のとはり。  
 ○いかなる心地やせむ——どのやうな心地がするであらうと源氏の君が夢生した時の夕顔の心中を察しなされるのである。  
 ○われも徒に云々——斯く苦しき思ひ煩らひて、終に我が身も死ぬのであらうと思し召すのである。  
 ○御頭も痛く——頭痛熱氣など夕顔の愁傷ばかりでなく、もののけの心もある。

源氏の君は悲しみに沈んでゐられるからして、どうしても夕顔の亡骸を抱いて車に乗せられることが出来なかつたので、上に敷く筈に包み込んで、惟光が亡骸を車に乗せ奉つた。その體裁は甚だ小さくして、何の厭らしいところもなく、愛らしかつた。元來しつかりと筈に包まなかつた爲め、夕顔の頭髮は車の外にこぼれ出でゝゐるのを、源氏の君が御覽になると、目も昏くなり、思ひ亂れて、なまけなく悲しいことだと思し召しになつた。それで夕顔の死骸を葬り終るさまを見とゞけようと思し召しになつたが、惟光が出て来て「早く御馬に召され、二條院にお歸りあそばせ。夜が明けて人々が騒がないうちに」と申し、右近を夕顔の車に載せた。さして惟光は自分が乗つて来た馬を源氏の君に奉り、自分は歩行の姿で、指貫の裾紐を括りあげなとして出發した。なほその上、甚だ不思議な、思ひも設けない野邊の送葬であるけれども、源氏の君の御様子が甚だしよんぼりと悲しみに沈んでゐられるのを見奉ると、お氣毒になり、惟光は自分の身をもうち捨て、送葬した。その間に源氏の君は夢現のままで二條院にお着きなされた。院中の人々はこれを見て、「一體何處からお歸りになつたのであるか、御氣分が苦しさをにしてゐられる」など申し合つたが、君はそのやうなことは頓着なく、御帳の中にお入りになり、苦しい胸をなで抑へて考へめぐらされると、ひどく悲しくなつてくるので、このやうなことであるのならば、なぜ夕顔の死骸を乗せた車に同車しなかつたのだらう。若し彼夕顔が蘇生したならば、どのやうな心地がすることであらう。源氏の君は私の死を見ながら、打捨て、



往つてしまひなかつた、薄情なやりかたであると彼女は思ふだらうと、心の中に營惑してゐられるので、御胸もせきあげる心地になりなされる。君は御頭も痛く、身體も熱い心地がして、甚だ苦しく思ひ惱みなさつたから、今は斯くたよりなくては、自分も遂には死んでしまふのであらうと思召される。

**補** ○うはむしろ——孟津抄に「弘仁八年八月從三位橘朝臣常子薨、以<sub>レ</sub>席裏<sub>レ</sub>屍」と見える。この文は類聚國史の文を引用したものである。○右近を添へて乗すれば——このところ一本に「かちより、君に馬は奉りて、く<sub>レ</sub>り引きあげなどして、かつは云々」とある。三條西家本もこの一本と同じ。

**評** 惟光が夕顔の送葬につき、「いと怪しく覺えぬ送なれど、御氣色のいみじきを見奉れば、身を捨てゝ行くに云々」と記されてゐるが、どこ／＼までも源氏の君のすぐれてましますを記し、臣下の惟光も潔く身を捨てゝ行くと述べてゐる。

日高くなれど、起き上り給はねば、人々あやしがりて、御粥などそそのかし聞ゆれど、苦しくて、いと心ほそく思さるるに、内裏より御使あり。昨日もえたづね出て奉らざりしより、覺束ながらせ給ふ。大殿の君たちあまた参り給へど、頭中將ばかりを、立ちながら、此方に入り給へとのたまひて、御簾の内ながらのたまふ。「乳母にて侍るものの、この五月の頃ほひよ

○御粥——今日の御飯。  
○そそのかし——勧め。  
○内裏より——勅使である。主上は昨日源氏を尋ねさせなかつたが、その本處が分らなかつた。  
○大殿の君たち——大殿は左大臣をさす。内裏より勅使として来たのである。

○頭中將ばかりを——源氏の君は御使者の中で、頭中將だけを召し入れなされるのである。  
○立ちながら——源氏が穢に觸れ給へる故に、人を座せしめず、立たせながら簾ごしに物をのたまふのである。  
○忌むこと受け——受戒などしたるをさす。  
○また起りて——病氣が再發して。  
○今はのきざみに——臨終にいふ。

○つらしと思はむ——源氏のとぶらひ給はなかつたならば、無情なことを恨むであらう。  
○その家なりける下人の云々——その乳母の家に居た下人が病氣で、俄に亡くなつたのを、源氏に怖れ憚つて、日を過して葬りをなした由を聞いたとの意。これ穢れを粉ら

り重く煩ひ侍りしが、頭刺り、忌むこと受けなどして、その験にやよみがへりたりしを、このごろまた起りて、弱くなむなりにたる。今一度とぶらひ見よと申したりしかば、幼稚よりなづさひし者の、今はのきざみに、つらしと思はむと思ひ給へて、罷れりしに、その家なりける下人の病しけるが、俄にえ生きあへて亡くなりけるを、怖ぢ憚りて、日を暮してなむとり出で侍りけるを、聞きつけ侍りしかば、神事なるころは、いと不便なることと思ひ給へかしまりて、え参らぬなり。この曉より、しはぶきやみにや侍らむ、頭いと痛くて苦しく侍れば、いと無禮にて聞ゆること」などのたまふ。

**釋** 夜も明け太陽も東の空高く昇つたけれども、源氏の君は一向臥床から起きなさらなかつたので、二條院中の人々は不思議に思ひ、君には起きなさつてお粥でも召し上つてはいかゞとお勧め申したが、君には苦しくて甚だ心淋しく思つてゐられた折柄、宮中から勅使があつた。その使は昨日は源氏の君を捜したが、在處が分らなかつたので、帝も心もとなく思つてゐられる。左大臣の君たちが澤山二條院へやつて來られたが、源氏の君はその使の中の頭中將だけを、立つたまゝで此處へお入りなさいと仰せられ、御簾の内にながら物語りなかつた。「乳母であつ



はさうとしてなしたことである。  
 ○神事なるころは——夕顔の死したるは八月十六日の事である。九月齋月にて一日より御神事である。三十日の穢にふれなかつたので参内が出来ない。  
 ○しばぶきやみ——せきのでる病。今日いふ風邪。  
 ○いと無禮にて聞ゆること——簾をへだてて申し上げるとは甚だ無禮なことであると、頭中將に會釋なさるのである。

た者が、この五月の頃から重い病氣に悩みましたが、遂に頭髮を剃り、受戒を受けなどしました。その効験であつたのかそのときの病氣は全快いたしました。この頃また發病して衰弱しました。先方では今一度私に訪づれてくれよと申したものですから、幼少の頃から彼乳母とはよく馴れ親しんでゐた私が、彼女の臨終といふ場合に訪づれなかつたならば、彼は私を薄情な男だと考へるだらうと思ひまして、彼女を訪づれてやりましたところが、彼の家に召し使はれてゐる下人が病氣して、急に悪くなり死んでしまつたのを、私に恐れ遠慮をしまして、それから數日経過してから葬儀をしたといふことを聞きました。それで御神事のある時節柄は、甚だ不都合なことだと思ひまして、恐縮いたして参内をもさし控へてゐます。猶又、この晩から風邪になつたのか、頭が大變痛く苦しうございますから、このやうに簾の内にゐながら申し上げまして、甚だ失禮なことでありませう。源氏の君は仰せられた。

**補** ○大殿の君たち——この語の上にとてといふ語があつたものであらう。恐らくは脱字といふ。  
 ○神事—延喜式神祇三に「凡觸穢惡事・應忌者・人死限三十日」自非日始計又云觸穢死葬之人雖非神事月不得參著諸司并諸衛陣及侍從等」と見える。

**評** このところでは、夕顔の君と特別な關係ある頭中將を出して、源氏の君と對話せしめてゐる。これ後段に至る一の伏線をなすものである。源氏の君はいろ／＼と言ひ譯を述べてゐられるが秩序ある言ひ譯のやうでありながら、下人の死を出すあたりやゝ不自然な無理があらはれてゐる。

○よべ——昨夜。  
 ○かしこくも求め奉らせ給ひ——恐れ多くも、主上には源氏の君をお尋ねになつて。  
 ○行脚——道を行きて、穢らしい事に出逢ふないふ。  
 ○胸うち潰れ給ひて——頭中將が立ちもどり、源氏にことの仔細を尋ねたので、源氏の君は言ひあてられて、はつと胸のつぶれるをいふ。  
 ○覺えぬ穢——思ひよらないけがれ。  
 ○たい／＼しく——意々しくの音で、意りらしくある。こゝば主上に對して恐れ多いから。  
 ○つれなくのたまへど——源氏の君が、悲しみを包みかくしながら強情氣にのたまふことで、事を言ひまぎらはずのである。  
 ○藏人の辨——頭中將の弟である。頭中將に大方

中將「さらば、さるよしをこそ奏し侍らめ。よべも御遊に、かしこく求め奉らせ給ひて、御氣色あしう侍りき」と聞え給ひて、立ちかへり「いかなる行觸にかからせ給ふぞや。陳べやらせ給ふことこそまことと思ひ給へられね」といふに、胸うち潰れ給ひて、「かく細にはあらで、ただ覺えぬ穢に觸れたる由を奏し給へ。いとこそたい／＼しく侍れ」と、つれなくのたまへど、心のうちには、いふかひなく悲しきことをおぼすに、御心地もなやましければ、人に目も見合せ給はず。藏人の辨を召し寄せて、まめやかに、かかるよしを奏せさせ給ふ。大殿などにも、かかることありて、え参らぬ御消息など聞え給ふ。日暮れて、惟光参れり。かかる穢ありとのたまひて、参る人々も、皆立ちながら退出れば、人しげからず、召し寄せて、「いかにぞ、今はとて見はてつや」とのたまふまゝに、袖を御顔に押しあてて泣きたまふ。惟光も、なく／＼、「今は限にこそはものし給ふめれ。ながながと籠り侍らむも便なきを、明日なむ日よろしく侍れば、とかくのこと、いと尊き老僧のあひ知りて侍るに、言ひ語ひつけ侍りぬる」と聞ゆ。



のことを奏せしめて、更にこの弟に委曲を奏せしめられるのである。

○今はと見はてつや——夕顔はあれきりで、もはや再び蘇生することはなかつたか。

○今は限りにとこそは——今はもう御蘇生なさることもなく、この世の最後とこそなりなかつた。

○ながくと籠り侍らむも——こもりとは、東山の尼の住家に、夕顔の屍をかくして置くことである。長くあそこに置くのもよろしくないからして明日は葬儀をいたしませう。

○日よろしく侍れば——日柄も相應であるから。葬日の吉凶をいひし事で陰陽師などの説であらう。

○とかくのこと——葬送の儀をいふ。とかくなどまぎらばしていふのは葬といふを思ひていふことであらう。

頭中將は源氏の君の言を聞かれ、「そのやうなことであるならば、そのことを帝に申し上げませう。昨夜も帝が御遊びの序に、畏れ多くも源氏の君をお尋ねになり、遂に尋ね出すことが出来なかつたので、帝の御機嫌も悪うございました」と申されて一度出で立たれたが、又立ちもどられて、再び言はれるには「君には一體、どのやうな穢れに行き逢ひなかつたのでありますか。君の仰せられることは、眞實なこととも思はれません」と頭中將が再問なさつたので、源氏の君はそれを聞き、夕顔のことが露顯するのではないかと、はつと胸はつぶれたが、直ちに返答なさるには「斯く委細に申し上げないで、單に思ひも寄らない穢れに出逢ひましたと、帝に申し上げて下さい。あまり怠慢らしく聞えることですから」と、強情に仰せられるが、内心では、口には言はれない悲哀を思ひめぐらしになると、御心持も惱ましくなつたからして、世人にはお逢ひなさることを止められ、頭中將の弟の藏人の辨を呼び寄せて、斯様になつたことによしを、詳細に帝に奏聞させられる。又左大臣の許へも、このやうな事情があつて、参上いたすことが出来ないよしの、お手紙を送りなさる。

○さてその日も暮れた頃に、惟光が源氏の許に参上した。源氏の君は斯様な行觸にあつたことを仰せられて、誰にもお逢ひなさらないから、源氏を訪ねてくる人々は、そのまま立ちながら退出したので、君の御前には人が少ない。源氏は早速、惟光を御前近く呼び寄せて「どうであつた。今はもう夕顔は蘇生の見込がないと見てしまつたか」と仰せられると、又新しく君の胸には悲しみが溢れて、袖を御顔の中に押し入れて泣きなさる。惟光も悲しくなり、泣きながら「夕顔の君はとても蘇生なされる見込はなく、只今となつてはこの世の最後であると思はれました。さてその死骸をなかく山寺の中に隠して置くのも不都合なことでありますから、明日は恰度日柄もよろしく、座いますから、夕顔葬送の事は、大變尊い老僧でよく知り合ひである方に、頼んで置きました」と、源氏に申しあげた。

補 ○藏人の辨——職原抄に「五位藏人補藏人之日帶廷尉佐一勘解由次官二省輔三以之知朝獎之淺深也、自廷尉佐補藏人兼辨官此爲至極之朝獎、所謂三事兼帶是也、頗選中之選也。」とある。即ち藏人の辨に三つの道がある。或は省の輔兵等に任じて藏人に補し、辨官に任ずる一つ、或は勘解由次官に任じて藏人に補し、辨官に任ずる一つ、或は廷尉佐而兼使宜旨云之廷尉に任じて藏人に補し、辨官に任ずる一つ、以上となる。

評 頭中將一度は源氏の言を信じてその場を立ち去つたものゝ、何としても合點のならぬ節があつたので、又立ちもどり「陳べやらせ給ふことこそ、まこととも思ひ給へられぬ」と問ひ質し、源氏の君をして、胸もうちつぶれ、あつと冷汗を催さしめてゐるところ、文に波瀾を起さしめてゐる。さて頭中將には大略のことを奏上せしめ、弟の藏人の辨をして詳細の奏上をなさしめてゐる。又左大臣の許には参上出来ない旨を委細認めて御通知になるあたりは用意周到な筆の運びといはねばならぬ。

「添ひたりつる女は、いかに」とのたまへば、<sup>惟光</sup>「それなむ、またえ生くまじ

○添ひたりつる女——右近なます。



○谷にも落ち入りぬべく  
なむ——右近かなしみの  
あまりに谷に身をなげよ  
うとしたのである。古今  
集俳諧歌に「世の中の憂  
きたびごとに身をなげば  
ふかき谷こそあさくなり  
なめ」とある。

○かの故郷の人に告げ遣  
らむ——右近が彼の夕顔  
の宿の人にも知らせてや  
らうとするのである。

○事のおもひめぐらし  
て——右近が夕顔の宿に  
告げやらうとするのを、  
暫く思ひ留まれよ、事の  
さまを熟考してからにす  
るがよいと惟光がすかす  
のである。これは彼女房  
どもが慮しみ惑ひ、源氏  
の君に對してもよくない  
と思つたからである。

○こしらへ——なだめす  
かす。

○何か更に——何を今更  
斯く歎き給ふぞ。

○さるべきにこそ——萬  
づのこと皆前世からの宿

う侍るめる。われも後れじと惑ひ侍りて、今朝は谷にも落ち入りぬべくな  
む見給へつる。かの故郷の人に告げ遣らむと申せど、暫し思ひしづめよ。  
事のおもひめぐらしてとなむこしらへ置き侍りつる」と語り聞ゆるまま  
に、いとみじと思ひて、「われも、いと心地なやましく、いかなるべきに  
かとなむ覺ゆる」とのたまふ。「何か、更におもほしものせさせ給ふ。さる  
べきにこそ萬の事侍らめ。人にも漏さじと思ひ給へれば、惟光おり立ちて、  
萬はものし侍る」など申す。「さかし、さ皆おもひなせど、浮びたる心のす  
さびに、人をいたづらになしつるかごと負ひぬべきが、いとからきなり。  
少將の命婦などにも聞かすな。尼君、ましてかやうのことなどいさめらる  
るを、恥しくなむ思ゆべき」と口がためたまふ。「さらぬ法師ばらなどにも、  
皆いひなすさま異に侍り」と聞ゆるにぞかかり給へる。

源氏「あの夕顔の死骸と附いて行つた右近といふ女は、どうしましたか」と仰せられると、  
惟光はお答へして、「その右近と申す女も、これ亦再び生きられないやうであります。彼女は夕  
顔の君に後れないで、主君の死去の道づれとならうと、氣も狂ふ程で、今朝も谷に飛び込んで

縁でありませう。  
○人にも漏さじと云々——  
此のことを世人に聞か  
さないで置かうと思つた  
から、惟光親ら葬のこと  
を行つて、萬事の仕末を  
しました。

○さかし、さ皆おもひな  
せど——さやうだ、萬事  
皆前世からの宿業とは思  
つてゐるけれども。

○浮びたる心のすさびに  
——輕薄な心のなぐさめ  
に。

○かごと云々——恨ない  
ふ。恨を受けるであらう。

○少將の命婦——惟光の  
妹。

○さらぬ法師ばら——少  
將の命婦などに事の由を  
知らせぬば勿論のこと、  
それ以外の葬儀の僧たち  
にも、源氏に關係なきや  
うに言つて置いた。

○かかり給へる——それ  
によりかかりてたよりに  
する義。その辭で安心し  
なざるをいふ。

死なうとしてゐるのを見ました。又彼女は夕顔の宿の人に、夕顔の死を告げてやらうと申しま  
したが、まあ暫く心を靜かに鎮めよ、この事情についてはよく考へめぐらした上に、夕顔の宿  
にも知らしてやつたらよいと、すかしなだめて置きました。」と、お話し申し上げると、源氏の  
君にはそれはよく取り計らつてくれたと思召され、「吾も、甚だ心持が惱ましいので、一體どう  
なるのであらうと心配してゐる」と仰せられる。惟光「君には何を今更斯く御歎きなさるので  
ありますか、萬事斯くなるべき宿業であつたのでありませう。この事は總て世人に知らさない  
で置かうと存じましたから、私惟光が直接その局にあたり、萬事を仕末いたしました」など、  
申し上げる。源氏「さやうだ、萬事は前世からの宿業であるとは思つてゐるけれども、自分の  
輕薄な心のなぐさめに、彼夕顔を遂に亡き者にしてしまつたので、その恨みを受けるのが、甚  
だ苦痛である。汝惟光の妹である少將の命婦などにもこの事を聞かしてくれな。又汝の母で  
ある大貳の乳母の尼君は、斯様な浮氣なことを戒しめてゐられるのであるから、今は一層恥し  
く思はれます」と口止めをなさる。惟光「言ふまでもないことであります。少將の命婦などに  
事の由を知らせないのは勿論、それ等の人でなく、葬儀に關係してゐる僧侶に對しても、この  
事については源氏に關係のないやうに、他事にかこつけて置きました」と申したので、源氏の  
君もそれではと、惟光の言をたよりにして安心なされた。

補 ○谷にも落ち入りぬ——拾遺集哀傷、よみ人知らずに「鳥部山谷に煙のもえたゞばはかなく  
見えしわれとこそ知らなん」とある。○さかし——これ「さるべきにこそ萬の事侍らめ」と言



へるに對して、さうであるぞかしと源氏のたまひしものである。○かかり給へる——諸説あり、参考のために一二掲ぐると、細流抄には「なぐさむ心なり」、聞書には「霜がれの草のどざしのさびしさも霜にかゝる春の山ざと、定家卿の歌なり、此かゝるといへる同じ心なり。」、加茂真淵の源氏物語新釋には「それによりかゝりて有るをいふ。子にかゝり人にかゝりてなどいふも是なり」と、評釋には「右の説の中に新釋は少しいかゞ、これは拘はる義なり、上にいかなるべきにかとなんおぼゆるとの給ひしを結びて、かやうに申すにかゝはりて命をとりとめ給ふといふ意なるべし云々」と見える。

【註】 惟光がいろ／＼と源氏の君を思ひ、主のためによきやう取り計らうてゐる眞情がよく描かれてゐる。君臣の間の情には眞にこまやかなものがある。

○ほの聞く女房など——二條院に伺候してゐる女房どもである。  
○ほの／＼——うすうす。  
○事なくしなせ——難なく沙汰せよ。「のたまへど」にかかるとのである。  
○そのほどの作法——葬儀。  
○なにかこと／＼しくすべき——何も御心配には

ほの聞く女房など、怪しく何事ならむ。穢のよしのたまひて、内裏にも参り給はず。またかく叫き歎き給ふと、ほの／＼あやしがる。更に「事なくしなせ」と、そのほどの作法のたまへど、「なにか、こと／＼しくすべきにも侍らず」とて、立つがいと悲しく思さるれば、「便なしと思ふべけれど、今一度、かの死骸を見さらむがいといふせかるべきを、馬にてもものせむ」とのたまふを、いとたい／＼しきこととは思へど、「さおほされむは、いかが

及びません。仰山らしくすべきことでもないから。  
○立つがいと悲しく——惟光が無愛想に出で立つて行くのが悲しく思召されたのである。夕顔の限りと思ひなかつた爲め。  
○便なしと思ふ云々——不都合なことだと思ふが。  
○いぶせし——心晴れず。氣が塞ぐ。  
○いとたい／＼しき——氣が通まない。  
○この頃のやつれに云々——その頃夕顔の宿へ通ひ給ふとて、やつれたるさまに調じ給へる狩衣をとり出して着給ふのである。「やつれしは微行と解してよい」。  
○危ふかりし物態に——前の夜、某の院の變化の事にこり給ひて、どうしようと思つた源氏君はためらひながら、猶慮しきに堪え

せむ。はやおはしまして、夜更けぬさきに歸らせおはしませ」と申せば、この頃の御やつれに設け給へる狩の御装束著かへなどして出て給ふ。御心かきくらし、いみじく堪へ難ければ、かく怪しき路に出て立ちても、危ふかりし物態に、いかにせむと思しわづらへど、なほ悲しさのやるかたなく、只今の骸を見ては、またいつの世にか、ありしかたちをも見むとおほし念じて、例の大夫隨身を具して出て給ふ。路遠くおほゆ。十七日の月さし出て、河原のほど、御前驅の火もほのかなるに、鳥部野のかたなど見やりたるほどなど、ものむつかしきも、何ともおほえ給はず、かきみだる心地し給ひておはしつきぬ。

【註】 源氏の君と惟光とが問答してゐられるのを、臆氣に聞いてゐた二條院の女房どもは、これは不思議なことである、一體何事であらうか。けがれを蒙つてゐると仰せられて、宮中にも参内せられず、又只今は惟光と斯くひそ／＼と物語られて、御悲嘆に暮れてゐられる。これはどうも變なことであると、うす／＼不思議に思ふ。源氏の君は惟光に向つて、「夕顔の葬儀については難なくやつてくれよ」と仰せられたが、惟光は「何も御心配に及ぶやうなことはありません。仰山らしく致すことでもありませんから」と御返事を申し、お暇を申して出ようとした。この



られなくて出で給ふので  
ある。  
○只今の骸——今夜葬ら  
うとするのであるから、  
今のうちに夕顔の死骸を  
見なくては。  
○十七日の月——たま  
ちの月とよむべしといふ  
説もあるが、音でよんで  
よい。  
○河原——鴨川の河原。  
○鳥部野のかた——古來  
葬送の地として有名であ  
る。墓などあるので、平  
生の心ならば恐ろしかる  
べきのが、唯今の源氏の  
御心には何とも思ひたま  
はぬのである。

惟光が出で、行くのを、源氏は大變悲しく思召され、源氏は「不都合なことであらうが、今一度、彼の夕顔の死骸を見ないのが不安であるから、馬に乗つて共に行かう」と仰せられた。惟光はこれは氣の進まないことであるとは思つたが、「そのやうに思召されるならば、それはどうもしようがありません。早く御出でなされて、夜の深更にならぬ前にお歸りなさい」と申し上げると、源氏はこの頃、夕顔の宿に微行なさる爲めにお作りになつた狩衣の御装束に着換へなかつて出發なされる。御胸中は困惑して、甚だ耐へられぬほどであつたから、斯うした不思議な葬送の道に出かけられても、嘗て遭つた變化のことで、こり／＼したこともある爲め、今日の出で立ちは、どうしようかと當惑しなかつたが、それでも夕顔の死の悲しさが何とも仕方がなく、只今彼夕顔の死骸を見ないならば、再び何時の世に於てか、此の世ながらの彼女の姿を見る事が出来ようか、それはとても出来ないことである。斯く思ひ只今の門出の怖いことをも我慢して、何時もお伴をする惟光及隨身を連れていよく出發なされる。どうも途が遠いやうに思召される。見れば今宵は十七夜の月が照り渡つて、鴨河原のあたりに、前驅の者共が持つてゐる松明の火がほのかに見える。鳥部山のあたりを御覽なされるときなど、平生ならば物怖しくお思ひになるのが、今日は怖しとも何とも思召しにならない。胸中は掻き亂れるやうな心地で東山の尼寺にお着きなされた。

○鳥部野のかた——三條西家本には「に、鳥部野のかたなど見やりたる」までの文句がないこのところ評釋には「尼のすめる東山のへんを或抄に今の靈山のあたりならんかといへり。二

條院より出でそのわたりへ出でたち給ふに、河原のほどより鳥部野の見やらるゝなるべし」とある。鳥部野については地名辭書に「山城洛東鳥部郷の山野を曰ふ、古より墓所茶毘所にて今も其景狀存す。五條坂邊六條の東南是也。(西大谷近傍)名跡志云、六條の南は古の火葬所なり、白河院を鳥部野に送り奉る事續世繼に見え、法成寺道長も此に煙にし奉る事は榮華物語に見ゆ。慶長年中まで茶毘籠散在し遠戸と云ふ葬戸之を管領したり、阿彌陀峰下に豊國廟建ちたる時、鳥部の煙之に風靡するを以て制して此に煙を揚げしめず、而れども西本願寺要法寺などの墓所は尙此に在り」と見える。

嘗て遭ひたる變化の恐れさに戦きながら、戀々の情は絶えさせむとしてもそのよしなく、十七夜の月空に冴え渡る夜、鴨河原の川風に吹かれつゝ、松明の火をたよりに、夕顔の死骸を音づれるところ、綿々の情緒と凄愴の氣人に迫るものがある。

あたりさへすぎきに、板屋の傍に堂建てて行へる尼の住居、いとあはれなり。御燈明の影、ほのかに透きて見ゆ。その屋には、女一人泣く聲のみして、外の方に、法師ばらの二三人物語しつつ、わざとの聲立てぬ念佛ぞする。寺々の初夜もみな行ひはてて、いとしめやかなり。清水の方ぞ、光多く見えて、人のけはひもしげかりける。この尼君の子なる大徳の、聲たふ

○あたりさへすぎき——彼の尼の住家のさま。  
○わざとの聲立てぬ念佛——惟光かれてしのびやかにと誂へたために、わざと聲を立てずして、靜に念佛する様である。  
○寺々の初夜——諸寺初夜後夜の長講とて行ふのである。初夜の行法は午



從九時頃行ふ念佛である。

○清水の方ぞ——清水寺者千手觀音靈驗之地、行微居士孤庵之跡也、寶龜十一年初建立草堂、彫刻本尊と河海抄に見える。十七日の参詣人のさまである。

○大徳——梵語にては婆檀陀 *Pratiduta* といふ。增輝記に「行滿徳高曰大徳」と見え。高僧をいふ。

○涙残りなく——所のさまのいとあはれなるに、たふとげなるさまに經をよんだので、それを聞かれた源氏は悲しさを感じて涙を落しなさるのである。

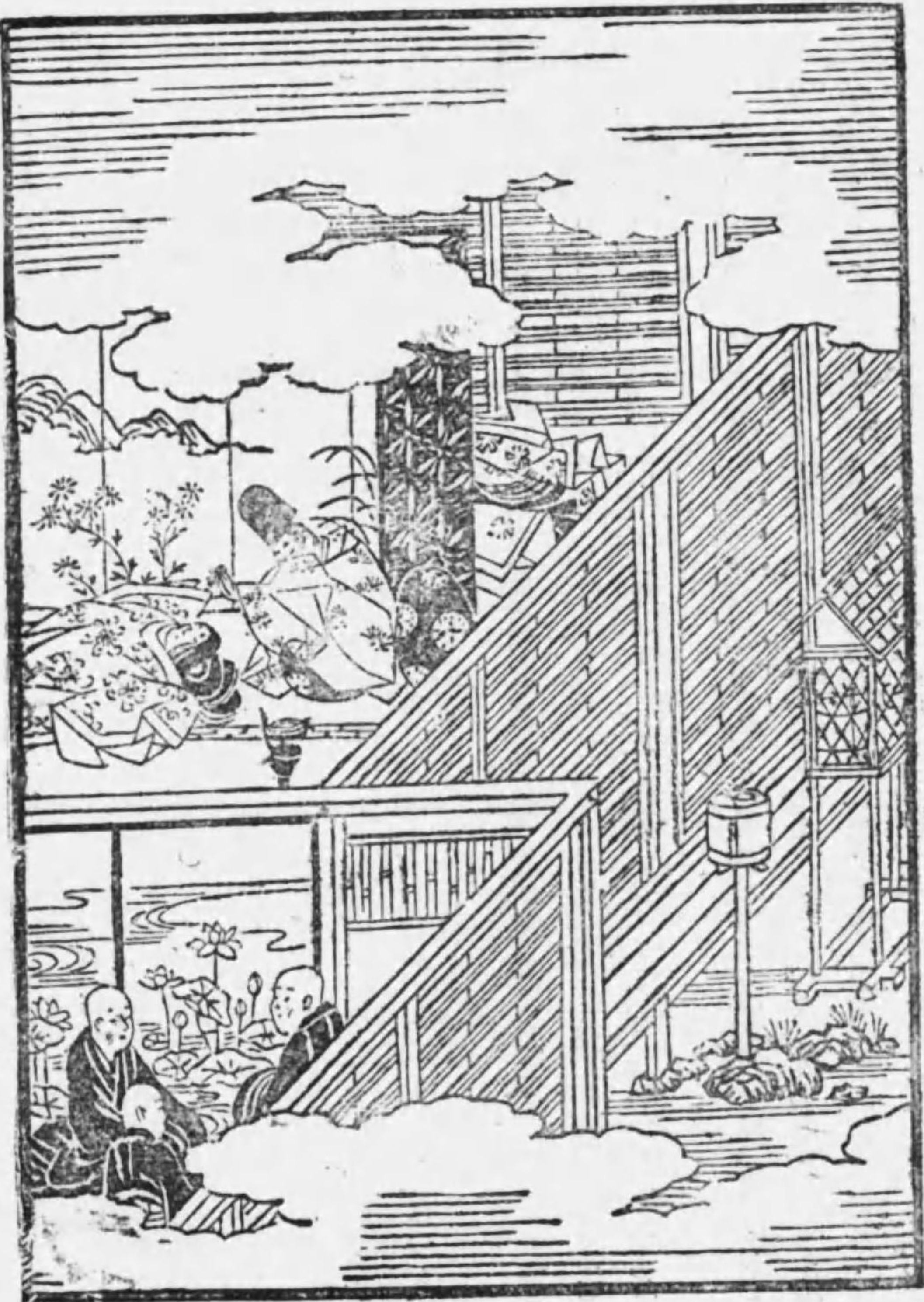
○火取りそむけて——死人の方へは灯をむけないでそむけるのである。

○昔の契——昔の世の契といふ意で、彼の宿縁のことである。

○誰とは知らぬに——大徳達は源氏をも夕顔をも誰人とは知らないが、不思議と思ひつつも、もらひ泣きするのである。

とくて經うち讀みたるに、涙残りなくおぼさる。入り給へれば、火取りそむけて、右近は、屏風へだてて臥したり。いかに佗びしからむと見給ふ。恐しきけもおぼえず、いとらうたげなる様して、まだいささかかはりたる所なし。手をとらへて、「我に、今一度聲をだに聞かせ給へ。いかなる昔の契にかありけむ。しばしの程に心を盡してあはれにおぼえしを、うちすてて惑はし給ふがいみじきこと」と、聲も惜まず泣き給ふこと限りなし。大徳たちも、誰とは知らぬに、怪しと思ひて、皆涙おとしけり。

源氏の君は遂に東山の尼寺にお着きなされた。この尼寺の附近は物凄い所であるのに、板屋の傍に御堂を建て、念佛修行をしてゐる尼の住家こそ、甚だ哀れなものである。佛前に供へてある御燈明の光が、ぼんやりと小さく隙間から漏れて見える。この住家には女がたゞ一人泣いてゐる聲ばかりが聞える、多分右近が泣いてゐるのであらう。さうして外の方には法師が二三人、物語をしながら、殊更聲を立てないでしのびやかに念佛をしてゐる。あたりの寺々では、最早初夜の行法も行ひ終つた頃であるから、ひっそりと静寂である。清水寺の方に燈火が點々と見えて、人がざわめいてゐる。この寺の尼君の子であるお僧さんが、有難い聲で經文を誦してゐるのを聞くと、泌み／＼と哀れが身に泌みて感涙があてどもなく流れ出る。さて板屋の





中へ源氏の君がお入りになると、夕顔の死骸の方へは灯をそむけ、屏風を隔たりとして右近が寝てゐる。このやうにしてゐては、どの位淋しいことであらうと御覧になる。次に夕顔の死骸を御覧になると、少しも恐ろしいやうには思はれない。甚だ愛らしい姿をして、まだ生前とは少しも變つたところがない。源氏の君は、死骸の手をとらへて、「どうか、もう一度我に汝のやさしい聲を聞かせてくれ。さてお前と我とは如何なる前世の宿縁であつたのだらう。暫らくの間とはいへ、心のありだけを盡して汝を愛したのに、この我を打捨て、お前が他界に去り、我をして心を取亂して悲しませるとは甚だしいことだ」と、何の遠慮もなく泣き悲しみなされることは果もない。そこに居合せたお僧達は、源氏とも夕顔とも知らないが、不思議と思ひつゝ、もらひ泣きをした。

**補** ○この尼君の子——細流抄に「惟光朝臣父の乳母子也。前に昔見給へし女ばらの尼にて侍る東山の邊にといひしが子也。」とある。○火とりそむけて——孟津抄に「源の御出でによりて火をとりのけたる也」とあるが、玉の小櫛には「源氏の御出によりてといふ注いかと。」と言つてゐる。

**評** 寺々の初夜の行法も終り、夜は静寂の中に更け行く折から、清水寺のあたりに、燈火點々とし、人聲がざわめいてゐる。哀愁に沈んでゐる者にとつては耐へられない淋しさである。このとき高僧の嚴かな讀經の聲を聞いては誰しも涙を禁じ得ないであらう。

○いかになり給ひにきと  
か——夕顔を斯くはかなしく奉りては人に違ふても、何といふてよいかその詞もない。  
○悲しきことかばさるものにて——悲しい事は言ふにも及ばないことであるから、それはそれとして。  
○煙にたぐひて——右近が自分も死んで、夕顔の火葬のけぶりと共になつて行きたい。  
○さなむ世の中はある——世の中といふものは、そのやうに頼みに思ふ人には、思ひかけない中に別るなどの事は、常に多くあるならひであるぞ。  
○とあるもかかるも——世の常の如く病死するも又夕顔のやうに餓死をするのも、是れ皆定命を終つたものであるから畢竟同じ事であるぞとの意。  
○かくいふわが身こそは

右近をば、いざ二條院へとのたまへど、「年頃幼く侍りしより、片時立ち離れ奉らず、馴れきこえつる人に俄に別れ奉りて、何處にか歸り侍らむ。いかになり給ひにきとか、人にもいひ侍らむ。悲しきことをばさるものにて、人に言ひ騒がれ侍らむが、いみじきこと」といひて、泣き惑ひて、「煙にたぐひて慕ひ参りなむ」といふ。「道理なれど、さなむ世の中はある。別離といふものの悲しからぬはなし。とあるもかかるも、おなじ命の限りあるものになむある。思ひ慰めて、われを頼め」とのたまひこしらへても、「かくいふわが身こそは、生き留るまじき心地すれ」とのたまふも、たのもしげなしや。惟光、「夜は明方になり侍りぬらむ。はや歸らせたまひなむ」と聞ゆれば、願のみせられて、胸もつと塞がりて出て給ふ。路いと露けきに、いとよしき朝霧に、何處ともなく惑ふ心地し給ふ。

**釋** 源氏の君は右近に對ひ、さあ、汝は我と共に二條院に來いと仰せられるが、右近は「數年來、幼少の時から、夕顔の君の傍を寸時も離れ申さないで、よくお馴染申したその夕顔の君に唯今急に死に別れては、一體どこへ私は歸りませうか。夕顔の君はどのやうにお成りあそばされか



——斯く右近には我を頼めと宜ふが、亦吾が身もこの世の中にながらへ居られない心地がするぞとの意。  
○いとゞしき朝霧に——唯でさへ心惑ひの折から甚だしい朝霧のため、一層途を迷ふ心地がされるのである。

夕 顔

四三四

と、世人に申しませう、申す言葉もありません。主に死に別れた悲しさはまあ、それとして、夕顔はどうして亡くなられたのであらうなどと、世間で言ひ騒がれるのが、甚だ苦しい思ひであります」と言ひながら泣き迷ひ、「私も死んで、夕顔の火葬の煙と一緒に、主の御跡を慕ひて参りたい」と右近は言ひ出す。源氏は「お、それは尤もなことだ、世間では別離といふことの悲しくないことはない。この世に長生し、遂に病で死ぬのも、又夕顔のやうに急なことで非常な死を遂げるのも、これは何れも皆、定つた壽命の最後を遂げたものであるぞ、まあそんなに悲しまないで、今のことは思ひあきらめ、今後は吾をたよりとせよ」と、源氏は右近をすかしなだめられながら、斯くしてゐられる御本人は、「斯く汝右近に申してゐる吾こそは、この世に生き永らへられぬやうな心地がする」と、言はれるのを聞いても、頼み甲斐のないことである。そこへ惟光が申すには「夜もだん／＼と明け方になりました。早く源氏の君にはお歸りなさい」とすゝめるので、源氏は詮方なく出で立たれるものゝ、夕顔のことが氣になり、後髪を引かれる思ひで、胸もひしと塞つてそこを出でられる。朝の路は露でしめつぽくなつてゐるのに、更に朝霧が深く立ちこめてゐるので、たゞでさへ涙に暮れてゐられる折からとて、一層心惑ひがして何處をあてとすることもなく、とぼ／＼と出でられた。

補 ○夜は明方になり侍りぬらむ——上に同じく惟光の詞に「夜ふけぬさきにはやかへらせおはしませ」とあつたのと照應してゐる。詳密な筆づかひである。

評 源氏は右近をなくさめなさるだけの勇氣はあつたが、自己自らの忿怒を慰むただけの元

氣はなかつた。

○ありしながら——世に生存して居たその時のままで、夕顔が寝てゐる姿。○うちかはし給へりし——男女寝るときに、その着たる衣を互にうちかけるなふ。○堤のほどにて——鴨川の堤。○かかる路の空にて、はふれぬべきにや——路の空とは、途中といふに同じ。空はかかるところなきものであるから、此方へも彼方へもいかぬ間のことか空といふ。「はふれ」は濡れと同じ言で、在所を離れて濡ひ歩くことである。○はか／＼しく——しつかりとしてゐる。○さのたまふとも——如何に仰せられるとも、御諒め申して此の御出を止むべきものであつたがと惟光の後侮するのである。

ありしながらうち臥したりつるさま、うちかはし給へりし、わが紅の御衣の著られたりつるなど、いかなりけむ契にかと、道すがらおぼさる。御馬にも、はかばかしく乗り給ふまじき御さまなれば、また惟光添ひ扶けておはしまさするに、堤のほどにて、馬よりすべりおりて、いみじく御心地惑ひければ、「かかる路の空にて、はふれぬべきにやあらむ。更にえ行きつくまじき心地なむする」とのたまふに、惟光も心地惑ひて、わが身はか／＼しくは、さのたまふとも、かかる道に率て出て奉るべきかはと思ふに、いと心あわたしければ、川の水にて手を洗ひて、清水の観音を念じ奉りても、すべなく思ひ惑ふ。君も強ひて御心を起して、心のうちに佛を念じ給ひて、またとかく助けられ給ひてなむ二條院へ歸り給ひける。怪しう夜深き御出行を、人々、見苦しきわざかな、このごろ、例よりもしづ心なき御忍歩のうちしきる中にも、昨日の御氣色のいと惱しうおぼしたりしには、いのでかくたどりありき給ふらむと、歎きあへり。

夕 顔

四三五



○川の水にて手を洗ひ—清水の觀音を念ずるとて、手を洗ひ清めるのである。  
 ○またとかく助けられ給ひて—惟光馬にかきのせ奉りなどして歸り給ふのである。  
 ○人々、見苦しき—二條院の女房どもが、源氏のさまを見て見苦しといふのである。  
 ○昨日の御氣色のいと惱しう—昨日惱ましくしてあられた御様子でありながら、斯くしのび歩きなされるのは、如何なることぞと女房共がなげきあふのである。

まだ世に生きてゐたそのときの儘の姿で臥してゐる夕顔、共に休んだとき互に打ち交して着た源氏の君の紅の着物を、只今夕顔の死骸がおのづと被つてゐるのなど、一體彼女と吾とはどのやうな宿縁であるのかと、歸りの道すがら源氏は思ひ召される。さて源氏は御馬にも、しつかりと乗られないやうな有様であつたから、惟光が附添うてお助けをなし、馬に乗つてゐられるやうにいたしたが、鴨川の堤のあたりで、源氏は馬上から、する／＼とすべり落ちなされた。そのため御氣分も悪くなつたから、源氏は「このやうな道の途中でうろ／＼するのではなからうか。この上は二條院へ、とても行かれないやうな心地がする」と仰せられるので、惟光もこれでは、どうしてよいのかと心惑ひ、自分がしつかりとしてゐたならば、如何に源氏がこのやうな場所に来ようと仰せられるとも、この如き道にはお連れ申すのではなかつたと思ふと、心持もせわしく不安になつて来たから、今は鴨川の流れて手を洗ひ清め、清水寺の觀音を祈念して佛の援助を願つたが、それでも、何ともしようが無く途方に迷ふた。源氏の君も亦、無理に元氣を出し、心の内に清水寺の佛を祈念し、惟光に助けられて馬に乗り、やうやくのことで二條院にお歸りなされた。源氏の君が斯く深夜に御微行なされるのを、二條院の女房どもは見苦しいことであるかと思つてゐる。この頃は平常よりも氣も落ちつかず御微行なされることが頻りにあるが、その中でも昨日は源氏は、御氣分も非常に悪くゐられたのが、どうしてあのやうに深更に、うろ／＼とさまよひ歩きなされるのだらうと女房どもは愁へなげいた。

○うちかはし給へりし—玉の小櫛に「すべてかはすとは、互に相交ふるをいひて、衣をうちかはすは、寝たる時男女たがひにうちかけまじへきぞ。さればこゝは、河原院にて、夕顔とね給ひたりし時、たがひにまじへ給へりし源氏君の御衣の、夕顔の死骸の方につきて、そのまゝにてあるを見給へる也。きられたりつるといふも、たしかに着たるにはあらず。おのづから死骸にまつはれて着たるやうにてあるさま也。」と見える。○わがはか／＼しくは—「わが身はか／＼しくは」とあつたものと思はれる。評釋に「湖月抄の頭書に引きたる文には、わが身とありて、細流にもわが身はか／＼しくば云々とあり、然らばもとは、わが身とありけんを寫しおとせるなるべし。身もじなくてはいかゞなり。」とある。

君は馬から落ち給ひ、惟光も途方に暮れて遂に手を洗ひ清め、清水寺の觀音に祈願するあたりは、何れも悲歎に暮れまどうてゐる景狀眼前に彷彿たるものがある。

○まことに臥し給ひぬる—昨日までは源氏は物思ひ又はげがらひに觸れ給へるを紛らす爲めの御わづらひであつたのが、今日は眞實にわづらひ給ふのである。  
 ○弱るやうに—衰弱して頼みすくなくなる意。  
 ○祭祝—神を祭り、穢れを祓ふことで病の新りなどに、これを行ふ事が古

まことに臥し給ひぬるままに、いといたう苦しがり給ひて、二三日になりぬるに、むげに弱るやうにし給ふ。内にも聞しめし、歎くことかぎりなし。御祈禱かた／＼にひまなくのしる。祭、祓、修法など、言ひ盡すべくもあらず。世に類なくゆゆしき御有様なれば、世に長くおはしますまじきにやと、天の下の人のさわざなり。苦しき御心地にも、かの右近を召し寄せて、局など近く給はりて侍らはせ給ふ。惟光、心地も騒ぎ惑へど、思ひの



は多かつた。陰陽家の行ふわざである。

○修法——佛法の祈りを行ふこと。

○世に類なくゆゆしき云々——源氏の君は世にたぐひなく、何事もめでたき方であるから、却て短命であられるのではないかと、天下の人が惜み感ぐのである。あまりにすぐれた人は命短きものであるとは今日でもいふ諺である。

○苦しき御心地——苦しき御心地の中でも、夕顔の形見と思して右近を召されるのである。

○局など近く——源氏の御座所近くに右近の部屋を賜はるのである。

○この人のたつきなしと——右近のたよりなしと思つてゐるのを、惟光が慰め助けて。

○君はいささか疎——源氏は御病氣が少しでもよ

どめて、この人のたつきなしと思ひたるを、もてなし助けつつ侍はす。君はいささか隙ありておぼさるる時は、召し出でて使ひなどし給へば、程なく交らひつきたり。服いと黒うして、かたちなどよからねど、かたはに見苦しからぬ若人なり。「あやしう短かりける御契にひかされて、われも世にえあるまじきなめり。年頃のたのみ失ひて、心細く思ふらむ、慰めにも、若しなからへば、萬にはぐくまむとこそ思ひしか。程もなくまた立ちそひぬべきが、くちをしくもあるべきかな」と、しのびやかにのたまひて、よわげに泣き給へば、いふがひなきことをばおきて、いみじう惜しと思ひ聞ゆ。

源氏の君は今度こそは、眞に御病氣になつて臥床せられたが、いよく苦しき思ひなされ、二三日の中に甚だしく衰弱しなされた。宮中でも源氏の君が病氣で衰弱なされたことを御聞きになり、非常にお歎きなされる。源氏の御病氣平癒の御祈禱があらゆるこちらでも、しつかりなしに騒がしく行はれる。祭だとか、祓、修法などと言ひ盡すことが出来ない。元來源氏の君と申す方は、並びない程勝れた立派な方であるからして、この世には永く生きてゐられないのであらう、即ち短命でゐられるに違ないと、世間の人は噂をするものもある。斯く重病では

○交らひつきたり——右近が二條院の女房どもと馴れるやうになつた。

○服いと黒うして——夕顔の君のために、右近喪服をつけてはえなく、姿もよくないが見苦しくない若人である。

○平頃のたのみ失ひて——右近夕顔の上か年頃たのみで、つかへしに、その頼みとする人を失ひてさぞ心細く思つてあらう。そのなぐさめに、吾若し永らへば、汝を養育しようと思つたが、吾も夕顔と共に死ぬらしいのが口惜しい。

○また立ちそひぬべき——程もなく吾も夕顔と共に死ぬであらうと思ふと口惜しい。火葬の煙と共に立ち添ふ意。  
○いふがひなきをばおきて——萬に養育しようと思つたが、その人が無くなり、頼みがひなき事はそれとして置いて

ゐられたが、それでも夕顔の君の忘形見ともいふべき右近のことを心配なされ、遂にお呼び寄せになり、御座所の近くに部屋を賜はつて、其處へ右近を住ませなされた。惟光は今又、君の病氣のことも出で、いろ／＼と心の中では騒がしいことであつたが、それでも心をしつかりとさせ、この右近がたよりない様に淋しがつてゐるのを助け慰めつゝ、君の側にお仕へ申させた。源氏の君が少しなりとも御氣分がよくゐられる時は、右近をお呼び寄せになつて召使はれたので、その後間もなく右近は二條院中の人々と馴々しく交際するやうになつた。右近は喪服を着て黒い姿をし、姿もあまりよい方ではなかつたが、それだからとて、整はない見苦しいところもない若い女である。源氏は仰せられるには「夕顔と吾との契りは不思議にも短かい契であつたが、その縁に引かれて吾も亦、この現世に永くゐられないやうだ。汝右近は數年來たよりとして仕へてゐた主の夕顔を失つて、さぞ心細く思つてゐることだらう。その汝の慰めとして、吾が永く生きられるならば、汝の萬事萬端について世話してやらうと思つてゐた。けれども今となりと、吾も程なくこの現世を去らねばならぬやうであるので、實に残念なことであるかな」と、ひそかに右近とお話しをなされて、弱々しくお泣きなされるので、右近は夕顔の亡くなつた今日、唯一人のたよりとしてゐる源氏の君が、斯くたよりないことはそれとさし置いて、美しい源氏の君の衰弱して行かれるのを、甚だしく口惜しがつてゐる。

○いふがひなきことをば——廣道の評釋に「舊注に夕顔の上のことをば置きてといへるはたがへり。これはよろづにはぐまんとの給へるをうけて、はぐまむ人なくたのみかひなき事を



も、眼前源氏の君の姿しくなり給ふ事が口惜しと思ふの意。

○殿の内の人——二條院中の人。  
○足を空にて——足をさかさまにしてなどいふのと同じく、奔走に暇無きをいふ。  
○雨の脚よりも——すべて事のしげきさまにいふ。  
○けに——異にの意。舊注にまさりてなりといへり。

○思し歎き——帝が。  
○せめて強く思しなる——源へが強いて心づよくしてあられる。  
○大殿——左大臣。奏の上の父。  
○けいめい——經營の意、世話する。  
○異なる名残——異なる餘病。  
○おこたりさま——病氣の快方におもむくさま。  
○穢ひ忌み給ひしも——御病氣快復の日と死穢の忌みの果てと同じく終つた夜。即ち九月十六七日頃。  
○大殿わが車にて——左大臣の車で直に奏の上の方へ、誘ひなされるをいふ。  
○九月二十日のほど——三十日餘りで全く御平癒なされたのである。前にはおこたるさまとあり、ここで本復されたのである。  
○ながめがちに——夕顔のことを思ひ出し、物思

夕 顔

四四〇

ばさしおきて、まのあたり源氏の君のむなしくなり給はん事を惜しく思ふといふ意也。なき給へばとあるばもじをあぢはふべしと見える。○服いと黒う——細流抄に「服色の色ふかき也。説々あり不可用敷」と、喪服は出仕にも憚らず着たものである。延喜の御子式部卿御子は六年着たまへるといふ。

「よわげに泣き給へば、いふがひなきことをばおきて、いみじう惜しと思ひ聞ゆ」といふ右近の述懐は、眼前に迫る自己の悲境を忘れて、君の美に沈惚としてゐるのであるから、今日の如きせつばつまつた世人の想像出来ない點である。これこそ平安朝時代に於ける感情生活、美的生活のあらはれである。

又源氏の君が如何に、美しき貴公子であつたかをも推察せしめる。

殿の内の人、足を空にて思ひ惑ふ。内裏より御使、雨の脚よりもけにしげし。思し歎きおはしますを聞き給ふに、いとかたじけなくて、せめて強く思しなる。大殿もいみじくけいめいし給ひて、日々にわたり給ひつつ、さまざまの事をせさせ給ふしるしにや、二十日あまり、いと重くわづらひ給へれど、異なる名残のこらず、おこたりさまに見え給ふ。穢ひ忌み給ひしも、ひとつに満ちぬる夜なれば、覺束ながらせ給ふ御心わりなくて、内裏

の御宿直所に参り給ひなす。大殿、わが御車にて迎へ奉り給ひて、御物忌、なにやかやとむつかしう慎ませ奉り給ふ。われにもあらず、あらぬ世に返りたるやうに、しばしは覚え給ふ。九月二十日のほどにぞおこたりはて給ひて、いといたう面瘦せ給へれど、なか／＼いみじうなまめかしうて、ながめがちにねをのみ泣き給ふ。見奉りとがわる人もありて、御物の怪なめりなどいふもあり。

源氏の君の御病氣は重態でゐらせられるので、二條院中の人々は、あちらこちらと奔走しながら、足をさかさまにしてあはてゐる。又宮中から御見舞に来る客は、降る雨のはげしいのよりもしげしい。帝は源氏の君の御病氣を心配してゐられるといふことを、源氏がお聞きなされ、甚だ畏れ多いと恐縮して、無理強ひに自ら強がりなされる。左大臣も源氏の君の御病氣については非常にお世話をなされ、毎日／＼二條院にお出でなされて、いろ／＼な事をせられた。その効果であつたか。二十日あまりの間、甚だしい重病であつたが、病氣の名残も残らず全快の方へ向ひなされた。御病氣の快方に向はれたのは、夕顔の死の穢れの忌みの終つたのと同じの夜であつたので、源氏は帝が御心配なされてゐられるの聞いてゐられた爲め、宮中のことも非常に心配なされ、その晩早速内裏の宿直所へ参内なされた。左大臣は自分の車で源氏の君を

夕 顔

四四一



ひながら髪をみつめてあられるのである。

吾が家にお迎へなされ、病後のこととて物忌、其他何や彼やとうるさい程慎しみなされた。源氏はこの間暫くは我心でもなく、この世ならぬ世界に生れたやうな氣でゐられる。九月二十日の頃には、いよ／＼御病氣も全快なされた。御身體は病氣で衰弱しお顔なども瘦せてゐられたが、却つて甚だ艶麗で、物思ひに沈みながら、聲を立てゝお泣きたされた。それを見奉つてとがめる人もあつて、これは何か魔にでも苦しめられてゐられるのだといふものもあつた。

**補** ○御物のな怪めりなど「ものゝけ」とは鬼物の氣が人の身に入つて、さまざまの怪しき事をいふ類である。他に知らせずひとりねになき給ふを見て、御物の怪であらうと人々が評するのである。

**評** 「御物忌にやかやと云々」の句には、舅の君である左大臣が、源氏を愛しなまつてゐられる眞情がよくあらはれてゐる。「むつかしう」と言つてゐる句は殊によい。こは源氏の君の心となつて言つてゐる言葉である。

○右近を召し出でて——こより又二條院のことである。  
○なほいとむ怪しき——夕顔の君が名乗りをしなかつたのは不思議である。  
○誠にあまの子云々——前に髪の子なればといつ

右近を召し出でて、のどやかなる夕暮に、物語などし給ひて、「なほ、いとむ怪しき。などで、その人と知られじとは隠い給へりしぞ。誠にあまの子なりとも、さばかりに思ふを知らで、隔て給ひしかばなむつらかりし」とのたまへば、「などてか、深く隠し聞え給ふことは侍らむ。いつのほどにてかは、何ならぬ御名のりを聞え給はむ。初よりあやしうおほえぬ様なり

た事を、思ひ出すのである。たとひ眞のあまの子で宿も定めない賤しき子であつても。  
○思ふを知らで——この「知らで」は、とんちやくせぬとか、かまはぬといふ意。  
○いつのほどにてかは云々——何時かは、つまらぬ御名前をお告げなることがあらう。  
○あやしうおほえぬ——夕顔が斯く源氏の君に逢ひ申すとは思ひもよらぬことであつたから。  
○御名がくしも——源氏の君は自分の姓を隠してゐられたが、夕顔は源氏の君ほどの人であらうとは想像してゐられたが。  
○等閑に——源氏が夕顔を深く心にとゞめなさないで、一時の慰めとしてゐられるため、斯く打ち解けなさないのであらうと夕顔がうらんでゐられた。

し御事なれば、現ともおほえずなむあるとの。ひて、御名がくしも、さばかりにこそはと聞えたまひながら、等閑にこそ紛はし給ふらめとなむ、憂きことに思したりし」と聞ゆれば、「あいなかりける心くらべどもかな。われはしか隔つる心もなかりき。ただかやうに人にゆるされぬふるまひをなむまだ習はぬことなる。内裏に諫めのたまはするを初め、つつむ事多かる身にて、はかなく人に戯言をいふも、所狭う取りなし、うるさき身の有様になむあるを、はかなかりし夕より、怪しう心にかかりて、あながちに見奉りしも、かかるべき契にこそはものし給ひけめと思ふも、あはれになむ。またうちかへしつらうおほゆる。かう長かるまじきにては、などさしも心に染みて、あはれとおほえ給ひけむ。なほ委しうかたれ、今は何事をかくすべきぞ。七日七日に佛書かせても、誰がためとか心のうちにも思はむ」とのたまへば、

**釋** 源氏は右近の君をお呼び出でになり、物靜かな或る夕暮にいろ／＼とお話しをなされたとき仰せられるには「夕顔の君はどうして、斯くまで自分の姓名を隠してゐられたのか、甚だ不思議



○あいなかり——つまり  
ない。  
○心くらべ——互に名を  
あらはすまいとしたこと  
即ち心に思ふすぢを立て  
あひて、まげまいとする  
こと。  
○隔つる心——隔て心。  
○人にゆるされぬふるま  
ひ——忍びあるき。  
○内裏——桐壺の帝。  
○ほかかりし夕より——  
彼の夕顔の花を折り取  
つた夕方から。  
○あはれとおぼえ給ひけ  
む——夕顔がどうして我  
にあはれと思はれたさつ  
たのであらう。  
○七日七日——補欄參  
照。  
○誰がためとか——名を  
知らなくては誰のためと  
か言はうや。

議なことである。嘗て彼夕顔が言つたやうに、眞に宿も定らないやうな賤しい漁夫の子である  
としても、吾があのやうにまで熱烈に思つてゐたのを、それにも頓着なく隔心があつたのは、  
どうも心苦しいことであつた」と語られたので、右近は「どうして夕顔の君はそのやうにお名  
前を隠してゐられるでせうか、そんなことはありません。何時かは平凡なつまらぬ名乗りを、  
申し上げなさるのであつたでせう。源氏と夕顔とお二人が相逢ひなされた最初の當時から、何  
となく不思議な思ひもよらぬ事であつたから、夢のやうに思はれるなど、仰せられ、源氏の君  
のお名を隠してゐられるのも、夕顔は心の中で高貴な源氏位の方であらうと想像しながら、そ  
れでも、私夕顔を深く心に留めてゐられず、欺いてゐられるのであらうとつらい事に思つて居  
られました」と申し上げたので、源氏「それでは、お互に自分の名前をあらはすまいとつまら  
ない意地張をしたことであつたなあ。吾は斯様に隔心があつたわけでもなかつた。又あのやう  
な世人の咎める微行は、吾もまだ習はないことであり、桐壺の帝もお止めなされてゐるのを始  
め、まだ他に對しても遠慮しなくてはならぬ事が多いこの身の上では、一寸とした戯談を一つ  
語るにしても、自由にならぬうさい境遇でありました。それを夕顔の花を折り取つた一寸し  
た夕方から、夕顔のことが不思議なほど氣になりました。それで不自由な境遇に居ながら、無  
理矢理に都合をして、彼女に逢つてゐたのも、かうなるべき短い因縁であつたのであらうと思  
ふと、可愛想であります。又振り返つて心苦しいことにも思はれます。彼女とは斯う短い契で  
あつたのに、なぜあれまでに強く吾が心に染み渡る程、可愛いと思はれたのであらう。今とな

○何かは隔て——これか  
ら右近が、何も隔てなく  
夕顔の身の上について語  
るのである。  
○口さがなく——口悪  
く。  
○三位中將——夕顔の  
父。  
○わが身のほどの——父  
が自分の官位のよくない  
ことを思つてあられて。  
○命さへ堪へ給はず——  
その上生命までが短命で  
あられた。

つては何も隠すことはあるまい。汝右近よ、詳細に夕顔の事情を話してくれ。七日七日に佛像  
を描かせて供養をしても、彼女の名が分らなくては、誰の爲めに供養するのかと、内々で心  
中に思うであらう」と仰せられると。  
○七日七日に佛書かせても——十三佛を、七々日の間にあてゝ書きて、亡者の爲に供養する  
ことをいふ。或抄に忌佛とて、七日々々の本尊を繪に書き、又は木像に作りて供養する事とい  
ふ。  
評 物靜な夕暮、源氏は亡き人の侍女である右近をお呼び出しになり、懇々と故人を述懐し、せ  
めてもの慰めとしてゐられるのである。

「何かは隔て聞えさせ侍らむ。自ら忍び過し給ひしことを、なき御後に、  
口さがなくやはと思ひ給ふるばかりになむ。親たちは、早う亡せ給ひにき。  
三位中將となむきこえし、いとらうたきものに思ひ聞え給へりしかど、わが  
身の程の心もとなさを思すめりしに、命さへ堪へ給はずなりにし後、はかな  
きものの便にて、頭中將まだ少將にものし給ひし時、見染め奉らせ給ひて、  
三年ばかりは志あるさまに通ひ給ひしを、去年の秋の頃、かの右の大殿よ  
り、いと恐しきことの聞えまうで來しに、物懼をわりなくし給ひし御心に、



○はかなきものの便にて一寸した機会。  
 ○右の大蔵——頭中將の北の方四君の父である。物のたよりにつけておどしなかつたことが、帯木の巻に出づ。  
 ○御乳母——揚名介の妻の母である。  
 ○今年よりは——世に言ふ三年寒りなどかきすものであらう。  
 ○違ふとて——方違へとて五條の家に移りなかつた。

○怪しき所にも少し——賤しい場所にお移りなされたのを。  
 ○見顯はされ奉りぬる——源氏の君に見見せられた。  
 ○奉りぬること——この語の下に「なむ」の語があつたらしく思ふ。  
 ○つれなくのみもてなし——夕顔は物思ひのある身でありながら、つれなく物思ひのないやうな

せむ方なう思しおぢて、西の京に、御乳母の住み侍る所になむはひかくれ給へりし。それも、いと見苦しきに住み侘び給ひて、山里に移ろひなむと思したりしを、今年よりは、塞がりたる方に侍りければ、違ふとて、怪しき所にも少し給ひしを、見顯はされ奉りぬることと思し歎くめりし。世の人に似ず、物づつみをし給ひて、人にもものを思ふ氣色を見えむを恥しきものにしたまひて、つれなくのみもてなしして、御覺せられ奉り給ふめりしか」と語り出づるに、さればよと思しあはせて、いよくあはれもまさりぬ。

さて右近が言ふには「何を隔てがましくも隠しませう。只今は赤裸々に申し上げます。唯夕顔の君が御自分では秘め隠してゐられたことを、御逝去後の今日それをあばくとは、口悪いことだと思ふばかりであります。夕顔の兩親達は早いうちに死なれました。父親は三位中將と申す方でありませう。娘夕顔を大變可愛い者だと愛してゐられた。従つて夕顔の良縁も考へてゐらつしやつたが、御自身の身分もあまりよくないことを思ひ心配してゐられたが、なほその上壽命も短くて亡くなられた。その後一寸とした機会に、頭中將がまだ少將でゐられたとき夕顔を見染められ、それ以來約三年程志があつて、頭中將は通つてゐられました。それが去年の秋頃、頭中將の北の方の御父にあたる右大臣殿から物凄いいことを言つて來られたので、生來物事

態度をして源氏の君に見せなかつたのである。  
 ○給ふめりしか——しかとあるときは「もてなし」の次に「こそ」の字がなくて文法上整はない。多分落ちたものであらう。  
 ○さればよ——かの頭中將の語つた常夏のことを疑つてゐられたのが、今聞きあらはされて、成程と源氏が合點なされたのである。

に非常にこわく恐れなざる性質でゐられる夕顔の君は、詮方なく怖れ思はれて、西の京に居た御乳母の住家へ、こつそりとお隠れなされた。さてそこは甚だむさくるしい所であつた爲め住み困つて、山里の方へ移轉しようかと思召してゐられたが、恰度その方向は今年から塞がりの方向でありましたので、方違として、京の五條の賤しい所に住みなさつたのであります。そのとき源氏の君に見つけられたことを、夕顔の君は思ひ歎いてゐらつしやいました。元來夕顔の君は世人とは變つた性質で、何事も心の中に包み隠し、自分が戀ひ慕ふ情があつても、それを世人に見られるのを、恥かしいことに考へられ、従つて源氏の君の御情を受けても、無情なもてなしをなされてゐられたのです。この事は君にも御覽になつてよく御承知のことでありませう」と語りだしたので、源氏の君は何程それでこそ、彼の頭中將が常夏のことを言つたのを疑つてゐたが、それも十分合點が出来たとなづかれ、いよく夕顔は可愛いものであつたと同情なされた。

○三年ばかりほ——眞淵の新釋に「頭中將三年かよひ給ふ二年めに、玉かづらの君生れ、三年めにうき事ありて外へかくれ、四年めに源のかよひ給へり、此次の年、玉かづらの四つなるを筑紫へゐてゆく」とある。

右近は此處で始めて、夕顔の君が轉々として物憂い生涯を送つてゐられたことを述べ、源氏の君をしてそゞろ哀感を催さしめ、一段と夕顔の君に同情の念を起さしめてゐる。「世の人に似ず、物づつみをし給ひて、人にもものを思ふけしきを見えむを恥しきものにしたまひて云々」の



句はつゞまじやかな女性であつた夕顔の性格を遺憾なくあらはしてゐる。

「幼き人惑はしたりと中將の憂へしは、さる人や」と問ひ給ふ。「しか。一昨年（去年）の春ぞものし給へりし。女にていとらうたげになむ」と聞ゆ。「さて、何處（いづこ）にぞ。人に、さとは知らせで、われに得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御かたみに、いと嬉（うれ）しかるべくなむ」との給ふ。「かの中將にも傳ふべけれど、いふかひなきかごと負ひなむ。とさまかうさまにつけて、はぐくまむに、咎（とが）あるまじきを、そのあらむ乳母（乳母）などにも、ことさまにいひなしてものせよかし」など語（かた）ひ給ふ。「さらば、いと嬉（うれ）しうなむ侍るべき。かの西（にし）の京（きやう）にて生ひ出で給はむは、心苦しうなむ。はかくしくあつかふ人なしとて、彼處（かこ）になむ」と聞ゆ。

源氏「嘗て頭中將は幼い童があつたが、その子供も共に失つてしまつたと心配してゐたが、そのやうな幼児があつたのか」と尋ねなされる。右近「さやうでございます。一昨年（去年）の春、一人の御子様がお生れになりました。それは女の子で、大變愛らしい子でありました」と申し上げる。すると源氏の君は「さてその子供は何處（いづこ）にゐるのか、世人にはそれとは知らさないで、吾にその子をくれよ。夕顔の死んだ後は、これといふ残つたものも無く、まことにたよりなく

○幼き人惑はしたり——幼き兒のあつたが、それも共に迷子になりたりと頭中將が言つてゐたが、然やうな人があるのか。○あとはかなくいみじと思ふ——夕顔が死んでしまつた後には、是といふ残つたものもない。まことにばかなくたよりないこと（こと）で悲しく思ふ。○かたみに——夕顔の忘れ形見に。○いふかひなきかごと負ひなむ——つまらない想ひを受けることであらう。○とさまかうさま——夕顔やその子どもは、あれやこれやについて、いろいろな關係があることだから。○そのあらむ乳母にも——その幼き人の養育を司つてゐる乳母にも。○ことさまに——何か異やうに話して。

○西の京——乳母の宿のあつたところ。○はかばかしくあつかふ——夕顔の方では誰も、しつかりとして育てる人がないので西の京で養ふのである。

悲しいことに思つてゐるから、その子を忘形見として見よう、それこそ大變嬉しいことであらう」と仰せられる。猶源氏は「彼の頭中將にも夕顔の死を告げるであらうが、そのときはつまらない小言を受けることであらう。何れにしてもいろいろな關係があるから、その幼な子を養育してやらうと思ふが、何等咎めらるべきでもないだらうから、その子の乳母などに、源氏からの仰せであるなどは知らせないで、他事にかこつけて連れてきてくれよ」など右近に話される。是れを聞いた右近は「そのやうになれば、甚だ嬉しいことでもあります。彼の西の京の乳母のもとで御生長なさるのには心配になることである。彼の御子にはしつかりとした養育の世話人がないといふので、今日まで西の京の乳母のもとにゐられたのであります」と申し上げる。

○われに得させよ——評釋に「此一段玉かづらの巻を書き出づべき伏案なり。玉かづらを尋ね出し給はん料に右近を二條院へのこしとゞめ、さてそれにかたらへあつらへ給ふ事を先づいひて、後に初瀬にて右近が玉かづらにあひし事の都合ならぬやうにかまへられたる筆つきいとたくみなり、見ん人心をとゞむべし」とある。○かの中將にも傳ふべけれど——眞淵の新釋に「頭中將に知らせば、彼の隠れたるも源のわざなりとかごとおひなん。そも世にある人故ならばさてもありなんを、かゝる後にはいよ／＼いふかひなき恨をうけんものと也。されどさる事のいひわけにも、又女君の靈の思はん所につけてもてふを、左につけ右につけとはの給ふ也」と言つてゐる。けれども「とさまかうさま」の解については宣長の玉の小櫛にある「夕顔の形見にもあり、又頭中將の子にて、葵の上の姪にてもあれば、いづれにつけても外ならねばと也」



とある方がまさつてゐる。

夕暮のしづかなるに、空の氣色いとあはれに、御前の前裁かれくくに、蟲の音も鳴きかれて、紅葉のやうく色づく程、繪に書きたるやうに面白きを見わたして、心より外にをかき交ひかなと、かの夕顔のやどりを思ひ出づるもはづかし。竹の中に、家鶴といふ鳥の、ふつつかになくを聞き給ひて、かのありし院に、この鳥の鳴きしを、いと恐しと思ひたりしさまの、面影にらうたくおもほし出でらるれば、一年はいくつにかものし給ひし。怪しく世の人に似ず、あえかに見え給ひしも、かくながるまじくてなりけり」とのたまふ。

もう夕暮となり物静かである。秋のことゝて空の澄み渡つてゐる氣色は、なか／＼情趣がある。御前にある庭の草々は枯れた姿となり、蟲の鳴く聲も弱つてゐる。又木の葉は美しい紅葉をなし、實に繪に書いたやうな美しい景色である。右近はこの美しい景色を眺めながら、斯うして二條院の人々と交際するやうになつたとは、思ひがけないことであつたと考へると、彼の五條に居た頃のむさくるしい夕顔の宿を思ひ出して恥かしい氣がする。折から竹藪の中で家ばといふ鳥が不器用な聲で鳴いた。源氏はこれをお聞きになり、彼の河原院でこの家ばとが鳴

○心より外に云々——右近が二條院での交ひと思ひの外のことであると思ふのである。  
○かの夕顔のやどりを——今この御前の有様に對するについても、夕顔の宿のことと思ひ出して恥づるのである。  
○ふつつかに——不器用に。  
○かのありし院——彼の河原院には、終日居られたことであるから、家ばとの鳴いたこともあつたであらう。それを思ひ出すのである。  
○い、恐しと思ひたりしさま——夕顔が恐しく思つてゐたさま。  
○あえかに——かよわく。

いたとき、夕顔はこの鳥の鳴き聲を非常に恐ろしいものと思つてゐた様子が、眼前に見えるやうに愛らしく思ひ出されたので、源氏は「夕顔の君の年齢は一體いくつであつたか、不思議に世人とは違つて、弱々しく見えたのも、結局あのやうに短命であつた爲めでありませう」と、右近に仰せられる。

評 このところの評としては、萩原廣道の評釋にある次の評は最もよく言ひあらはしたものである。故に左に引用して置かう。「例のけしきを書かれたる筆つきいとめでたし、秋の末のありさまを二三句につくされたり。さてこのけしきのいみじきにあはれを催し、且源氏君の御かたちのいみじきに感じて、右近が思ふ心をうごかし、次に鳩の事をとり出て、源氏君のかなしびを動かしたる、例のいといみじき筆なり。けしきの徒ならぬをあちはふべし」とある。眞に源氏が情景兼ね至れる名文であることには、誰しも感歎隨喜することであらう。

十九にやなり給ひけむ。右近は、なくなりけむ御乳母の棄て置きて侍りければ、三位の君のらうたがりたまひて、かの御あたり去らず、生ふしたて給ひしを思ひ給へ出づれば、いかでか世に侍らむとすらむ。いとしも人にと悔しくなむ。物はかなげにもし給ひし人の御心を、たのもしき人にて、年頃馴ひ侍りけること」と聞ゆ。「はかなびたるこそ女はらうたけれ。

○なくなりける御乳母——右近の母も夕顔の乳母であつた。右近の幼少この母が死んだので、それから夕顔の父の許で育てられたのである。西の京の乳母は、右近の母が死んでからのことであらう。  
○いかでか世に侍らむと



すらむ——御恩を思ひ出せば夕顔の君と共に死なればならぬ恩義情誼があるから、どうして生き永らへようとするか。  
 ○いとしも人にと——拾遺集戀四、讀人不知に今本は「思ふとていとこそ人になれざらめしかならひてぞ見ればこひしき」とあるのによつたもので始めから馴れなかつたならば、まあよかつたのにかく御恩を蒙つては今となつて却て悔しいといふのである。

○はかなびたるこそ女は——女はしつかりとせないう方がよい。  
 ○自ら云々——源氏自ら。  
 ○すくよか——はきくとした強い。  
 ○とりはづしては——ひよつとすると。悪くするものづつみし——物に恥づること。

かしこく人に靡かね、いと心づきなきわざなり。自らはかゝしくすくよかならぬ心ならひに、女はただ柔和にて、とりはづしては、人に欺かれぬべきが、さすがにもものづつみし、見む人の心には従はむなむあはれにて、わが心のままにとり直して見むに、なつかしく覺ゆべき」などの給へば、  
 「この方の御好みにはもてはなれ給はざりけりと思ひたまふるにも、口惜しく侍るわざかな」とて泣く。空のうち曇りて風冷やかなるに、いといたくうちながめ給ひて、

見し人のけぶりを雲とながむればゆふべの空もむつまじきかな  
 とひとりごち給へど、えさしいらへも聞えず。かやうにておはせましかばと思ふにも、胸のみふたがりておぼゆ。耳かしがましかりし砧の音を思し出づるさへ戀しくて、まさに長き夜とうち誦じて臥し給へり。

源氏のお問ひに對し、右近がお答へして申すには「夕顔の君は十九歳になられたのでありませう。私の母は夕顔の君の乳母でありましたが、その乳母が死にまして、私がこの世に棄てられましたところが、夕顔の父、三位中將が私を可愛い者だと愛して下されました。私は夕顔の

○見む人——夫をさす。  
 ○この方の御好みには——今源氏が仰せられるやうなお好みには夕顔は少しもはづれるところのないよい方であつた。  
 ○見し人のけぶり云々の歌——補欄参照。  
 ○かやうにておはせましかば——只今右近が源氏に近く馴れてある如くに夕顔の君が源氏の君とお居でなされば嬉しいことだらうと思ふと。  
 ○まさに長き夜——白氏文集に「八月九月正長夜、千聲萬聲無<sub>二</sub>止時<sub>一</sub>」とある句をいふ。

君と二人共々に三位中將の御許を去らず、育てられたことを思ひ出すと、どうして夕顔の君に後れて、この世に生き永らへることが出来ませうか、とてもそれは出来ないことであります。三位中將に甚だしく御世話になつたのが、今となつては却つて悔しいことでもあります。しつかりとなさらない夕顔の御心を、頼もしき主君として、數年來馴れ親しんできました」と言ふ。  
 すると源氏は「しつかりとしない弱い女こそ愛らしいものである。聰明で人に磨き従はないやうな烈い女は、甚だ厭なものである。吾はしつかりとせぬ弱々しい心であるから、女はたゞ柔和な性質で、ひよつとすると、人に欺かれる位の女が、女らしく萬事に恥づかしがる點があつて、夫の心に從順であるのこそ可愛いものである。そのやうな女を夫の心のまゝに導いて行くのも愛らしく思はれるものである」など仰せられると、右近は「今君が仰せられるやうな御好みには、夕顔の君はすつかり合つてゐられた方であると思ふにつけても、おかくれになつたのが残念なことでありませうか」と言つて泣くのである。折から空は曇りだし、風がひややかに吹いてくる。源氏の君は物思ひに沈みながらあたりを眺めて、

見し人のけぶりを雲とながむればゆふべの空もむつまじきかな  
 と獨言をなされたが、右近はこれに對して何とも御返歌を申し上げない。右近が思ふやう、私  
 が今、源氏の君の側に居るやうに夕顔の君が君の側にゐられたならば、それこそぞ楽しいことであらうと思ふにつけても、胸が塞がるのである。源氏は五條の宿に居たときに、耳やかましかつた砧の音を思ひ出しなされるのでも、あの當時のことが戀しくなり、白氏文集にある「ま



さに長き夜」と詩の句を口ずさんで御寝につかれた。

○いとしも人に——孟津抄には「思ふとていとしも人になれざらんしかならひてぞ見ねば戀しき」とある。○見し人のけぶり云々の歌——嘗て見た人即ち夕顔を火葬したときの煙が、夕空のあの雲であらうと思つて眺めてみると、亡き人の行方であるかと思はれて、夕方の空までがなつかしいことである。

源氏は夕顔のことから右近の素性までも聞き、亡き夕顔の面影は忘れようとしても忘れられず、遂に暮方の空を眺めて故人を慕ふ。悲涼の情紙面に溢る。

彼の伊豫の家の小君参る折あれど、殊にありしやうなる言傳もし給はねば、憂しと思しはてにけるを、いとほしと思ふに、かく煩ひ給ふを聞きて、さすがにうち歎きけり。遠く下りなむとするを、さすがに心ほそければ、思し忘れぬるかと試に、「うけたまはり惱むを、ことにいててはえこそ

問はぬをもなどかと思はて程ふるにいかばかりかは思ひみだるる

益田は、まことになむ」と聞えたり。珍しきに、これもあはれ忘れ給はず、「生けるかひなきやいかに。誰がいはいましごとにか、

空蟬の世は憂きものと知りにしをまた言の葉にかかる命よ

○彼の伊豫の家——これから空蟬のことを記す。○憂しと思し——空蟬の心である。○遠く下りなむ——伊豫介が空蟬を具して任國に下るのである。○思し忘れぬる——源氏の君が空蟬のこと忘れられてあられるかと。○うけたまはり惱むを云々——源氏の御病氣でられるのを拜聞し、私空蟬の方では心配してゐますが、それが言葉に出しては、お尋ねもいたしま

せんでした。○同はぬをなどかとの歌——補欄参照。

○益田——補欄参照。○これもあはれ忘れ給はず——源氏は夕顔のことばかりを追想してゐられる折柄ながら、空蟬のことも矢張忘れられない。

○生けるかひなきや云々——生きてゐる甲斐がないといふのか、それは以前の言ふことでなくしてこちらの言ふべきことである。

○空蟬の世は憂きものと云々の歌——補欄参照。○はかなしや——言の葉にかかりて生きとまりたる命もはかなしと、歌よりつづけたる歎息の詞である。

○御手もうちわななかる——病後の衰弱してゐられるさま。みだれかき給へるさま、かへりてうつくしといへるのである。○かのもぬげを云々——

はかなしや」と、御手もうちわななかるるに、亂れがきたまへる、いとどうつくしげなり。なほかのもぬげを忘れ給はぬを、いとほしうもをかしようも思ひけり。かやうに憎からずは聞えかはせど、氣近くとは思ひもよらず。さすがにいふかひなからずは、見え奉りてやみなむと思ふなりけり。

さて彼の伊豫介の許の小君が、源氏の許に来ることはあるが、源氏の君は特別に以前のやうに傳言をもなさないから、空蟬が思ふには源氏はもう私のことについては、心愛い女だとあきらめなされたのである。それは甚だ氣毒であつたと思ふにつけ、今又源氏が斯く御病氣でゐられると聞いては、矢張源氏のこと氣毒になつて歎かれるのであつた。今自分は遠く伊豫の國に下らうとすると、矢張り源氏の君と離れることが心細いのであつた。それで最早源氏の君は私の事をすっかり忘れてしまはれたのかと試みに消息をなされた。その文に「源氏の君には御病氣でゐられることをお聞き致しましては心配してゐますが、それは言葉に出してはなか／＼申されぬ程であります。

問はぬをもなどかと思はて程ふるにいかばかりかは思ひみだるる、われぞ益田の生けるかひなきといふ古歌の通り、まことに源氏の君には苦んでゐられるでありませうが、私はそれよりも生ける甲斐もない境遇にあります」と申し上げた。源氏はこの消息を受け取りになり、珍しいことであつたので、この空蟬のこともお忘れにならない。早速源氏



空蟬の世云々の歌を見ると、源氏はまだあのありし世のもねけのことを、御忘れにならぬのであると。

○氣近く——親み近づくこと。

○さすがにいふかひなからず——一向にかけ離れてしまふのも、さすがに本意ないことである。

夕 韻  
からこれに對する御返事があつた。その消息文に「生ける甲斐ないとお前は言つたが、それはどうだらうか。一體それは誰が言ふべき言葉であらうか、お前の言ふ可き言葉でかくして、吾が言ふべき語であらう。」

空蟬の世は憂きものと知りしをまた言の葉にかゝる命よ

その命は、はかないものであるわいと、病後の衰弱で手もぶる／＼とふるへながら、亂れ書きをなさつたのは、甚だ美しいものである。空蟬はこの御手紙を受け取つて思ふには、源氏の君は今となつてもまだ、彼のもねけの事件についてはお忘れでないのである。これは氣毒なことでもあり、又可笑しいことでもあると思つた。斯様に厭しくも思はないでお互に消息文の往復はしたが、それだからとて空蟬は親しく源氏の君に近づかうとも思はない。さうはいふけれども、自分はつまらぬ者でない、相當な女であると見られて、そこいらあたりの程度で止みたいものであると思ふのであつた。

○問はぬをなどかとの歌——私が君の御病氣は如何でありますかと、お尋ねいたさないうで失禮してゐますのを、君はなぜおれの病氣を訪ねないのかと、お叱りなさらないうで久しく経過するのは、私にとつてはどれ程胸中に思ひ悩むことでありませう。實に苦しい思ひであります。

○益田——拾遺集卷十四、戀四によみ人知らずとして「ねぬなはのくるしかるらん人よりも我ぞ益田の生けるかひなき」といふ歌があるが、その歌の意によつて書いたものである。ねぬなはのはくるの枕詞、益田の池は大和國高市郡にある。池と生けるとを掛けたのである。○生け

るかひなきや——この句については評釋に「案に湖月抄頭書に秘訣を引たる所の文に、いけるかひなきやいかにと記せり、之はさる本のありしを引きたるが本文には脱しゝなるべし。かくては意明らかなる故に、今いかにといふ語を補ひつ」とある。○空蟬の世は憂きもの云々の歌——此の世の中は心憂いものとは知つてゐましたが、今又このやうに空蟬から言葉をかけられると、その言葉にたよつて生き止まる私の命でありますよの意。空蟬は枕詞であるが、猶かのもねけの一件の意も含ませてゐる。

空蟬といふ女は情愛がないやうで、なか／＼情愛に富んだ女である。又打解けようとして打解けられない女であつた。彼女の斯うした性格は「問はぬをなどか」と問はでほど経るにいかにばかりかは思ひみだるゝ」の一の歌に十分あらはされてゐる。

かの片つ方は、藏人の少將をなむ通はずと聞き給ふ。あやしや。いかに思ふらむと、少將の心の中もいとほしく、またかの人の氣色もゆかしければ、小君して、「しにかへり思ふ心は、知り給へりや」といひつかはす。

ほのかにも軒端の萩をむすばずは露のかごとをなにかけまし  
高やかなる萩につけて、忍びてとのたまへれど、取りあやまちて、少將も見つけて、われなりけりと思ひ合せば、さりとも罪免してむと思ふ御心お

○かの片つ方は——片つ方の人はの意で、即ち軒端の萩をさす。  
○あやしや——源氏の君のなかいぞと思召すのである。  
○しにかへり——死ぬほど、「かへりしは、その事をよくいふことばである。きえかへる、わきかへるなどの如し。  
○ほのかにも軒端の萩云



々歌——補欄参照。  
 ○高やかなる萩——人目をばからざる爲めである。わざと少將に見せようとしてなしたのである。

○われなりけりと思ひ合せば云々——軒端の既に男女の交してゐたのは源氏の君のしわざであつたといふことを思ひ合したならば、たとひ破瓜の後であるとしても、その罪をゆるすであらう。

○口ときばかりをかごとにて——歌はわるいけれども、早く出来たことばかりを申わけとして。かごとはいひわけないふ。  
 ○ほのめかす風に云々の歌——補欄参照。  
 ○手はあしげなるを——筆蹟は悪筆であるのか。  
 ○まぎらばし——ごまかし。  
 ○ざればみ——洒落れてゐる。  
 ○火影に見し顔——碁を

ごりぞあいなかりける。少將のなきをりに見すれば、こころうしと思へど、かくおほし出でたるもさすがにて、御かへり、口ときばかりをかごとにて取らす。

ほのめかす風につけても下萩のなかばは霜にむすほほれつつ

手はあしげなるを、まぎらばしざればみて書いたるさま、品なし。火影に見し顔おほし出でらる。うちとけて對ひ居たる人は、え疎みはつまじきさまもしたりしかな。何の心ばせありげもなく、さうどきほこりたりしよと思し出づるに、にくからず。なほこりずまに、またもあだ名は立ちぬべき御心のすさびなめり。

今一人の方の軒端の萩は、藏人の少將と通じてゐられることを源氏はお聞きなされた。そこで源氏の君は思ひなざるには、彼軒端の萩と我は既に關係してゐたのだから、彼女は處女ではない。故に藏人の少將はこれを不思議に思つてゐるに違ひない。これはをかしいことだ。一體少將はこれをどのやうに考へてゐることであらうと、少將の胸中も可愛想であるし、又彼の軒端の萩の様子も知りたかつたので、小君を使として消息をなされた。その手紙には「私は死ぬほど強くあなたのことを思つてゐるが、この私の胸中の思ひをあなたは御存じでありますか」

打つてゐた夜のことである。

○うちとけで——空蟬のことである。  
 ○何の心ばせありげもなく——ここから軒端の萩のことをいふ。何のおもむきもなく。  
 ○さうどき——騒ぎ立つ。  
 ○こりすまに——源氏の君は夕顔空蟬などに驚り給はずに。古今集に「驚りすまに又も無き名は立ちぬべし人憎くからぬ世にし住まへば」の歌によつたもの。

と言つてなされた。又その歌には

ほのかにも軒端の萩をむすばずは露のかごとをなにかけましと、殊更人目に立つやうな大きな萩にその消息文を結びつけて、こつそりと軒端の萩の手に渡してくれと小君に言ひつけられたが、若しや小君がとちがへて、少將に發見されて、以前の軒端の萩の情人が源氏の君であつたことを知つたならば、一度は怒ることがあつても、對手が源氏であるから、その罪は赦してくれるであらうと傲慢な御心でゐられたのは、あまり面白いことではなかつた。ところが小君は少將の居ないときにその手紙を軒端の萩に見せ奉つたので彼女は心苦しいことだとは思つたけれども、このやうに私を思つて下さるのも、矢張そのまゝにはして置かれない。それで早速御返事を申し上げるのと言ひわけとして、一首の歌を小君に渡した。

ほのめかす風につけても下萩のなかばは霜にむすほほれつつ

その筆蹟は悪いのを、誤魔化して洒落れた風に書いた様子は品格がない。源氏はこの軒端の萩の歌を見るについても、彼女が嘗て碁を打つてゐたその夜の火影から見た顔と思ひ出しなされる。それについても、あの晩彼女と相對してゐた空蟬の、うちとけないでゐた方は、なか／＼疎むことが出来ない程ゆかしい態度でゐたかなあと思召される。それに引きかへ軒端の萩の方は、少しも氣取つたおもむきもなく、騒がしく自慢らしかつたよと思召されるに、やはりにくらしくも思ひなさない。斯くまだ御心を殘してゐられるのは、なほ懲りないで、また浮名を立て



なさらうとせられる御心の慰めであるやうだ。

○ほのかにも軒端の萩の云々の歌——ほのかにでも嘗て、軒端の萩と我とが契りを結んでゐなかつたならば、少しばかりの恨み言を、どうして汝に言ひかけようか、決してそんなことはしないの意。結ぶの語は萩を引き結ぶのと、契を結ぶこととにかけたのである。○ほのめかす風に云々の歌——かすかに氣振りに見せる寒い風についても、萩の下葉の半分は霜のために結ばれるのであるといふのが表面の意で、この歌の裏面の意は微に源氏の君から私に御消息を下されて、その意をお示し下されたについては、君がまだ私をお忘れにならぬのを一方では喜びますが、他の半面では今更と心配で思ひが憂ひに沈むのであります。

評 「さりとも罪免してむとふ思御心おごりぞあいなかりけり」といつてゐるのによつても、當時源氏の君が宮廷の間に於て我儘を通してゐられたことが分る。又「手はあしげなるを、まぎらはしざればみ云々」と、軒端の萩の筆蹟によりて、その人の人となりを探することは、誰しも経験する實感でありながら、行きとゞいて書き振りである。

○彼の人——夕顔をさす。  
○比叡の法華堂——李邵王記云、天慶六年六臘童子卒、當三十七日於叡山東法華堂一修風誦云々とある。  
○ことそがす——簡略に

彼の人の四十九日、忍びて、比叡の法華堂にて、ことそがす、装束より初めて、さるべきものどもこまかに、誦經などせさせ給ふ。經佛のかざりままで、疎ならず。惟光が兄の阿闍梨、いと尊き人にて、二なうしけり。御文の師にて、むつましくおぼす文章博士召して、願文作らせ給ふ。その人と

○装束より始めて——法師に布施する装束より始めて、然るべき物、金銀諸具を省略せず、沙汰してつかはしなされるのである。經佛のかざりば經卷の軸表紙佛像の壯嚴などないふのである。  
○二なうしけり——二人と比すべき者無きほど尊かつた。  
○御文の師——源氏の侍讀した儒者。

○文章博士——大學寮の教官、古の紀傳博士の變遷したもので、當時は紀傳の事すたれてひたすら文章の事にあつたから文章博士が出来たのである。  
○願文つくらせ給ふ——源氏が草稿を書いて博士に見せなされ、この趣で適當に取つくるひしたたむべきよし仰せらるるをいふ。

○阿彌陀佛にゆづり奉る

なくて、あはれと思ひし人のはかなきさまになりたるを、阿彌陀佛にゆづり奉るよし、あはれげに書き出で給へれば、「唯かくながら、加ふべきこと侍らざめり」と申す。忍びたまへど、御涙もこぼれて、いみじくおぼしたれば、何人ならむ、その人とは聞えもなく、かう思し歎かすばかりなりけむ、宿世のたかさよといひけり。忍びて調ぜさせ給へりける装束の袴を取り寄せ給ひて、

なくく今日わがゆふ下紐をいづれの世にかとけて見るべき  
このほどまではただよふなるを、いづれの道に定まりて赴くらむとおもほしやりつつ、念誦をいとあはれにし給ふ。頭中將を見給ふにも、あいなく胸騒ぎて、かの瞿麥の生ひたつ有様聞かせまほしけれど、かことに懼ぢて、うち出で給はず。

彼の夕顔の君の死後七々四十九日には、ひそかに比叡山の法華堂で簡略にせず、法師に布施する装束を始めとして、然るべき金銀の佛具は丁寧に整へられ、誦經までなされた。經卷の軸表紙や佛像の裝飾に至るまで疎略な點は無く、極く鄭重な法會であつた。この法會を營んだ



—今世にては我が逢見し人なるを、今は極樂へやりて阿彌陀佛に頼み奉るとの意。

○その人とは聞えなくて誰人とは世に聞えることも無くして。

○宿世のたかさま—源氏の君のかくまで思しめすは、しあはせよき人であるとの意。

○装束の袴—前に見えたところの布施物の装束である。これを取りよせて歌をよみなさるのである。歌のさまによると袴は下袴である。

○このほどまでは—四十九日迄は中有の空に亡魂が漂ふてゐるをいふ。

○かの撰券—玉かづらの君の生ひ立ち給ふ事を聞かせまほしけれどの意。玉かづらの巻に至る伏線である。

○かごとくは懐ちて—語り出したならば、頭中將からかこたれるであらう

と尋ねて。

と尋ねて。

惟光の兄である阿闍梨は、大變人格の尊い人で、他に比ぶべき人はなかつた。源氏の君は自分の學問の師匠である文章博士をお呼びになつて願文を作することを命ぜられた。源氏の君はその願文の草稿として、それと名をいふ人ではないが、吾が可愛想だと同情してゐた或る人が、遂に果敢なく死にましたので、今はこの亡き或る人を、阿彌陀佛にお譲り申すのであるといふ由を、あはれつぽく書き出しなされたので、文章博士は「もう源氏の君がお書きなされたこの文章その儘で十分であります。私はこの草稿以上に書き加へることが御座りません」と申し上げる。

源氏の君は茲處まで來ると夕顔のことが今更思ひ出され、悲しい思ひは他人に分らないやう我慢してゐられるが、それでも耐へられなくなり、御涙をはら／＼と落しなされて、甚だしく悲しまれたので、文章博士は、これは一體どのやうな人が死んだのであらう。誰が死んだといふ名前も世間には評判にならないやうな人で、どうして斯く源氏の君が惜み悲しまれるやうになつたのだらう。君に斯くまで惜まれるとは餘程宿世のよかつた人であるに違ないと感心しながら話してゐた。こつそりと内々で作りなされた袴を取り寄せなされて、

なく／＼今日は我ゆふ下紐をいづれの世にかとけて見るべき

此頃までは夕顔の亡魂は中有の空に漂つてゐたのを、今日は何れの道にか落ちて行くのであるだらうと思ひやりながら、甚だ悲し／＼に念佛をなされる。さて源氏の君は頭中將の姿を御覽なされるについても、何といふこともなく胸騒ぎがして、彼の幼き玉かづらの君の生ひ立つ有様

と尋ねて。

を聞かせてやりたいと思召しになつたけれども、若しさうすると頭中將から怨言を言はれたらうから、それを恐れて、玉かづらのことについては何も口外せられない。

願文—河海抄に「清和天皇貞觀九年十月觀學院南邊更建一院、號延命院、乃日主上自製。願文云々願文自作例是也」と、花鳥餘情に「重明親王家室藤原氏四十九日願文後相公朝綱書之見文粹生者必滅釋尊未免梅檀之烟樂盡哀來天人猶逢五衰之日此願文之詞也云々」とある。○なく／＼も今日はわがゆふ云々歌—古昔は男女相かたらうて、又人にはあはない誓として、下袴の紐を結び交して、他人には解かさないうやうに口がためたのである。この歌もその意で今日は泣きながら結び固めたこの下紐を、いつの時何れの世にか、再び解いて夕顔を相見るのであらうかの意。とくに打とけてといふ意をかねさせた爲めに、とけてとはいつたのである。

今日のは「は」文字については評釋に「今日のはもじは、ぞとあらまほしげなれど、今日はなく／＼もといふ意なれば、かくてもよろし」とある。

いよ／＼夕顔の巻も結末に近づいたので、こゝに七々日の法事にまで記事を進めてゐる。玉かづらの事が一寸ほめかされてゐるのは、後段玉かづらの巻に至る伏線をなしてゐるものである。

彼の夕顔の宿には、いつかたにと思ひ惑へど、そのままにえ尋ね聞えず、

○彼の夕顔の宿には—五條の宿では、夕顔がど



こへ行つたのであらうと思つてゐるのである。  
 ○確ならねど——源氏の君であるといふことか大かた知り給ふのである。  
 ○惟光を源氏へ嫁したのには惟光らしかつたからしてその故を知らうとらみなげくこと。  
 ○かけ離れ——知らぬさまにかけ離れ。  
 ○氣色なく言ひなして——何の素振りもなく。  
 ○同じこと好色ありきければ——惟光はもとから言ひよつた女の許に通ふやうにして私の懸想をするのである。知らぬさまを見せんためである。  
 ○若しや受領の子供などで、夕顔の君も盗み、頭中將に恐れ懼つて自分の任國へ連れて行つたのではないかと思ひめぐらす。  
 ○この家あるじ——夕顔の宿の主人。

右近だに音づれねば、あやしと思ひ歎きあへり。確ならねど、けはひをさばかりにやとささめきしかば、惟光を歎ちけれど、いとかけ離れ、氣色なく言ひなして、猶同じごと好色ありきければ、いと夢のこちして、若し受領の子どものすきくしきが、頭の君に懼ぢ聞えて、やがて率て下りけるにやとぞ思ひよりける。この家あるじぞ、西の京の乳母の女なりける。三人その子はありて、右近は別人なりければ、思ひへだてて、御有様を聞かせぬなりけりと泣き戀ひけり。右近、はたかしがましく言ひ騒がれむを思ひて、君も今更に漏さじと忍び給へば、若君の上をだにえ聞かず。あさましく行方なくて過ぎ行く。君は夢にだに見ばやと思し渡るに、この法事し給ひて又の夜、ほのかにかのありし院ながら、添ひたりし女の、形状も同じやうにて見えければ、荒れたりし所に住みけむ妖物の、我に見入れけむ便に、かくなりぬる事と思し出づるにもゆゆしくなむ。

彼の夕顔が嘗て住んでゐた五條の宿では、夕顔は一體どちらの方へお出かけなされたのかと心配してゐたが、さればとて尋ねることもせず、そのまゝになつてゐる。又右近までが少しも

○乳母の女——揚名介の妻は嫡女である。一人は筑紫に住みつき、ひとり玉かづらに付いて上つてゐる。この事玉葛の巻に見える。  
 ○三人その子ばありて——湖月抄には乳母の子が三人あつたとしてゐる。  
 ○君も今更に——右近が言ひ騒がれる事を思ふ上に、源氏も御懸密になさつたからして玉かづらの行方さへも聞かないで月日を送る。  
 ○行方なくて——玉かづらの、いかになり給へるも知られぬ。  
 ○かのありし院ながら——暫く行つた、なにがしの院その儘で、夢の中に夕顔の君に添つてゐた變化の女の同じ形で見えたのである。  
 ○見入る——執念かけて我に悪魔の憑りつくこと。さて源氏は太刀を抜きなどして防ぎ給し故

訪ねないので、宿のものどもはどうなつたのかと、不思議なことと思ひ歌いてゐた。確實なことは分らないけれども、事の様子に依つて多分源氏位の高貴な方に、夕顔の君は誘はれて行かれたのであらうと宿の者共は私語してゐたので、その世話をした惟光を恨んで、夕顔の行方を尋ねようとした。けれども惟光はそのやうなことから全然かけ離れ、斯る事には少しも關係ないやうに言ひ、猶以前の如く色好みをして歩いてゐた。それで夕顔の宿の留守居の者は一層夢のやうな心持がして、何が何だかわけが分らない。或は地方の國守の息子などの浮氣な者が、頭中將に對して恐れ、夕顔を早速連れて地方の國へ行つたのではないかとも思つた。この夕顔の住んでゐた家の主といふのは西の京の乳母の娘の揚名介の妻である。この乳母には三人の子供があつて（嫡女は揚名介の妻であり、一人は筑紫に往き、もう一人あること玉葛の巻に見え）この右近といふのは別の乳母の子である關係上、夕顔の在處については、委細を告げないのであると言つて宿の主は恨み泣きながら、夕顔を戀ひ慕つてゐた。右近の方ではこの宿に行くなれば、やかましく夕顔の行方を尋ね聞かれることであらうと思ひ、且又源氏も、今となつて人に知られることのないやうにと隠してゐらつしやつたので、右近は若宮玉葛の身の上についてさへも尋ねない。彼は遊びに行くべき所もなく、つまらない月日を送つてゐる。源氏の君ではどうか夢でもよいから、もう一度夕顔の姿を見たいものだと思召してゐられたが、この法會を営みなされたその翌日の晩、ぼんやりと、會て居た何がしの院その儘な所に、枕上に近附いて来た妖女そのまゝの女が、形も同一な有様で見えたので、源氏は思召しなされるやう、借



に、轉じて夕顔に崇りたる様にかきなしたるもの。

夕 顔

四六六

ては夕顔が忽然と亡くなつたのは、何がし院の荒れ果てた所に住んでゐた悪靈が、我に對して執念をかけ憑りついたのであるが、その時我は太刀を抜いで防いだため、悪靈はその序に夕顔を襲ひ、遂に彼女の生命を奪つたものであらうと、察しなざるについても嫌はしいことであつた。

○三人その子はありて——評釋に「案にそのとさしたるは、めのとのむすめをいへることく聞えたり。さらば乳母のむすめの揚名介が妻の子三人ありといふにや、されど次々に用あるを思へば、猶めのとの子か、考ふべし。」と廣道は言つてゐる。○若君の上をだに——これも萩原廣道は評釋に「かの西の京にとまりし我君をだに、ゆくへもしらすひとへに物を思ひつゝみ、又今さらにかひなき事によりて我名もらすなと口がため給ひしをはばかり聞えて、たづねてもおとづれ聞えざりしほどに云々とある所へかけて書きとどめられたるなり、文の詞によく心とどめてあぢはふべし。皆彼卷の伏案なり」とある。

「君は夢にだに見ばやと思し渡るに云々」の句は、夕顔の卷の變化の段の結びであり、妖怪の正體を述べたものである。諸抄の中にはこの妖怪を以て御息所の怨靈となしたるものも多いが、この一段の文章を以て推察するも、夕顔を夢に見ようと思召されて、變化の女をさへ見なかつたのであるからして、茲處の妖怪は廣道の言つてゐるが如くに、この荒れたる院の悪靈とす方がよい。

○ついたちころ——上の十日をひろくさしていふ。  
○たむげの心——餞別の送物。  
○うち／＼——内々で、こつそりと。  
○櫛扇——櫛はしものどこほりを解く故であり扇はあふといふ心である。  
○幣——旅路の手向けの料にする幣である。五色の絹を細かに切り、道の神に手向け散らし行くのである。  
○かの小桂もつかはす——前の空蟬のもねけを返し給ふのである。  
○逢ふまでのかたみ云々の歌——補欄参照。  
○蟬の羽もたちかへへける云々歌——補欄参照。  
○思へど——思へどもくといふことで深く思ふ時の詞である。又評釋には「案にどはばの誤にや、此も互に相誤れる

伊豫の介、神無月のついたちころに下る。女房の下らむにとて、たむげ心、殊にせさせたまふ。またうち／＼にもわざとし給ひて、細やかにをかきさまなる、櫛、扇多くして、幣などいとわざとがましくて、かの小桂もつかはす。

逢ふまでかたみばかりと見し程にひたすら袖の朽ちにけるかな

細やかなることどもあれど、うるさければ書かず。御使かへりにけれど、

小君して、小桂の御かへりばかりは聞えさせたり。

蟬の羽もたちかへてける夏ごろもかへすを見てもねはなかりけり

思へど、怪しう人に似ぬ心強さにても、ふり離れぬるかなと思ひつづけ給ふ。けふぞ冬たつ日なりけるもしるく、うちしぐれて、空の氣色いとあはれなり。ながめくらし給ひて、

過ぎにしもけふ別るもふたみちに行くかた知らぬ秋のくれかな

なほかく人知れぬことは苦しかりけりと、思し知りぬらむかし。かやうのくだ／＼しきことは、あながちにかくろへ忍び給ひしも、いとほしくて、み

夕 顔

四六七



な漏しとどめたるを、など帝の御子ならむからに、見む人さへかたほならずものほめがちなると、つくりごとめきてとりなす人ものし給ひければなむ。あまりものいひさがなき罪、さりどころなく。

伊豫介は神無月(十月の異名)の下旬頃任國に下る。このとき女房の空蟬をも連れて國に下るといふので、源氏の君は饒別の品物を、いろ／＼と特別に念を入れてなされる。又表向でなく内々で殊更に作られたものもある。それは精巧風雅な様に作られた櫛だの、扇だのといふ祝ひの物が多く、幣などは、特にわざとらしいものである。空蟬が抜きすべらして行つた彼の小桂も、今度はお返しなされ、つれなかつたありし夜の怨みとされた。このとき、源氏の君の歌には、

逢ふまでのかたみばかりと見しほどにひたすら袖の朽ちにけるかな  
なほこの外に子細なことが源氏からの消息文の中にあつたけれども、此處に書きつけるのもうるさいから省略して置く。やがて源氏の許から空蟬の許に遣はされた使が歸つて來たけれども何等の消息もなかつた。たゞ後になつて、空蟬は弟の小君を使として、源氏の許によこし、小桂の御返事だけを申し上げられた。空蟬の返歌には、  
蟬の羽もたちかへてける夏ごろもかへすを見てもねはななれけり  
とあつた。この歌をお讀みになつた源氏の君が思ひなされるには、つく／＼と思つて見れば見る

氏も隠してゐられることであるから、源氏のためにはいとおしくしてみなもさなかつたが。  
○見む人さへ——源氏の君の振舞をかたほから見る人で、即ち見て物語を書きたる人である。一説に源氏の見給ふ女のことである。源氏をほめるあまりに見給ふほどの人々も皆形心ざますぐれたやうに書いた。これは作り物語であるだらうといふ人もあるから、ありのままに書いたのである。  
○かたほならず——あしきことをとりつくろふをいふ。  
○あまりものいひさがなき罪さりどころなく——残りなく記したので、餘りに口悪い罪は作者の避けようもないところである。

ほど、不思議な位、人とはこと變つた頑固な女の心で、彼女はとう／＼遠く伊豫の國へ去つて行くかなと思ひつゞけられる。思へば今日は立冬の日であるのも著しく、空はとき／＼時雨がして、空の景色は甚だ物淋しいものである。源氏はあれやこれやと思ひに耽りながら、遂に一日をそれで暮しなされた。このときお詠みなされた歌に、  
過ぎにしもけふ別るもふたみちに行くかた知らぬ秋のくれかな  
やはり空蟬のこといひ、夕顔のこといひ、世人に知らさない内々の私事は、いろ／＼と思ひがけない苦しみを、自分獨りでしなければならず、斯うした事は實に苦惱なことであつたと今となつてやう／＼思ひ知りなされたやうである。  
斯様な源氏の君と空蟬夕顔の關係のくだ／＼しい事は、源氏の君も強く世間に對して隠してゐられたのであるから、甚だ氣毒に思つて作者である私も、其等のことを世間に發表するのを止めてゐましたが、世人は、どうして帝の御子であるからと言つて、源氏の君を褒め申すは勿論のこと、その源氏の君が關係してゐられた女までも、悪い短所はよいやうにとりなしてゐるのか。このやうでは此物語は作り物語りのやうに見えると思つたかふ人もあつたので、止むを得ず詳細に事實を書き立てました。然しあまりに口悪く言ひ過ぎました罪は、作者の逃るべきことではありませんから、之はその責めを負ひませう。  
○逢ふまでのかたみばかり云々の歌——この小桂は、何時かまた相逢ふことがあるだらうから、それまでの形見として見てゐた間に、涙が出て悲しかつた爲め、その涙で小桂の袖が一途



に朽ちてしまつたことである。○蟬の羽もたちかへてける云々の歌——蟬の羽のやうに薄い夏衣を着てゐたのも、今は裁ち更へて冬着を着てゐるのに、今更夏衣をお返しなされるのを見るについても、私の形見となさるべき品物が返つて来たのであるからして、君は私を思ひ捨てなされたものと思はれ、悲しさに聲を立て、泣かれるのであります。○過ぎにしもけふ別るも云々の歌——死んで行つた夕顔と、今日伊豫へと立ち去つて行く空蟬とは、一つは死別一つは生別と二つの道に別れ行くのであるが、何れも行くへも分らぬ遠方へ行つてしまふので、特に物淋しい秋の暮であるかなあの意。なほこの歌については異説が多い。○見む人さへ——この語は玉の小櫛に「源氏君のふるまひを、かたはらより見る人にて、即ち見て物語をかきたる人をいふ也」といつてゐるが、これよりも前述の如くに説いた方が無理がない。

【註】「伊豫介神無月のついたちごろに下る云々」の句は、關屋の巻の初めに「伊豫の介といひしは、故院かくれさせたまひて、またの年、常陸になりて下りしかば、かの帚木も誘はれにけり」に至る伏線をなしてゐる。故院かくれなまつての翌年は、桐壺帝崩御の翌年で源氏の君廿四歳にあたる。試に「伊豫の介、神無月のついたちごろに下る」といふときから數へれば八年の後にあつてゐる。故に伊豫の介として任にあたること四年で京にかへり。又他國の任となつて四年は地方に下つてゐたのが、一旦京に歸つてから又常陸の介となつて任に赴いたものである。さて常陸の介となつて任國にある事前後六年にして上京してゐるが、これは在任中の執政宜しかつた爲め年を延べられたものである。

空蟬の事に關しては斯様な永い年月の間、何等の記事も見えてゐないのは、空蟬の君は巻中で主要なる人物でない爲め、任國に赴かせて筆を省いたのである。

「過ぎにしも今日別るも二道にゆく方知らぬ秋の暮かな」といふ悲涼悽陰な歌を以て、ものすごい夕顔一卷を結んでゐるのは、折からの暮秋の感と共に、この場合の情景をよくあらはしてゐる。



切取りは絶作し有る。



人物

若

紫の上 兵部卿の宮の娘である。

兵部卿の宮 藤壺の兄にあたる。

王命婦 藤壺の女房である。

辨 藤壺の乳母の子である。

少納言 紫の上の乳母である。

尼君 紫の上の祖母である。

藤壺の宮 桐壺帝の女御である。

左大臣 葵の上の父をいふ。

葵の上 源氏の北の方である。

北山の聖 北山に蟄居して源氏の君に加持した僧。

北山僧都童 源氏君北山で紫上の祖母の尼君へ遣し給ふ消息を持つて行つた童。

辨の君 左中辨の弟である。

いぬき 紫上が使ひ給ふ童女。

良清 播磨守の子で、源氏の君の家臣である。

左中辨 頭中將の弟である。

惟光 母は大貳の乳母で、源氏の君の家臣である。

僧都 尼君の兄である。



贊成!

年 立

十八歳 春

三月十日あまりの頃源氏の君わらばやみしたまふ  
 三月晦日加持のために北山の聖坊に向ひ給ふ  
 遊山の序に某僧都姉君等の隱居をのぞみたまふ  
 御伴の人々諸國の名所を物語るの序に、明石入道  
 の娘の有様を申し上げる  
 小柴垣の垣間見の序に十歳許りの女子を見給ふ  
 (是れ紫の上で、尼君は紫の上の外祖母にあたる)  
 僧都來つて源氏の君の渡ります事を姉の尼君に告  
 げる  
 僧都源氏の君を我が坊に請する事  
 僧都、尼并に姫君の有様を語る  
 同時に源氏の君、尼君に對面して姫君を乞ふ給ふ  
 事  
 明日北山の聖、加持し奉り、このとき僧都參候の事  
 (聖人獨站を奉り、僧都贈物等を奉る)  
 源氏の君消息を尼公の許につかばしなさる  
 頭中將左中辨以下御迎へに參る事  
 僧都琴を持參し、源氏の君彈じ給ふ事  
 源氏の君歸京して葵の上の宿所に向ひ給ふ事  
 翌日文を北山の尼君の許に遣しなさる事

夏 秋

二三日の後又惟光を北山に遣して、少納言の乳母  
 を訪れなさる事  
 藤壺の宮病氣によりて三條の宮にまで給ふ。こ  
 のとき王命婦にたのみて、ひそかに見え給ふ  
 藤壺の宮懷妊三月になり給ふ  
 源氏の君夢を見て、人を遣し之をたづね給ふ事  
 七月藤壺參内の事  
 九月源氏の君二條京極を過ぎ、序に故按察大納言  
 の舊宅を訪れ給ふ。これ紫姫君の外祖母尼之里で  
 ある。  
 十月朱雀院行幸舞人以下の沙汰の事  
 北山の尼公卒去の事  
 源氏紫の上の京極家に宿り、少納言の乳母に逢ひ  
 給ふ事  
 翌朝歸り給ふ道に於て、隨身をして妹が門に歌は  
 しめ給ふ事(この女誰とも知られない)  
 惟光を京極家に遣して、姫君を問ひ給ふ事(この  
 とき源氏和琴をすががき、常陸歌をうたひたまふ)  
 源氏の君自ら出で給ひて、紫姫君を二條院に迎へ  
 給ふ事  
 (少納言同乗して西對に御車を寄する事)  
 姫君手習の次でに源氏への返歌を書きたまふ

欠



# 欠

○少し奥まりたる——少しなりとも深山の方に入る。

○ひがくしきやうなれど——面目ないとして出家入道する程ならば、深山などにこそもるべきにこの住居のさまもひがみたるものである。

○げに——深き里は云々へかかる、その間に句をばさむは源氏の一文法である。

○かつば心をやれる——みづからあかぬことがないと誇りたるやうの意。

○先つころ——先達。さきころ。

○ありさまに給へに——父の任國であるために、良清もくだつたのである。そのついでに明石入道に晉づれたのである。

○そこら——幾多。若干。

○さはいへど——人になづられてゐるなど言ふけれども、さすが立派な生活である。

りしたる人になむ侍りける」と申せば、「さてその女は」と問ひ給ふ。

源氏のお供をしてゐた良清が言ふには「先づ都の近所として景色のよいところでは、播磨の國なる明石の海岸こそやはり變つてゐます。別段これといふ趣のある景色はありませんけれども、たゞ廣々とした海の表面を見渡してゐますと、不思議にも他の地とは違つて、ゆつたりとひろくとした長閑なところであります。彼の播磨の國の前國守で入道した人の娘が養はれるる家は、甚だ存外にもよい家でありますわい。この入道は大臣の子孫であるから、相當家柄も勝れてゐたので、都に出でては相當な出世も出来る身分であつたが、普通の人とは變つたところのある人なので、世人とは交際もせない。彼入道は嘗ては近衛中將となつて、宮中近くに仕へ申したのであるが、遂にその榮譽の官を捨て、播磨の國司に任ぜられた。けれども、播磨の國人からはいろ／＼とあなどられてゐた。それで彼はいたくそれを恥ぢ、どのやうな顔をして、再び都に歸ることが出来るか、それはとても叶はぬといふて遂に頭髪を剃つて入道した。さて入道したからとて浮世から去つて深山にでも隠れるかと思へば、斯ることはせず、そのやうな海邊に出て住居をしてゐるとは、ひがんだやりかたである。けれども實は、彼の播磨の國內には成程人が世を遁れて隠れるべき場所はあるが、人里離れた奥深い村里は住む人も稀に、物凄いで、年若い妻や子が淋しく思ひ困るであらうといふ理由からと、又一つには彼が十分心を使つて思ふ存分に作つた住居であります。そのため海邊に住んでゐるのです。先頃私（良清）がその土地に行きましたついでに、明石入道の様子を見に立ち寄りましたところが、京



○残の飾ゆたかにふべき  
——産業のことである。  
入道の飾生を不足なく纏  
べき結構を十分にしてい  
る。田地とか山林などを  
買つてゐるのであらう。  
○法師まさり——法師に  
なりて、より人がらのま  
さりて見ゆる事ないふ。

○けしうはあらず——わ  
るくはない。  
○代々の國の司——諸國  
の守は一任四ヶ年で代る  
故に代々といふ。  
○用意ことにしてさる心

の都で聞いては、權勢も無くあきたらぬやうに思はれ、どうして彼のやうなところにあるのだらうと合點が行かなかつた。然し明石入道はそのあたり一面を廣く嚴かに領有して邸宅を構へてゐる體は、何と言つても國司の權勢でやつたことでありますからして、餘生をゆたかに送る準備も、この上なく十分整へてゐます。又後生の動行も甚だよく修めてゐます。それで彼は法師になつたことによつてかへつて一層人柄があがつたのでありました」と申し上げると、源氏は良清より聞きたいのは、入道のことよりはその娘のことであつたから「さてそれでは、その入道に娘がゐるが、その娘はどうであるかなあ」と尋ねなされる。

こゝに明石入道を「世のひがものにて交ひもせず」と言つてゐるのは、近衛中將といふやうな宮中にて近くお仕へ申す顯官でゐながら、それを捨て、田舎の國守になつたことや、或は世をのがるゝ程ならば、人里遠く離れた深山に隱遁すべきのに、海邊の人里近きところに住居をしてゐたことなどをさす。

「法師まさり」の語については、玉の小櫛補遺に「桐壺巻にあげおとりといふ詞の類にて、法師になりてより人がらのまさりて見ゆる事をいふなるべし」と説いてゐるのは卓見である。

「けしうはあらず、かたち心ばせなど侍るなり。代々の國の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなれど、更にうけひかず。わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人一人にこそあなれ。思ふさま異なり。もし

はへ——心もちひを殊に  
して、志の深きを女に見  
するのである。  
○うけひかず——承知し  
ない。  
○わが身のかくいたづら  
に——入道の身が斯く空  
しく零落してゐるのに。  
○この人一人にこそ——  
我が子としてはこの明石  
の上一人であるからして  
空しくはなさないであら  
う。  
○思ふさま異なり——さ  
やうに受領の妻などにし  
ようなどは思ふさまが  
違ひ異つてゐるとの意。  
即ち禁中へ奉らうといふ  
意であらう。  
○もしわれに後れて——  
若し我入道が死して、汝  
がこの世におくれ残り、  
その志を遂げることが出  
來なかつたならば、汝は  
身を海に投げよといふの  
である。  
○海龍王の后に——入道  
の遺言した如くに、娘が

われに後れてその志とげず、この思ひおきつる宿世たがは、海にいりねと、常にゆるごんしおきて侍る」など聞ゆれば、君もをかしと聞き給ふ。人々「海龍王の后になるべきいつきむすめなり。心高き苦しや」とてわらふ。斯くいふは、播磨の守の子の、藏人より、ことし爵えたるなりけり。いとすきたるものなれば、かの入道の遺言やぶりつべき心はあらむかし。さて佇みよるならむといひあへり、「いでやさいふとも、田舎びたらむ。幼くよりさるところに生ひ出て、ふるめいたる親にのみ従ひたらむは。母こそゆるあるべけれ。よき若人童女など、都のやむことなきところどころより、類にふれて尋ねとりて、まばゆくこそもてなすなれ。情なき人になりゆかば、さて心安くてしも、えおきたらじをや」などいふもあり。

さて例の男(即ち良清をいふ)が源氏の君の問ひに答へて「いや、その女は悪くはありません。容姿といひ、氣立といひ、何れもよい女であります。播磨の國司となつて來任する代々の國司などは、特に心を用ひてその女の御機嫌を取らうと、懸想の心持をそれとなく女に知らせるのであるが、當の女は一向それ等の人の言ふことを相手に致しません。明石入道がその女に語り聞かせるには、我でさへもこのやうに空しく世からは零落してゐるのであるから、ましてや人



出世することば、むづかしいことであるからして、遂に海に入りて龍王の後となるべきいつき女であらう。

○いつきむすめ——大切にしてかしく女をいふ。

○心高き苦しや——入道の理想があまりに高遠であるので、聞き苦しやと人々が笑ふのである。

○斯くいふは——この明石の新實意の娘のことを語りたる人ないふ。

○藏人よりことし云々——かうぶりとは爵のこと、で爵に叙せられたのをいふ。

○かの入道の遺言、かぶりつき——この物語をする五位の藏人は好色のものであるからして、かの入道の心高き理想をやぶつて、その娘をわがものとせようといふ心があるのであらうとの意。

○佇みよる——窮む忍び

の出身など世話することは出来ないだらうが、自分の子としては汝一人である。それで汝を愛し思ふことは格別である。決して汝を受領などの如き身分の者の妻などにはしない。必ず宮中に宮仕するやうにしたいと思ふ。若し我が死んだ後に、汝がかねての宮仕の志を達することが出来ず。この思ひ定めて置いた宿縁も達せられない境遇に立ち至つたならば、思ひあきらめてつまらぬ所に縁づくやうなことなく、そのときこそは潔く海に投じて死んでしまへと、常々遺言してをります」と申し上げたので、源氏の君はそれは面白いことだと思召しなされる。すると御供の人々は「その娘は海に入つて海龍王の後となるやうに、大切にもてかしくかれてゐる娘であるのだ。その父明石入道の娘に對する理想の高いには心苦しい事ぢや」と言つてあざけり笑ふ。斯く明石入道の娘について物語つたのは、播磨守の子で、今年藏人所から従五位の下に叙爵された男である。この男は元來好色氣分のある男であつたから、彼の明石入道が遺言して行つた事を破つて、明石の上を自己の手に入れる心があるのであらう。その爲めに明石の上の許に立ち寄つていろ／＼と娘の身の上を尋ね知つてゐるのだらうと、彼等御供人は口々に言ひあつた。すると或一人の御供人が言ふには「いや、明石の上は立派な娘であるやうに言ふけれど、幼少のときから、そのやうな所に成長し、昔氣質の親にばかり従つてゐたのだから、田舎臭い女であるだらう。然し母だけは相當由緒のある方であらう。娘の教育のため、その遊び友達としては、教養のある少年少女どもを、都の高貴な所々から、親類であるのをたよとして呼び寄せ、娘の明石の上を派手やかに育てたのである。けれどもその親も亡くなつてしまひ、

よる。

○いでやさいふとも——さあそのやうにはいふもの。

○ふるめいたる親——書氣質の親。

○君は——源氏の君。

○何心ありて——明石入道はどのやうな心があつて、さやうに海中に沈めよと遺言するのであらうの意。ふかくは海の縁語、みるめは海松なるを見る目といひなした縁語。

○かやうにても——かやうにのたまへどもとの意。

情なき他人ばかりとなつたならば、それからはその娘に氣樂な生活をさせて置くやうなことはないであらう。だが今はそんなことも氣附かず娘は安らかにしてゐることだ」などと批評するものもある。

○藏人よりことし爵えたる——正月五日の叙位に六位の藏人は、必ず巡爵と言つて従五位下に叙せらるゝのである。かうぶりととは爵のこと。こゝに言ふ藏人といふのは良清といふ若者であるが、その名をあらはしてゐないのは後巻に至る伏線をなしてゐる。

評 此段の「いでやさいふとも田舎びたらむ、幼くよりさるところに生ひ出でてふるめいたる親にのみ従ひたらむは」は供人の言とし、その次の「母こそゆゑあるべけれ。よき若人童女など都のやむごとなきところどころより類にふれて尋ねとりて、まばゆくこそもてなすなれ」は良清の言とし、「情なき人になりゆかば、さて心安くてもえおきたらじをや」を、又供人の言として解する説もあるが、これも一説である。

君は「何心ありて、海の底まで深く思ひいるらむ。底のみるめも物むつかしう」などのたまひて、たゞならずおもほしたり。かやうにても、なべてならずもてひがみたる事好み給ふ御心なれば、御耳とまらむをやと見奉る。「暮れかゝりぬれど、おこらせ給はずなりぬるにこそはあめれ、はや歸らせ給ひなむ」とあるを、大徳「御ものゝけなどくは、れるさまにおはしま



○もてひがみたること——通りならん變つたことを好み給ふ御心であるから。  
 ○御ものけくばはれる——わらはやみの上に物のけの加はれるをいふ。  
 ○さもあること——御供の人々が聖の申す所こもつともであると申す。  
 ○ただこの西——玉の小櫛に「かやうのただは今の俗言に、直にといふことなり」とある。  
 ○持佛す奉りて——この僧坊の西面なる所に、持佛をすみて行ふさまである。  
 ○尼なりけり——尼ありけりの寫し誤つたものであらう。  
 ○簾すこしあげて——こころよりは内のありさまなくばしくいふ。源氏の見給ふてゐられるのである。  
 ○なかの柱——壁につかない柱。

しけるを、今宵はなほ靜に加持などまゐりて、出てさせ給へ」と申す。さもあること、みな人申す。君もかゝる旅寝もならひ給はねば、さすがにをかしくて、「さらば曉に」とのたまふ。日もと長きに、つれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるに紛れて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。人々はかへし給ひて、惟光ばかり御供にてのぞき給へば、たゞこの西おもてにしも持佛す奉りて、行ふ尼なりけり。簾すこしあげて花奉るめり。なかの柱に寄りゐて、脇息の上に經をおきて、いとなやましげに讀みゐたる尼君、たゞ人と見え、四十餘にて、いとしろくあてに瘦せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪美しげにそがれたる末も、なか／＼長きよりもこよなういまめかしきものかなと、あはれに見給ふ。

源氏の君が思召されるには「あの明石入道が自分の娘に對して、素志が達せられないならば汝娘は海に入りて死ねと言つたが、彼入道はどのやうな心があつて、海の底まで入つて死ねなどといふまで、深く娘のことを思つてゐるのであらう。海底には海松があつて、それを見てもうるさいことであらう」など仰せられて、一方ならず明石の上を思つてゐられた。さてお供のものどもは思ふやう、源氏の君はかのやうに仰せられても、普通の人は違つて風がはりな事

○尼君——ただ人と見えないからして、特に君の字を添へて尼君といつたのである。  
 ○瘦せたれど——身體がほつそりとしてゐるが、願骨のあらはれたるなどのさまではない。  
 ○いまめかしきものかな——源氏の君の窺ひのぞき給ふ心中から、中のさまをいつた文脈であるからして物かなといつてゐる。

を好みなさる御性質でゐられるから、明石の上を御心の中に思ひ込んでゐられるのであらうと源氏の君を眺めてゐる。さて御供人の一人が言ふには「日も夕暮となりましたが、君のおこりの病氣が起らないところから察しますと、最早君の御病氣は全快しておこらないのでありませう。さあ早くお歸りあそばしたならばよいでありませう」と申し上げると、君の病氣の加持をしてゐた高僧が言ふには「君の御病氣には何か怨靈らしいものが祟つてゐるやうでありますから、今宵一晩はこゝにお宿りになり、ゆつくりと加持祈禱などをなされて、明日お歸りあそばせ」と申した。この高僧の話聞いたお供の人々は、何れも皆成程それは尤であると言つた。又源氏の君も斯様な旅寝は未だ馴れなさらぬのであるから、成程それも面白いであらう、「然らば明朝歸ることに致さう」と仰せられる。春のこととて日もいと永く、君は退屈さに惱んでゐられたので、心を慰るために、夕暮方甚だしく霞み渡つてゐるのにまぎれて、彼處の小柴垣のもとに出でられた。このときお供の人々は何れも皆、僧院へお歸しなされ、極く心易い供人である惟光だけをひき連れて小柴垣の内をおのぞきになつた。するとすぐその西面に持佛を安置して勤行をやつてゐる尼があつた。簾を少しあげて佛前に花をささげてゐるやうに見える。中の柱に倚りかゝり、脇息の上に經文を置いて、甚だ苦しさに經文を誦してゐた尼君は、どうしても普通の人とは思はれない。どうも高貴な人らしい。年齢はどうも四十以上で皮膚は甚だ白く氣高い、身體は瘦せてゐられるが顔の形などはふつかりと肥え、眼つきの具合、頭髮の一端が美しく切られてゐる端も、長い頭髮よ



りは却つて非常に當世風らしくて美しいものであるかなと、源氏はしみじみと思ひに沈んで御覽なされた。

○もてひがみたること——これは源氏の君が、葵上、六條御息所などのやんごとなき方には疎くして、夕顔などのやうにやつれた方に心を入れなざるをいふ。○暮れかゝりぬれど——萩原廣道の評釋には「こゝより御供の人の詞也、玉小櫛にどはばの誤かといはれたる説あれど、かやうの所は上にもたび／＼ありし文法にて、日のくれかゝりたるを御供の人の語中につゞめていへる也。さて下にとあるをといへるあるの詞すこしいかと、いふをとあるべき所なり」と見えてゐる。○尼なりけり——これについても廣道は「此なりけりは、上にきよげなるわらはどもあまた出できて云々、かしこに女こそ有りけれ云々といへる所をうけて、かの女などの見えたるは此尼のつかふ人なりけりといふ意か、又は此小柴垣のあるじは尼なりといふ意か、されど猶穩かならず、案にありけり」とありしを寫し誤れるにや」と言つてゐる。何れもこの所を解する上に於て参考となるものである。

高僧の話も一段を告げたので、玆處にまた尼君を點出し、「なべてならずもてひがみたる事好み給ふ御心なれば」と言ひ、まさに來らんとしてゐる源氏の君の身邊をほのめかしてゐる。

清げなるおとな二人ばかり、さては童女ぞ出ていり遊ぶ中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣山吹などのなれたる著て走りきたる女子、あま

○清げなるおとな二人——尼君の傍に侍る女房である。  
○山吹——裏山吹の衣は

表黄裏紅也。花山吹は表薄粉裏裏黄也といふ。なごといふのはかいまみであるためにたしかに見えないのである。  
○おひさき見えて——生長してゆくさまが美しいことであらうと見えるのである。  
○赤くすりなして——泣いて手で顔をこすり、紅くなつたのをいふ。  
○すこし覺えたるどころ——藤壠と籠の上との似てゐることを言はうとして、先づ尼君に似てゐることはいふ。  
○雀の子を云々——時は三月の晦日頃であるからして、雀の子がだん／＼巢立つのである。  
○いぬき——犬君の略、ここにゐる女子即ち紫の上に仕へてゐる女童。  
○藤籠の中に——「ふせご」は伏籠である。藤籠の上に伏せて衣をかけ、衣に香を薫きしめるに用

た見えつる小兒に似るべくもあらず、いみじうおひさき見えて美しげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらく／＼として、顔はいと赤くすりなして立てり。「何事ぞや。童女とはらだち給へるか」とて、尼君の見上げたるに、すこし覺えたるどころあれば、子なめりと見給ふ。「雀の子をいぬきが逃しつる。藤籠の中にこめたりつるものを」とて、いとくちをしと思へり。このゐたる大人、「例の心なしの、かゝるわざをしてさいなまるゝこそいと心づきなけれ。何方へかまかりぬる。いとをかしうやう／＼馴れつるものを。鳥などもこそ見つくれ」とて立ちて行く。髪ゆるらかにいと長くめやすき人なめり。少納言の乳母とぞ人いふめるは、この子の後見なるべし。尼君、「いであなをさなや。いふかひなうものし給ふかな。おのが／＼今日明日になりぬる命をば何ともおぼしたらで、雀したひ給ふほどよ。罪得ることぞと常に聞ゆるを、心憂く」とて、こちやといへば、ついゐたり。つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじう／＼つくし。ねびゆかむさま、ゆかしき人かな



と目とまり給ふ。さるは限かぎなう心を盡し聞ゆる人に、いとよう似にたてまつ奉れるがまもらるゝなりけりと思ふにも、涙ぞおつる。

○このあたる大人——前に大人二人とありし人、この人少納言の乳母である。  
○例の心なしの——いつものそつかしやが。  
○さいなまるる——いぢめらるること、さいは罪の字の音であらう。折檻される。  
○少納言の乳母とぞ——紫上の乳母である。少納言のめのとと人のよぶを垣ごしに源氏の聞き給ふのである。  
○あなをさなや——尼君のいさめ給ふ詞。紫上がとしよりは心をさなしといふ。我今日明日になりたる命を、まだいつまでもあるやうに思ひ給ひて、雀の子をさし給ふよと歎くのである。

清楚な身なりをしてゐる女が二人ばかりと、それから又少女とが出たり入つたりして遊んでゐる。その中に十歳ばかりの年頃であらうかと思はれて、白い衣山吹衣などの着古きふるしたのを着て走り出でて来た女兒がある。そこには澤山の女兒が見えたけれども、それ等の女兒には比べものにもならぬ程美しい兒である。この女兒が生長したならばさぞかし美しい女になるだらうと思はれて美しい容姿である。頭髮は扇をひろげたやうに房々とゆるがし、顔は泣いて手でこすつた爲めに赤く泣きはらして立つて居た。「何事をなさつたのですか、女兒達と喧嘩でもしたのですか」と、尼君が顔を見上げて言つた。そのとき源氏は尼君の顔を御覺なさると、女兒の顔と少し似た所があつたので、さてはこの子は、この尼君の子であるのだらうと思召される。すると女兒即ち紫上は「雀の子をいぬきが逃がしてしまひました。伏籠の中に入れて置いたのではありませんか」と言つて、甚だ残念がつてゐる。そこにゐた女が「さあ、何時ものそつかしやが、そのやうな悪戯いたづらをして、いぢめられるとは腹立はらたしいことである。その雀の子は一體何處へ行きましたか。あの雀の子はこの頃はそろそろ可愛らしくなり、だん／＼と馴れてきましたのに惜しいことである。鳥などに見つけられると大變であります」と言ひながら出て行く。その女の頭髮はゆら／＼と長く見苦しからぬ人のやうである。人はこの人を少納言の乳

○今日明日になりぬる命をば云々——尼君病みて今日明日かも知らない命であるのに、紫の上は何とも思はないで、罪とする雀の子をさし給ふよ。  
○給ふほどよ——心のほどの意、年のほどといふのはよくない。  
○髪つき、髪かみの生ひざまいふ。  
○ねびゆかむさま——大人しくなる様子。  
○さるは限なう心を盡し——藤壺である。紫上は藤壺によく似てゐることいふ。元來藤壺とはなばとめひである。紫上は藤壺の兄の式部卿の御子である。

母と言つて呼んでゐるのは、この女兒の後見をする人であるのだらう。さて尼君が「おやまあをさないことを言ふのか、まことに言ひ甲斐のないなされ方であるかなあ、私が病身となつてこのやうに今日死ぬか、明日死ぬかといふ壽命となつてゐるのを、何とも思はないで雀をしたいなさるその心のほどこそ困つたものだ。斯く生き物をやしなふことは罪障つみづみとなると常に殺へ申しでゐるのは、まだそれがわからぬとは心配なことである」と言つて、さあこちらへいらつしやいと申されると、女兒紫上は畏つてそこにつくばはれた。その顔を見ると大變愛らしく、眉のあたりは匂ひやかであり、あどけなくも掻き上げた額の生え具合、頭髮の様子もひどく美しい。紫の上は斯く美しい姿であるから、これからだん／＼と大人になつてゆくさまは、益々美しくなり心を引かれる女であるかなあと源氏の君は特に目をつけて御覽になる。それは源氏の君が甚だしく心を傾けて戀ひ慕つてゐられる藤壺の君にこの紫上が、非常によく似てゐられる爲めに、特に注視せられるのであると思召されるについても、先づ先き立つものは涙である。

○罪得ることぞ——明星抄に涅槃經第四金剛身品持戒比丘尼不得得畜養ちくよう、奴婢牛羊非法之物。云々と引用してゐる。○髪さし——玉の小櫛に「髪かみのさしさまといふことにて、木の枝のさしたるさまを枝さしといひ、目の物をさして見るさまを、まなこさしなどいふたくひ也、さればこれは額の際より頂の方へ髪かみの生ひのぼりさせるさまをいふ言也。髪かみのさすといふも、枝のさすと同じ心ばへなり。此詞卷々に多し皆然る也」とあるはよろし。

評 こゝにもたぐひまれなる美しい美女兒を描いて、そのあどけなき様を寫し、物語の變化に妙



を極めてゐる。読む者は常に新しい興味にさせられるのである。

尼君かみをかきなでつゝ、「梳ることをもうるさがり給へど、をかしのみ髪や、いとほかなうものし給ふこそあはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかゝらぬ人もあるものを、故姫君は十二にて殿に後れ給ひしほど、いみじうものは思ひしり給へりしぞかし。たゞ今おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ」とて、いみじう泣くを見給ふも、すゞろに悲し。幼心地にもさすがにうちまもりて、伏目になりて俯したるに、こぼれかゝりたる髪、つや／＼とめでたう見ゆ。

おひ立たむありかも知らぬ若草をおくらすつゆぞ消えむそらなき  
またゐたる大人、げにとうち泣きて

はつ草の生ひゆくすゑもしらぬまにいかでか露の消えむとすらむ  
と聞ゆる程に、僧都あなたより来て、「こなたはあらはにや侍らむ、今日しも端におはしましけるかな。このかみの聖のかたに、源氏の中將のわらはやみまじなひにもし給ひけるを、たゞ今なむ聞きつけ侍る。いみじう忍

○梳ること——髪をときつけること。

○ほかなう——しかりとせぬ。なにとなく弱い。

○うしろめたけれ——紫の上のものはかきか見て、この世をさらばなど思ふにつき、尼君が心細く思ふのである。

○かばかりになれば——このやうに十歳位の年齢になれば。

○故姫君——紫の上の母で尼君の娘。

○殿におくれ——按察大納言に死に別れ。

○すゞろに——何といふこともなく。

○うちまもりて——尼君を見つめて。

○おひ立たむ云々の歌——補欄参照。

○またゐたる大人——そこにゐた少納言の大人ではなくして、他のもう一人の大人をいふ。

○はつ草の生ひ云々の歌——補欄参照。

○僧都あなたより来て——僧都の坊はこの尼君のおはする西面なる所よりはおくまりたる彼方にある。

○今日しも端におはしましけるかな——いつも奥深くに居給ふのであるのに、今日に限りては近くににおほしますよといふこと。

○ものし給ひける——おはしけるな。

○ここに侍りながら御とぶらひにも——私(僧都)はここにゐながら尼君のところへお訪れもいたしませんでした。

びたまひければ、え知り侍らて、こゝに侍りながら御とぶらひにも参うてざりける」とのたまへば、「あないみじや。いと怪しきさまを人や見つらむ」とて簾おろしつ。

尼君は女兒の頭髪をかきなでながら「髪をときつけることはうるさく思召なさるだらうがそれでも美しい髪であります。たゞあなたがしつかりとなさらないのが、なさけなく心配になります。このやうに十歳位の年齢となりなされるならば、このやうに子供らしいことを言つてゐる人はないのであるのに、この方は一體どうしたのでありませう。今は亡くなられた母姫君は十二歳のときに父按察大納言が亡くなられて、御自分一人となられたが、なか／＼立派に世の中の物事をわきまへてゐられましたよ。只今私があなたをこの世に残して死んでしまつたらば、どうしてこの世に御暮しなさることでありませう」といひながら尼君が泣きなされるので、源氏の君はこちらからそれを御覽になつてゐたが、何となく悲しく思召された。さて紫上はまだ幼少な心に何のわけも分らないが、それでもやはり悲しくなり、尼君の姿を見つめ、やがてうつぶし目になり下の方を眺めてゐられたが、房々としてぼれかゝる頭髪は、つや／＼とした黒髪で愛らしく見えた。

尼君の歌に

おひ立たむありかも知らぬ若草をおくらすつゆぞ消えむそらなき



すると、そこにゐた他のもう一人の大人が、なるほど最も悲しさに涙を流して、

はつ草の生ひゆくすゑもしらぬまにかでか露の消えむとすらむ

と歌を詠み申し上げる。その間に向ふの方から僧都がやつて来て「これはまあ、あなた方が端近くにゐられるので、外からよく見えるではありませんか、今日のやうな日に限つてこのやうに端近くに居られることではありませんか、兄上の御僧の許に、源氏の中將がわらはやみの平癒の呪をするために御出でなされたといふことを、只今聞いたのであります。源氏の君はひどく御微行のさまでゐらつしやつたので、私も一向存じなかつた。そのため茲處にゐながら御訪ねをいたしませんでした」と告げたので、尼君は「ああ、それは大變なことである。このやうな見苦しい有様を人が見つけるでせう」と言ひながら御簾を下した。

○おひ立たむありかも云々歌——女兒紫上が是からだん／＼と生長して、その行末はどうなるかわからない若草のやうに若い姫を、あとに残して死んで行かねばならぬ露のやうな私の生命は、どこへ消えて行つてよいやら迷うて居ります。露は若草より出でて消えむと言ふ料に置き命にたとへてゐる。空なきとは心まどひして物のかたも知らぬをいふ。○またゐたる大人——玉の小櫛に「少納言にはあらず、上におとな二人と有りて、少納言が事はこのゐたる大人云々とて上に見えたるに、又ゐたると云るは、今一人のおとな世、又といふを歌へかけてゐたおとなの又よめるといふ意ともすべけれど、少納言は既に立ちてゆくとあれば、こゝにゐたるとはいふべきにあらざるをや」と見える。○はつ草の生ひゆくすゑ云々の歌——若草(紫上)

の生長なざる行末を見さだめなざるまでは御心を強うしてながらへ給ふべきであるのに、どうして紫上の行末を見届けずして露は消えて死んでしまふなど、仰せられるのであらうかの意。  
紫上の美しさを描くと共に、そのあどけないところが描かれてゐるのは面白い。

○この世にのしり給ふ——玉の小櫛補遺に「この詞いかが、ののしり給ふとか、ののしり侍るとか有りしを誤れるか、ののしるとはかしがましとく評判するか云ふ也」とある。  
○世を捨てたる法師云々——世を捨てた僧であるが、この君を見ると慈を忘れ命が延びたやうな心地がする。  
○いで御消息聞えむ——源氏へ消息を傳へようとして、僧都が立つのである。  
○かへり給ひぬ——源氏がのぞいてゐられたのがお歸りになるのである。  
○かかればこのすきものどもは——このほかのといふ意。すきものは雨夜

「この世にのしり給ふ光源氏、かゝるついでに見奉り給はむや。世を捨てたる法師の心地にも、いみじう世の愁わすれ齡のふる人の御有様なり。いで御消息聞えむ」とて立つ音すれば、かへり給ひぬ。あはれなる人を見つるかな、かゝればこのすきものどもは、かゝる歩をのみして、よくさるまじき人をも見つけるなりけり。たまさかに立ち出づるだに、かく思の外なることを見るよと、をかしうおほす。さてもいと美しかりつる兒かな。何人ならむ。かの人の御かはりに、且暮のなぐさみにも見はやと思ふ心深うつきぬ。うち臥し給へるに、僧都の御弟子、惟光を呼び出でさす。程なきところなれば、君もやがて聞き給ふ。「よぎりおはしました。今なむ人申すに、驚きながら侍ふべきを、某この寺に籠り侍るとはしろしめしながら、忍びさせ給へるを、うれはしく思ひ給へてなむ。草の御席も、こ



の坊にこそまうけ侍るべけれ。いと本意なきこと」と申し給へり。

の品定めせし人をさして  
ある。さてこの意は源  
氏君のたまさに立ち出  
で給ふのでさへも、かく  
案内にうつくしき人を見  
給ふのであるから、かの  
すきものどもが、身軽く  
してあぐれかやうなる  
ありさまのみすれば、  
世にかくれたるよき人を  
も見つくるのであると、  
かの品定めするときの人々  
のさまを思召されるので  
ある。

○さても——さうはいつ  
ても。  
○かの人の御かはりに—  
—紫上を露臺の御かはり  
に。

○よぎりおはし——よぎ  
るとはよきて過ぐる意。  
こゝも其意で僧都の坊へ  
は立よらず過ぎ給ふをい  
ふ。  
○うればしく——せんか  
たなく心うく思ふ。  
○草の御席——旅寝の御  
席。

○

僧都が言ふには「世間からやかましく評判されてゐられる光る源氏の君を、このやうな機会  
に御覽になつては如何でありますか。世を捨て、しまつた法師の身分である私の如き者の心地  
でも、源氏の君の御姿を見れば、世間の憂愁も忘れてしまひ、壽命も延べるやうな美しい方で  
あります。さあ、源氏の君のもとに御消息を申し上げませう」と言つてそこを出で立つた様子  
がしたので、源氏の君はすぐ僧院の方へお歸りになつた。

源氏の君が思召したるには、さても面白き人を見たことであるかなあ、このやうなことがあ  
ればこそ、彼の雨夜の品定めするときの好色な人々が、かやうなそゞろあるきをして、よく思ひ  
がけないよき女などを発見したのであるわい。今自分がたまは出かけたのでさへも、斯く思ひ  
がけないことを見るのであるよと、面白く思召される。さてそれにしても甚だ美しかつた女兒で  
あつたよ。一體あれはどういふ人であるだらう。彼の藤臺の代りに、彼の女兒(紫上)を朝晩自分  
の傍に置き、慰めものとして見たいものであるわいと思召される御心は一方ではなかつた。源  
氏の君はごろりと臥寝してゐられるところへ、僧都の御弟子が訪づれて、惟光を呼び出し、僧  
都の傳言をつたへる。弟子が惟光に語つてゐる所は源氏の君の休んでゐられるところは、程  
もなき近いのであつたからして、源氏の君もすぐにお聞き取りになる。さて僧都からの傳言は  
斯うである「私僧都のところは通り過ぎてお立ち寄りにならず、僧院の方へお出でなされたとい  
ふことを、只今或人が申したのを聞いて、それこそとびつくりし、すぐさま愚僧が参上いた

すべきであります。愚僧がこゝにゐることを御存じながら、こつそりと分らないやうにして  
來られたことを、せんかたなく心憂く思つて居ります。今晚の君の旅寝のお休みどころも、彼  
の僧院にこそ既に設備されてゐるのであります。本當につまらないことでもあります」と斯う  
申し傳へた。

○この世にのゝしり給ふ——或抄に「世上にひかる源氏といひて人のほめ奉る源氏を見給へ  
と也、かやうの時節ならではえ見給はじと也」とある。

「かゝればこのすきもの云々」はこれ帯木の巻雨夜の品定めと照應するものである。

「いぬる十餘日のほどよりわらはやみにわづらひ侍るを、度かさなりて堪  
へがたう侍れば、人の教のまゝに俄に尋ね入り侍りつれど、かうやうなる  
人の、驗あらはさぬ時、はしたなかるべきも、たゞなるよりはいとほしう  
思ひ給へつゝ、みてなむ、いたう忍び侍りつる。今そなたにも」とのたまへ  
り。すなはち僧都まゐり給へり。法師なれど、いと心恥しく、人がらもやむ  
ごとなく世に思はれ給へる人なれば、輕々しき御有様を、はしたなうおもほ  
す。かく籠れるほどの御物語など聞え給ひて、「同じ柴の庵なれど、少し涼  
しき水のながれも御覽せさせむ」と切に聞え給へば、かのまだ見ぬ人々に、

○人の教の——この前に  
ある人北山にながし寺  
といふ所にかしこくおこ  
なふ人侍るといひし事を  
さす。  
○かうやうなる人の云々  
——効驗があれば子細な  
きも、萬一驗なきときは  
聖僧の威徳にもかかはる  
ことと思つた故に、し  
んで來たと源氏の用意の  
あるところをいふ。  
○はしたなかる——さま  
りが悪い。  
○すなはち僧都まゐり—  
—源氏君の留意なきを聞  
きて、すぐに僧都が参上



したのである。  
 ○軽々しき御有様——僧  
 都は心恥づかしきまでに  
 用意があり、世にも尊  
 思はれた人であつたから  
 して、源氏は自分の姿が  
 あまり軽々しくやつして  
 あるのを恥づかしと思ひ  
 給ふ。  
 ○同じ紫の庵——これも  
 かしこも同じ草庵である  
 が。

○涼しき水——時節に關  
 係なく水の清くすずしげ  
 なるをいふ。  
 ○かのまだ見ぬ人々——  
 前の榮垣のかいまみの時  
 源氏の君なまだ見ぬ人々  
 をいふ。  
 ○つつましう思せど——  
 恥づかしく思し召しなさ  
 つたが。  
 ○げにいと心ことに——  
 僧都は心ゆかし、人と思  
 召されたが、なるほど庭  
 の縁もよしありと思ひ給  
 ふ。  
 ○同じ本草——さなし

ことごとくしういひ聞かせつるもつゝ、ましよう思せど、あはれなりつるありさ  
 まもいぶかしくておはしぬ。げにいと心ことによしありて、同じ本草をもう  
 ゑなし給へり。月もなき頃なれば、遺水に篝火ともし、燈籠などにもまゐ  
 りたり。南面いと清げにしつらひ給へり。そらだきもの、心にくく、薫りい  
 て、名香の香など匂ひみちたるに、君の御追風いと異なれば、うちの人々  
 も心づかひすべかめり。

源氏の君は惟光をして言葉を取り傳へしめられるには「去る十餘日ばかり以前から、私（源  
 氏の君）がわらはやみにとりつかれて惱んでゐましたが、度々おこりますので、どうとも堪へ  
 られないやうになりました。そのとき或人が北山の某寺にかしこおこなひ人が居て、加持祈  
 禱で病氣を全快せしめるといふことを知らせてくれましたので、急に思ひついてこゝへまゐり  
 ました。このやうな聖僧が加持を行つて効驗をあらはさないときは、それこそまじりの悪いも  
 ので、たゞ普通の人の場合よりも甚だ氣毒なものであるを思ひまして、こつそりと人に分らな  
 いやうにして來ました。今ちきに貴殿の方へも参ります」と仰せられた。すると僧都は早速源  
 氏の君のもとへ参上した。僧都は法師の身であるけれども、源氏が對面なると心恥しいほど  
 身のたしなみがあり、人柄も高貴で世間からも尊敬せられてゐる人であつたからして、源氏は

山におひたると同じ木  
 草をも、さるかたに植ふ  
 なして見所あるをいふ。  
 ○遺水に篝火ともし——  
 遺水の上に篝火をともし  
 し、燈籠にも火をともし  
 たのである。上に火と言  
 つたからして下にはほほ  
 いてゐる。  
 ○そらだきもの——空燒  
 の意で、たきものをいづ  
 こともなく、たきくゆら  
 すこと。  
 ○名香の香——佛に奉る  
 香をいふ。  
 ○君の御追風——おひ風  
 とほうしろから吹く風を  
 いふのが常であるが、こ  
 こは御衣にしみ給へるた  
 きものの香のあゆみ給ふ  
 跡に残るをいふ。

御自身があまりに輕装な姿にやつして來られたことを、きまり悪く思召しなされた。僧都は自  
 分がこゝに籠居してゐる間のことにつきいろ／＼と御物語申し上げて、さて言ふには「拙僧の  
 住居もこの僧院と同じやうに柴の庵であります。清く涼しげな水の流れてゐる庭の有様を少  
 しなりとも御覽にかけたうございます」と強く申し上げたので、源氏は彼のまだ一度も見えな  
 い尼君などに對して、この僧都が源氏のことを仰々しく語り聞かせたのも恥かしいとは思ひな  
 されたが、あのときにしみる／＼と思はれた女兒の様子も不審であつたから、君は早速お出でな  
 された。いよ／＼僧都の庵に行き着きなると、まことに山と同じい木や草までが植ゑられて  
 ゐるが、それは特に心を用ひて風流に出來てゐる。恰度そのときは月の出ない頃であつたから  
 して、遺水には篝火を燃し、燈籠には火が點せられてあつた。南向きの坐敷には特に清く美し  
 く準備があつた。部屋にたきくゆらしてある空燒の香氣は心ゆかしい程薫りて、名香の香  
 氣などあたり匂ひ満ちてゐたが、源氏の君の御衣にたきこめてある香氣が、君の歩みなさる  
 につれて、たゞよふて香り來るのは、又特別によい香であつた。それで僧都の家の者どもは似  
 つかはしからず思はれまいと用意をしてゐるやうであつた。

○遺水——作庭記(群書類從三三六十二卷に出づ)に「先水のみなかみの方角を定むべし。經  
 云、東より南へむかへて西へ流すを順流とす。西より東へ流すを逆流とす。然れば東より西へ  
 流す常事也。又東方よりいだして、舍屋のしたをとお(ほ)して未申の方へ出す。最吉也。青龍  
 の水をもちて、もろ／＼の惡氣を白虎のみちへあらひ出すゆへ也。その家のあるじ疫氣惡瘡の



やまひなくして、身心安樂壽命長遠なるべしといへり」と見える。

「君の御追風いと異なれば云々」の句は、源氏の君のすぐれ給ふことのよしを筆を極めて書いた例の筆法である。

○世のつねなき物語——世の無常なることについての物語。  
 ○わが御罪のほど——藤壺に道ならぬ懺をしたるなまふ。  
 ○まして——生けるかぎり云々に對して、まして後世は尙更であるといふ。  
 ○晝の面かげ——晝見た女兒即ち紫上の容姿。  
 ○尋ね聞えまほしき夢を——ここにものし給ふ人をたづねまほしき夢を見たのか、今ここに來て思ひ出した。  
 ○うち笑ひて——源氏君のそら夢がたりを、僧都のさとつたのをそれとなく知らせるために、うち笑ひてうちつけなる云々と書いたのである。

僧都、世のつねなき御物語、後の世のことなど聞え知らせたまふ。わが御罪のほど怖しう、あぢきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれを思ひなやむべきなめり。まして後の世のいみじかるべきをおぼし續けて、かうやうなる住居もせまほしう覺えたまふものから、晝の面かげ心にかゝりて戀しければ、「こゝにものし給ふは誰にか、尋ね聞えまほしき夢をみたまへしかな。今日なむ思ひ合せつる」と聞え給へば、うち笑ひて、「うちつけなる御夢語にぞ侍るなる、尋ねさせ給ひても御心劣りせさせたまひぬべし。故按察の大納言は、世になくて久しくなり侍りぬれば、えしろしめさじかし。その北の方なむなにかしが妹にはべる。かの按察かくれて後、世を背きて侍るが、このごろわづらふこと侍るにより、かく京にもまかてねば、たのもし所に籠りてもものし侍るなり」と聞え給ふ。

○うちつけなる——だしめける。  
 ○故按察の大納言——大納言で陸奥出羽の按察使を兼ねたる人をいふ。例の尼君の夫である。  
 ○その北の方——按察の北の方は今の尼君で、僧都の妹にあたる。  
 ○たのもし所に——よき身の落ちつき處として。僧都ここにこもりゐて京へも出でないので、それをよきたのみ所として、尼君の來り住むのである。

附

僧都は人生の無常轉變果敢なき物語や、後世菩提のことなどについて源氏の君にお話を申し上げる。するとそれをお聞きになつてゐた源氏の君は思召されるには、嘗て藤壺に懸想し、道ならぬことのあつたのも空おそろしくなり、かうした心苦しいことを心に思ひ惱んで自分の一生涯を苦しむのであらう。生きてゐる現世でさへ斯く思ひ苦しむのであるからして、死んだ未來世に於ては、猶一層甚だしく苦しむであらうと思ひ續けられ、それでは一層のこと、出家でもしてこのやうに山奥に隠者の生活なりともして見たいものだとお考へになつた。このやうな思ひにも沈みなさるが、又一方では晝間見た女兒の姿が、心の中に思ひ浮ばれて戀しくなつたから、源氏は「此處に住んでゐられる女兒は誰人ですか、一度御伺ひいたしたいと夢で見たことがあります、今日こそ此處へ來て思ひ出される」と仰せられたので、僧都はとんでもないこととございますと打笑つて、「だしぬけに仰せられる御夢語りでありますかなあ。お尋ねなさる女兒はごくつまらぬ子でありますから、御覽になると存外つまらぬ子であるかと思召しなさるでせう。今は既に亡くなつた按察大納言も、死んでから随分経てゐるのですから、君には最早お忘れになられたでせう。その大納言の妻が、この愚僧の妹でございます。彼の按察大納言が死にましたからは、その妻は出家して尼となつてゐましたが、此頃は病氣になりましてからは、愚僧が斯うして京にも出ないで山奥に居りましたのを、恰度適當な身の隠し處であると言つて、こゝにまゐりまして世からは隠れてゐるのであります」と源氏の君に申し上げる。

○按察使——地方の政治を視察し、人民を慰撫する。又所管の國司の非違を按檢する臨時の



官である。幾内に置くを攝官と稱し、六道に置くを按察使といふ。名稱異なるもその職務は同じ。國司及び京官の内で適任の人物を選んでこれに任す。元正天皇養老三年七月始めて之を置かれたが寶龜の頃から諸國に置かれたことがない。多くは國守鎮守府將軍が之れを兼任してゐた。然し邊防のこと廢れるやうになつては納言とか參議が兼帶するやうになり、たゞ名義ばかりが存在してゐた。

源氏が僧都のやうな生活をして見たいものであると仰せられながら、紫上のことを思ひ出されるあたりは平安朝時代の思潮をあらはしてゐる。

「かの大納言のみむすめ、ものし給ふと聞き給へしは、すきくしき方にはあらで、まめやかに聞ゆるなり」とおしあてにのたまへば、「女たゞ一人侍りし、亡せてこの十餘年にやなり侍りぬらむ。故大納言は、内裏に奉らむなどかしこういつき侍りしを、その本意の如くも、のし侍らて過ぎ侍りにしかば、唯この尼君一人もてあつかひ侍りし程に、いかなる人のしわざにか、兵部卿の宮なむ、しのびて語ひつき給へりけるを、もとの北の方、やむごとくなくなどしてやすからぬこと多くて、且暮ものをおもひてなむなくなり侍りにし。物思にやまひづくものと、日に近く見たまへし」など申し給ふ。

5

○かの大納言のみむすめ  
紫上を尼君の子と思召されて源氏の尋ねなきるのである。  
○すきくしき方にはあらで——世の色といふ浮氣なことなくて。  
○女たゞ一人——僧都は紫上の事とは知らないから、尼君の娘、即ち紫上の母の事を答へるのである。  
○かしこういつき——大切に育てる。  
○いかなる人のしわざにか——どのやうな人の所爲で、兵部卿の宮をこつ

そりと通はしめるやうになつた。  
○兵部卿——藤原の兄。  
○もとの北の方——兵部卿の本臺。  
○やむごとくなどして——なみくでない。  
○やすからぬ——嫉妬する。  
○物思ひにやまひづく——物思ひ即ち心配するために拘氣になると世間ではいふが、その事實を眼前に見ました。  
○さらばその子なりけり——源氏の心に紫上を尼君の子と思つてゐたら孫であつたと思ひ合はせられる。

○かの人にも通ひ——紫上は兵部卿の血統であるから似かよひ給ふ。藤原は兵部卿の妹のため。  
○人のほど——宮の御むすめであるから。  
○なか／＼のさかしら心なく——なまじひのかしこたてをする心もなく。

さらば、その子なりけりと思し合せ給ひつ。みこの御すぢにてかの人にも通ひ聞えたるにやと、いとゞあはれに見まほしく、人のほどもあてにをかしう、なか／＼のさかしら心なくうち語ひて、心のまゝに教へ生ふし立て、見ばやとおもほす。「いとあはれにものし給ふ事かな、それはとゞめ給ふかたみもなきか」と、幼かりつる行末の猶たしかに知らまほしくて問ひ給へば、

源氏の君はこゝにゐた先の女兒はこの尼君の娘であると考へられ、その娘のことが尋ねたく思つてゐられたから、「彼の按察大納言には、娘があつたやうに聞いてゐたが、その娘はどうしてゐるのか、斯く娘のことを尋ねるのは、何だか浮氣心のやうであるが、決してそのやうな好色の方で言ふのではなくして、眞面目に申上げるのであります」と、源氏の君はそれとなく想像して仰せられた。すると僧都は「左様でございます。大納言には娘が一人ありましたが、今はもうその娘が死んで十年餘りも経つことでありませう。父の故按察大納言は、この娘を是非とも宮中に入内せしめて、宮仕でもさせたいと大切に養ひ育てゝゐましたが、その素志を遂げられない中に、到頭亡くなりました。それから後は尼君一人で世話をしてゐましたが、何時の間にか何人かゞ、なかだちをいたしまして、兵部卿の宮がこつそりと世をしので娘の許に通



○心のままに教へ——今からは我、心のままに教へ育てて見たいと源氏の仰せられるのである。  
 ○とどめ給ふかたみ——この世にとどめ置きなされた忘形見の子はなにか。  
 ○幼かりつる行末——幼見についての話の本末なほも知りたく源氏が思召されて。

ひなさつておられました。そのうちに兵部卿の本妻でゐられた方がなみ／＼ならぬ嫉妬などをされ、容易ならぬ苦しみが多くなり、娘は朝晩それを心配しながら、到頭惱みの爲めに死んでしまひました。世間では心配事があると、その爲めに病氣になるものだとよく言ひますが、愚僧もその事實を眼前に目撃したのであります」と申上げる。源氏の君は然らば、その子であつたかと考へ合せられた。兵部卿の血筋であるから、彼の藤壺にも似通ふてゐられるのだらう。と嘗て見た女児を一層可愛く見たいものだと思ひなされ、高貴な方の子とて人柄も上品に趣が<sup>あり</sup>、なまじひのかしこだてをすする心もないのは實によい。斯うした兒と語り合つて、心の儘に教へ育て、見たいものであると考へられる。さて源氏の君が仰せられるには「それは甚だ可愛相なことであつたなあ、その娘には、この世に残して行つた忘形見の子供でも無かつたか」と、彼の幼い女児についての物語の結末を、一層明瞭に聞きたく思召されてお尋ねになつた。

○かしこう——この語いろ／＼な意義に用ひられる。一には「都合のよ」意で、源氏若菜の「やう／＼くれかゝるに風吹かずかしこき日なり」二には「賢の字」の意で、萬葉集の「いにしへの七つのかしこき人」三には「いみじき」の意で、土佐日記の「廿七日風吹き波あられれば舟出さず、これかれかしこくなげく」四には「勝れた」意で、大和物語の「みちの國いはての郡より奉れる御鷹世になくかしこかりければ」の如きである。○あてにをかしう——評釋に「をか」うの下すこし詞のたらぬこちす落した」といふ。

○なくなり侍りし程にこそ——紫上の母上が死なれなさる頃、女子一人を生みなされた。  
 ○それにつけても——その女子の事についても、尼君は物思ななさる。  
 ○さればよ——さればこそ思つてゐた通りに、兵部卿の宮の娘であつた。  
 ○怪しきことなれど——不思議にあやしまれることであるが。  
 ○ゆきかかづらふ——關係してゐるものもあるがの意で、葵の上をさす。  
 ○まだ似げなき程と當の人に云々——姫君はまだ十歳頃であるから、我と年齢が似つかはしくないと、世の普通の人の考へるやうに思召されるだらうが。  
 ○女は人にもてなされて云々——女は人に世話せられて、人の妻ともなるものであるからして、世捨人であつた僧の身で何

「なくなり侍りし程にこそはべりしか、それも女にてぞ。それにつけても、物思の<sup>ものおもひ</sup>もよほしになむ、<sup>よほ</sup>齡の末に思ひたまへ歎き侍るめる」と聞えたまふ。さればよとおほさる。「怪しきことなれど、幼き御後見におほすべく聞え給ひてむや。思ふ心ありて、ゆきか、づらふ方も侍りながら、世に心の染まぬにやあらむ、<sup>ひぢりや</sup>獨住にてのみなむ。まだ似げなき程と、常の人に思しなずらへて、はしたなくや」などのたまへば、「いと嬉しかるべき<sup>おほせごと</sup>仰言なるを、まだ無下<sup>むげ</sup>にい<sup>い</sup>はけなき程に侍るめれば、<sup>たはぶれ</sup>戲にても御覽じ難くや。そもそも女は、人にもてなされて大人にもなり給ふ物なれば、委しくはえとり申さず。かの祖母北の方に語ひ侍りて聞えさせむ」とすくよかに言ひて、物ごはきさまし給へれば、若き御心に恥しくて、えよくも聞え給はず。

さて源氏のお尋ねに對し、僧都が御返事申すには「彼の娘が亡くなります頃、一人の子を生みました。それはやはり女児であります。その女児についても尼君は心配をいたし、年老いた晩年にいろ／＼と思ひなげいてゐるやうです」と申上げる。源氏は彼の女児は藤壺に似通つてゐると思つてゐたが、それではなるほど兵部卿の子であればこそ、似てゐるのも道理のあるこ



とも申上げられぬから、祖母北の方に言つて何とか申しあげます。  
○すくよかに——きつぱりと。あつさり。

○すること侍る頃——この日頃、勤行する事があ

る。  
○浪のよどみ——玉の小櫛横遣にあるが如く、よどみは「よみ」の誤つたもので、よみは響をいふ。  
○ねぶたげなる讀經——僧都の讀經である。  
○すするなる人——何の考へもない人。  
○初夜と言ひしかども——僧都は初夜少し過ぎてから歸つてくると言つたが。  
○鼓の脇息に——珠數が脇息に引きあたるのである。  
○外に立て渡したる屏風の中を云々——尼君の居所は西おもてで、源氏の君は南おもてであるから西おもてとの間の外に立てた屏風。  
○扇かならし給へば——昔は人を呼ぶに扇を鳴したのである。今人の手をたたくに同じ。  
○おぼえなき心地——内

若 紫

五一〇

とだと思召しになる。源氏は又僧都に「世人からはあやしまれることだが、我をその幼い女兒の後見と思つて、世語をさせてくれるやう尼君に話してくれないか。我には實は考へるところがあつて、關係してゐる本妻葵の上はありながら、どうも世によくある心に合はないのであらうか、その方は少しも音づれないで、只今は獨身生活ばかりしてゐます。然し我と姫とは年齢が甚だ懸け隔つてゐるからして、似つかはしくないといふので、世間普通の夫婦の人達に思ひ比べ、不都合であると思ふか」と仰せられるので、僧都は「甚だ嬉しいこととして感謝すべき仰言でありますが、御承知の通り、まだ極く幼少なことでもありますから、戯談にも御慰めに彼の女兒を御覽なさるのはむづかしいでせう。元來、女子といふものは、人に世話さられて結婚し、一人前の嫁となるものでありますから、愚僧の如き俗界を去つたものが、縁談の世話をするのもおかしいのでありますから、委細なことはこゝに申しません。たゞ彼の女兒の祖母北の方に相談いたして彼の尼から御返事を申させませう。ときつぱりと言つて、きつとした強い素振りであつたので、まだ年若い心地でゐられる源氏の君は、心中恥しくなり、なほ推して委しく尋ねるのは止めなされた。

僧都は物ごはきさまをしたので、源氏の君も、ひやりとして「若き御心に恥しくて、えよくも聞え給はず」と、淋しくしてゐられるのが、この場合讀者の心を引くのである。

阿彌陀佛ものし給ふ堂に、すること侍る頃になむ。初夜いまだ勤め侍ら

ず、過して侍はむ」とてのほり給ひぬ。「君は心地もいとなやましきに、雨少しうちそゞぎ、山風ひやゝかに吹きたるに、瀧のよどみもまさりて音高く聞ゆ。少しねぶたげなる讀經のたえくすぐく聞ゆるなど、すゞろなる人も、ところがらものあはれなり。ましておもほしめぐらすこと多くて、まどろまれ給はず。初夜と言ひしかども、夜もいたう更けにけり。内にも人の寝ぬけはひしるくて、いと忍びたれど、珠數の脇息に引き鳴さるゝ音ほの聞え、なつかしうゝちそよめく音なひ、あてはかなりと聞き給ひて、程もなく近ければ、外に立て渡したる屏風の中を少し引きあけて、扇をならし給へば、おぼえなき心地すべかめれど、聞きしらぬやうにやはとて、おざり出づる人あなり。少し、ぞきて、あやし、ひが耳にやとたどるを聞き給ひて、「佛の御するべは、暗に入りても更に違ふまじかなるものを」とのたまふ。御聲のいと若うあてなるに、うち出でむこわづかひも恥しけれど「いかなる方の御するべにかは。おぼつかなく」と聞ゆ。

僧都は「此頃は愚僧が阿彌陀佛を安置してある御堂で勤行してゐるのであります。今日はま

若 紫

五一一



の女房の心である。  
○少ししぞきて——出でた女房が少し退いたのである。  
○たどる——尋ね迷ふ。  
○佛の御しるべ——法華經に「從冥入冥」永不开佛名ことあるのにより、佛の案内であるから間違ふこともないのにと、出でたる女房を佛のしるべにとりなしてゐる。  
○いかなる方の御しるべ——佛の御しるべとのたまひしを受けて女房がいふ。

○はつくさの若葉の歌——補欄参照。  
○と聞え給ひてむや——このやうにお傳へして下さい。  
○うけたまはり分くべき人——幼少の輩上をかく言つたのである。  
○世づいたる程——男女の交りを知つてゐる年輩。  
○さるにてはかの若草——源氏の君が小柴垣のいまみのとき、祖母尼君が「おいたたむありかもしらぬ若葉云々」と口ずさみなさつたのを、源氏の君が聞き給ひて「はつくさの若葉の上云々」と

だ初夜のつとめをいたしませんので、これから勤めに行つてまゐります。つとめ終つてから又まゐりませう」と言つて阿彌陀堂へ上つて往つた。源氏の君は病氣の後とそれにいろ／＼なこゝろで心も惱ましくしてゐられるのに、更に雨が淋しく降り、山風の氣ひや／＼かに吹き、山奥の氣が身にしみ渡る。なほ溜の音の響きも、夜の更けるにつれて一層高くなつて聞ゆる。阿彌陀堂で勤行してゐる僧都の聲であらう。少しねぶたさうな讀經の聲が、絶え／＼に物凄淋しさに聞えるなど、何といふ思ひのない人でも、この場所がらとしては物哀れに感ずるのである。ましてや源氏の君は何や彼につき思ひめぐらして惱みなさる事が多くて、少しも眠られない。僧都は初夜のつとめを終へてから歸つてくると言つたが、夜もいたく更けたが歸つて来ない。尼君の居る部屋の内でも、まだ人が寝てゐないやうな様子が著しくわかる。甚だこつそりとしてゐるのだけれども珠數が脇息にあたつて鳴る音がほのかに聞える。親しくひそ／＼と物語つてゐる聲は上品であると源氏の君はお聞きなされる。さて尼君や女房どものゐる所は源氏のところから、左程遠いのでなく、却つて近いのであるから、外に建てめぐらしてあつた屏風の中を一寸引き開け、扇をバチ／＼と鳴らして人をお呼びになる。すると内にゐる女房どもは、突然呼び出される筈はないと思ひながらも、何とも知らないといふやうな様子をしてゐるわけにもゆかないと思つて、膝で歩きながら出て来た女房があつた。さて出ては来たものゝ少し後方に退きて曰く、「あら、不思議なことである。誰か呼んだやうであるが聞き間違つたのであらうか」と尋ね迷ふてゐるのを、源氏の君がお聞きになり、源氏は「佛の御案内は暗い所に入つ

ても少しも聞き間違ふものではないのをどうしたのか」と仰せられた。その源氏の君の御聲は非常に若々しく上品であつたので、女房はこれに對し御返答申し上げる聲も、君の音聲と比べられて恥しいことであつたが、女房は「どなた様の御案内でありますのか、覺束ないことではありません」と申上げる。

補 ○珠數の脇息に——枕草子に「すゝのけうそくにあたりてなりたるにぞ心にくけれ」とある。

「げにうちつけなりと、おほめき給はむも道理なれど、

はつくさの若葉のうへを見つるより旅ねのそでもつゆぞかはかぬ

と聞え給ひてむや」とのたまふ。「更にかうやうの御消息、うけたまはり分くべき人も、のし給はぬさまは、しろしめしたりげなるを、誰にかは」と聞ゆ。「おのづからさるやうありて聞ゆるならむと思ひなし給へかし」とのたまへば、いりて聞ゆ。あないまめかし、この君や世づいたる程におはするとぞおぼすらむ、さるにては、かの若草をいかで聞い給へることぞと、さまく／＼あやしきに、心も亂れて久しうなれば、なさけなしとて、

まくらゆふ今宵ばかりの露けさを深山のこけにくらべさらなむ



仰せられたのを、尼君は知らないで、どうして源氏の君がお知りなされたのかと思議に思ふのである。

○まくらゆふ今宵云々の歌——補欄参照。

○なまけなし——返歌が返くなつては、なまけなしいふのである。

○ひがたう侍る——深山のこけはいつも露でじみ／＼してゐるから、乾がたいといふのである。

○かうやうの人傳——御消息——新く人の取次ぐ消息はまだ知らない。

○ひがごと聞き給へ——紫上は斯く幼少であるのに、源氏はどうして大人のやうに思つてゐられるのだらう。

○はしたなうもこそ——侍ふ女房共が云ふのである。源氏はあさましと思ひなさるだらう。

ひがたう侍るものを」と聞え給ふ。「かうやうの人傳なる御消息はまだ更に聞え知らず、ならはぬことになむ。かたじけなくとも、かゝるついでに、まめ／＼しう聞えさすべきことなむ」と聞え給へれば、尼君、「いかでひがごと聞き給へるならむと、いと恥しき御けはひに、何事をか答へ聞えむ」とのたまへば、はしたなうもこそ思せと人々きこゆ。

源氏の君は「あまりにだしぬけなことだと思召されるのも、御尤至極なことであるが、はつくさの若葉のうへを見つるより旅ねのそでぞかはかぬ

と、斯うお傳へになつて下さいませんか」と仰せられる。女房は「そのやうな御消息を載せても、そのおもむきが判るやうな人はありませんことは、貴方も御存じのことだと思つておますが一體誰にお傳へ申してよいのであらうか」と申上げる。すると源氏の君は「自然そのやうなわけがありまして申上げるのだらうと思つて下さい」と仰せられるので、女房はその消息を待つて内に入り尼君に斯く／＼と傳へる。尼君はそれを見て思ふには、あゝ、當世風なことである。源氏の君は、この紫上が最早男女のなからひを知つてゐる年頃であるとお考へになつたのであらう。それにしても彼の年若い紫上をどうして聞き知りなされたのであらうと、いろ／＼と不思議に思はれ、遂に心の中も思ひ亂れてしまひ、時間久しく経過したので、返歌申上げるのがあまり遅くなつてはなまけないと思召され、

まくらゆふ今宵ばかりの露けさを深山のこけにくらべさらなむ

なか／＼乾がたくございますものを」と申上げる。この消息を受け取りなされた源氏の君は、「このやうな人が取次ぐ御消息は今までまだ受け取つたことがない。又かうしたことは馴れておません。甚だ恐れ入ることでありますが、このやうな機会に、直接御面會して申上げたことであります」と申上げたので、尼君は「源氏の君はどうしてまゐ、思ひがけない間違ひ事をお聞きなされたのであらうと思ひ、源氏の君が恥しげな御様子でゐられるのに、どのやうに御返答申したらよいだらう」と言はれると、傍にゐた女房どもは、尼君には早く御返事をなさらぬ、と源氏の君はあまきしうお思ひなさる」と申上げた。

○はつくさの若葉の云々歌——はつく草に紫上をたとへたもので、初草の若葉即ち紫上を見てからといふものは、旅寝をする吾が袖の露は乾きませぬ。露には涙をよそひ、うへに吾が身のうへの意をも持たせてゐる。○まくらゆふ今宵云々歌——前の若草の御歌をすきがましき意にはとらないで、この返歌をしたのである。まくらゆふとは、草枕を結びといふ意で旅寝のことをさす。さて歌の意は草枕を結び今宵だけの旅寝の露けさは、我々どもが常に山に住みながら若の衣に受ける露けさに比べると、吾どもの方の露けさは遙に甚だしいものであります。

すき心でゐられる源氏の君も矢張り羞恥の心があつたのである。「尼君、いと恥しき御けはひに、何事をか答へ聞えむとのたまへば」の句は這般の事實を面白く物語つてゐる。



○げに若やかなる人云々  
——いかに、まだ若  
い源氏の君として、あ  
さましく思ひなさるであ  
らう。

○うちつけに——突然  
に。

○あさはか——淺薄な  
旁。

○傍もおのづから——我  
が身のおさはかならぬ心  
ざしは、さりとも佛は照  
覽あるだらうの歎。

○おとなしくしう——尼  
君がありさまのつつまし  
やかに且つ恥かしげであ  
られるのに遠慮せられ  
て、源氏の君も思召す事  
を急に仰せ出でならぬな  
いふ。

○淺くはいかが——こな  
たには思ひよりもなき時  
にあたつて、かほどまで  
仰せられる御志は、なる  
ほど佛の御しるべと思ひ  
ますから、どうして淺く  
は思ひ申すべきぞ。  
○かの過ぎ給ひにける——

「げに若やかなる人こそうたてもあらめ、まめやかにのたまふ辱なし」と  
て、あざりよりたまへり。「うちつけにあさはかなりと御覽ぜられぬべきつ  
いでなれど、心にはさも覺え侍らねば、佛はおのづから」とて、おとなしく  
しう恥しげなるにつままれて、頓にもえうち出でたまはず。「げに思ひ給へ  
より難きついでに、かくまでのたまはせ聞えさするも、淺くはいかゞ」との  
たまふ。「あはれにうけたまはる御有様を、かの過ぎ給ひにけむ御かはりに  
思しないてむや。いふかひきほどの齡にて、むつましかるべき人にも立ち  
後れ侍りにければ、あやしうききたるやうにて年月をこそ重ね侍れ。同じ  
さまにもし給ふなるを、たぐひになさせ給へ」といと聞えまほしきを、か  
ゝるをりもありがたくてなむ、思されむところをも憚らずうちいて侍りぬ  
る」と聞え給へば、「いと嬉しう思ひ給へぬべき御ことながら、聞し召し  
ひがめたることなどや侍らむとつゝましうなむ。あやしき身ひとつをたの  
もし人にする人なむ侍れど、いとまだいふかひなき程にて、御覽じ免さるゝ  
方も侍り難ければ、えなむうけたまはり」とめられざりける」とのたまふ。

君尼は「なるほどまだ年も若い源氏の君としては、あさはかなことだと思召なされるだらう。

彼の亡くなりなかつた  
紫の上の母の代りと、私  
を思召して下さいません  
か。私は子の如く思つて  
育てませう。  
○同じさまにもし給ふ  
——紫の上も母におくれ  
給へり、われ源氏も更衣  
に早く別れたからして、  
同じたぐひにさせ給へ  
と申し上げたいのが。  
○かかるなりしもありが  
たくてなむ——斯様な復  
會もなく、今日ついでに、  
そなたが何とか思召され  
るのと遠慮せずして、斯  
く申しあげます。  
○聞し召しひがめたる——  
うれしいことであるが  
君の聞きそこね給へるこ  
ともあるだらうと恥しく  
思はれます。  
○あやしき身ひとつをた  
のもし人に——賤しいこ  
の尼をたよりとしてあら  
れる、紫の上ではあるが。

「斯く眞實こめて仰せ下されるのが恐縮なことである」と言ひながら、膝行してそば近くに寄り  
なされた。源氏は「突然だしぬけに斯く申すのは、淺薄な考であるとおもひなされる折からで  
あります。私(源氏)は決してそのやうな淺薄な考ではないのだから、この私の心の中の誠意  
は、佛こそ自然と知り給ふであります」と申され、尼君がつましくやかに且つ恥しうにし  
てゐるのに源氏の君も遠慮せられた。それで急に強くも言ひ出されぬ。尼君は「まことに思  
ひがけもない折から、君にはかくまで親切に仰せられるのを、どうして私どもは輕々しく思ひ  
ませうか、決して淺くはかには思ひませぬ」と言ふ。源氏は物淋しく氣毒な様でゐられる紫の上  
のことを思ふについても、どうぞ私を彼の亡くなりなかつた紫の上の母君の代りと思つて下さ  
らないでせうか。私(源氏)もまだ幼少であつた頃に、なつかしい母更衣に死に別れましたから、  
不思議にも心がそはくとし落着かない年月を送つてゐました。御幼少な紫の上もやはり、私  
と同じやうに母君に早くお別れになられたのであるから、私と同じ仲間になりなさいと申上げ  
たくおもつてゐたが、その機会もなく打過ぎました。けれども今日こそは何と思召されるか  
は知らないが、遠慮なく斯く申上げるのであります」と仰せられる。すると尼君は「かく源  
氏の君から仰せられては、まことに嬉しく思ひますが、然しこの紫の上については、源氏の君  
には世間の噂を聞き違へてゐられるのではないかと恥かしくございます。このいやしい尼の身  
一つをたよりとしてゐられる紫の上ではあります。まだ物事が少しも分らない幼少な年頃で、



君の御覽になるほどのこともむづかしいから、君の御仰せ言をも耳にとゞめずにおられます」と言ふ。

○あさはか——河海抄には「あさく、はかなき心敷」とあり、源注拾遺には「今按、只あさきにて、はかはそこはかなどのごとくそへたる詞なり。萬葉集第十二に紅のうすぞめ衣あさはかに、又、あらずめのあさらの衣あさはかにとよめる歌に、ともに淺の一字をあさはかと讀めり」と、源氏物語評釋には「此拾遺の説の如し、但萬葉の歌は略解にあさらかにとよめるよろし、はかもらかも形容辭ながら意はいさゝか異なりと見ゆ」とある。

「みなおぼつかかなからずうけたまはるものを、所狭うおぼし憚らで、思ひたまへよるさま異なる心のほどを御覽せよ」と聞え給へど、いと似げなきことをさも知らでたまふと思して、心解けたる御答もなし。僧都おはしぬれば、「よしかう聞えそめ侍りぬれば、いとたのもしうなむ」とて押しやて給ひつ。曉がたになりければ、法華三昧おこなふ堂の懺法のこゑ、山おろしにつきて聞えくる、いとたふとく、瀧の音に響きあひたり。

吹きまよふみ山おろしに夢さめてなみだもよほす瀧のおとかな  
さしぐみに袖ぬらしける山みづにすめるこゝろは騒ぎやはする

○所狭うおぼし憚らで——何かと窮屈に思ひ憚りなさないで。  
○思ひたまへよるさま異なる——幼き兒に思ひよるのは、世の常のさまに異なるのである。その思ひのつねならぬのをゆるして見給へ。  
○よしかう聞えそめ侍りぬれば——言はで思ひしよりも、かくうちいでて語つて置けば、遂に言ひ寄り侍るであらうとたのもしく思はれる。  
○押し立て給ひつ——上に、とにたてわたしたる

耳なれ侍りにけりや」と聞え給ふ。明け行く空はいといたう霞みて、山の鳥どもそこはかとなくさへづりあひたり。名も知らぬ木草の花ども、いろくりに散りまじり、錦をしけると見ゆるに、鹿のたゞみありくもめづらしく見給ふに、惱しさも紛れはてぬ。

源氏は「その事については、よく存じてゐますから、いろく」と窮屈に遠慮などはなさらないで下さい。私が紫の上を思ふことについては、世間普通の戀慕とはすつかり異つた心からであるのを御覽下さい」と仰せられたが、然し尼君の方では、この紫の上はまだ夫婦の交りなどが出来るやうな年頃でないのを、源氏の君はそれとも御存じでないから、かく仰せられるのであると思つてゐたからして、打解けた返答はなさらない。斯うして尼君と源氏の君との間に話が文はされてゐるところへ、例の僧都がやつて来た。そこで、源氏の君は「まあ、斯う話して置けば、紫の上のことは何とかなるに違ない。いとたよりになることだ」と思ひなされ、屏風をはたと閉ぢなされた。

さて源氏の君は外へ出て御覽なされると、もう夜明け方になつたからして、法華三昧を勤行してゐる御堂の法華讀誦の聲が、山から吹きおろしてくるあらしの聲にともなはれて聞える。それが又、瀧の音に響きあふのは甚だたふとい感を催さしめる。そこで源氏の君は、

吹きまよふみ山おろしに夢さめてなみだもよほす瀧のおとかな

屏風の中をすこし引きあけてとある首尾であるからして、屏風をおしたて給へるのである。  
○朝がたになり——前に初夜といひつれど夜いたうふけてとあつた、その後尼君と物語し給へるほどに、時のうつりたる様をいふ。  
○法華三昧おこなふ堂云々——補欄参照。  
○ふきまよふみ山おろしに云々の歌——補欄参照。  
○さしぐみに袖云々の歌——補欄参照。  
○名も知らぬ木草——白氏草堂記云、雜木異草蓋ニ覆其上、綠陰蒙々、朱實離々、不識三其名、四時一色云々と。  
○錦をしける——元輔集に「花のかげにしきをしけるこよひかなたたまくとほしき庭とみえつ」とある。



と、一首お詠みなされた。すると僧都は返歌に、

さしぐみに袖ぬらしける山みづにすめるこゝろは騒ぎやはする

と詠み、私の耳が聞き馴れた爲めでありませうか、永らく住み馴れた私は何とも感じません」と申し上げる。だん／＼と明け渡る空の景色は、甚だしく霞み渡り、山禽はあたりにさへづりあつてゐる。又何の名であるかその名も分らない木草の花どもが、いろ／＼と散りまじり、錦を敷いたやうに見える、その中を鹿がたゞすみながら歩くのもめづらしいことだと御覽になる。源氏の君は斯うした景趣を眺めてゐられるので、わらはやみの御惱みも事にまぎれてしまつた。

■

○法華三昧おこなふ堂——摩訶止觀に常坐、常行、半行半坐、非行非坐の四種三昧あり、法華三昧は其中の半行半坐三昧の異名といふ。元來三昧といふ語は梵語で、定、止息、寂靜など譯し、心を一所に住して不動なる意である。法華儀法とは、天台宗に於て六根の罪を懺悔する爲めに、法華經を讀誦するをいふ。○吹きまよふ山おろし云々の歌——靜寂に吹きわたる山おろしの聲を聞くと、何となく心も澄み切り、浮世の煩惱の夢もさめてしまひ、瀧の音を聞くについても感涙が催される。○さしぐみに袖ぬらしける云々歌——源氏の君にはこの山間の瀧の音をお聞きになり、うちつけに感涙を催しなされたと承りますが、私どもの如くこゝに住み馴れたものには、何とも感じませんの意。さしぐみはうちつけの意としておいた。なほこの歌については、古來の注釋書にはいろ／＼と議論がある。稍繁に互る點もあるが参考のために掲げよう。先づさしぐみの語については、源注拾遺に、後選戀四「いにしへの野中の清水見るからに

さしくむ物はなみだなりけり」蜻蛉日記に、人の家のまへちかきいづみに八月十五夜月の影うつりたるを、女ども見るほどにおほちにふえふきてゆく人あり「雲よりこちくの聲をきくなべにさしくむばかり見ゆる月かげ」玉の小櫛に、拾遺に云々、此蜻蛉日記の歌によれば涙といはでもさしくむといへば涙のさしくむ也。然ればこゝの歌も初二句さしくむ涙に袖ぬらしけるにて、源氏君の歌の四の句のこと也、さて下旬は花鳥に、山にすめる身は心もさわがぬといへるなり云々。源注餘滴に、置淵云、後撰の歌は、目に涙さし含むことを水をくむにいひよせたり、蜻蛉日記にさしくむばかり見ゆる月影とあるも、手にくみて見るばかりの月のたゞちに見ゆるとおなじく、水によせていへり、こゝのもこれらをとりにて水に寄せたり、されども此語のもとはさし含みを略せりと見ゆ、さてさしてふ語もさしあたり、さしつけなどいふ時は、たゞちなる意なれば、物をたゞちに、にはかなる意にいふ也けり、今のも瀧波の音を聞くことさしつけに袖ぬらすとよめりと聞ゆ。此さしくみ云々の歌を同君の歌なりなど云るはわろし、僧都に疑ひなし、雅望考るに、袖ぬらしける山水とは、多武峯少將物語に「昔より山水にこそ袖ひづれ君がぬるらん露は物かは、さしくみとは打つけといへるにちかし、やどり木の巻に「宮もあながちにかうすべきにはあらねど、さしくみは猶いとほしきをと有るなど思ふべし。源氏物語評釋には、此詞さしつけに、うちつけになどの意といへる説はよろし、さて詞のもとはいかなる意ともしられがたし。さし含みの略とあるもいかゞあらん猶考ふべし。……と、なほ歌意については花鳥餘情に、源氏の涙もよほす瀧の音とよみ給へるにつきて、さしぐみに袖ぬらし



ける山水とは、僧都の返歌にのみ侍る也。すめる心はさわぎやはするは僧都の我身の事也。さて耳なれ侍るとはいつも耳なれたる瀧の音なれば、山住の身は心もさわがぬといへる心也。又案するに二首ながら源氏の君の御歌なるべし。すめる心はさわぎやはするとは、僧都の事をよみ給へり、下の詞に耳なれ侍りにけりやときこえ給ふとかけり。眠江入楚には、僧都の歌也。さしぐみは、さしより也。我身は耳なれ侍れば聞きもおどろかずと也云々中略、歌二首つゞきて間に詞もなき故に僧都の歌にはあらざるかといへり、只僧都の歌にて然るべし、かやうの所あまたあり。源氏物語新釋に、さしぐみには、さしつけにといふ意也。さて君は此瀧の音などを聞きてさしつけに袖ぬらし給ふと承れどなれてすむ身はさもおぼえぬは、みよなれたる故にや侍らんとこたへたり云々。源氏物語評釋には、さしぐみの説新釋のごとし、なほ別にも論ずべし、さてさしぐみといへるは、もとより水の縁語なる故に取出でたるなり。結句の詞つよきを思ふに、佛心の動かぬをそへたるにも有るべし、新釋右に引きたる下にいはれたる説はひがこと也。僧都の歌なることは勿論なり。

【評】 明け行く空はいといたう霞みて云々の叙景の文は、實によく幽寂閑靜な山中の景趣を添へてゐる。眠江入楚にも「所の景氣面白し、思ひやりて見るべし。前に雨すこしうちそよぎとありしが晴れて名残あるさまなるべし」といひ、評釋には「春山けしきいとめでたし、舊注にさまざまの詩など引きたれどすべて用なし。作者の心にかの詩などを思はれぬにもあらざめれど、それとたしかにあてたるならねばいたづらごと也」といつてゐるのは要を得た評である。

次に「紛れはてぬ」といふ語は「紛れはて給ひぬ」とあつたものであらう。評釋にも「これは源氏君の事なればまぎれはて給ひぬとあるべきを寫しおとせるにや」と言つてゐる。

ひじり、動きもえせねど、とかくして護身まゐらせ給ふ。かれたる聲のい  
 といたうすきひがめるも、あはれに功づきて陀羅尼よみたり。御迎の人々  
 まゐりて、怠り給へるよろこび聞え、内裏よりも御使あり。僧都、世に見  
 えぬさまの御くだもの、何くれと谷底まで掘り出で、いとなみ聞え給ふ。  
 「今年ばかりの誓深う侍りて、御送にもえまゐり侍るまじきこと、なかな  
 かに思ひ給へらるべきかな」など聞えて、御酒まゐり給ふ。「山水に心と  
 まり侍りぬれど、内裏よりおほつかながらせ給へるもかしこければなむ。  
 今この花のをりすぐさず参りこむ。

宮人に行きてかたらむ山ざくらかぜよりさきにきても見るべく  
 とのたまふ御もてなし聲づかひさへ、目もあやなるに、

優曇華の花まち得たるこゝちして深山ざくらにめこそうつらね  
 と聞えたまへば、ほゝゑみて、「時ありて一度ひらくなるは、難かなるもの

○動きもえせねど——此  
 卷の初めに、この聖を  
 した時、彼のひじりは老  
 いかまつて室の外に罷  
 かでられぬとあつた通  
 り、老犬で行歩に不自由  
 なのか、とやかくとたず  
 けてまゐつたのである。  
 ○護身——加持。  
 ○すきひがめる——ひが  
 めるは世のつねの若人の  
 聲とはかほりたるをい  
 ふ。前が多く落ちた爲め  
 に聲のすきてひがめるな  
 いふ。  
 ○功づきて——功力があ  
 ること。  
 ○陀羅尼——「梵語、能  
 持、又總持多含等の義、  
 集種種善法、能持令不  
 散不丢失」と、諷誦すべき  
 經文の名、其用は聲音に  
 ある。  
 ○怠り給へるよろこび——  
 一おこり病氣も全快した



喜び。  
 ○くだもの——おもに柑子の類をいふ。くだものは百濟物の意であるといふ。  
 ○今年ばかりの誓——前にも此二とせとあつたからして、三年住山の人と見える。孟津抄に千日龍なりと。

○なか／＼にも——今度斯く對面し奉るとはうれしき事でありながら、別れ奉つてはかへつて名残惜しく悲しい。  
 ○かしこければなむ——山中の景色御心とまりて御逗留もありたく思ひたまへど、帝の御氣づかひにいつてもかたじけないから、只今はいそいで歸る。

○今この花の云々——この今は俗語のオツツケといふに同じ。花の散らないう。又すぐに來う。

を」とのたまふ。聖、御盃たまはりて、奥山の松のとほそをまればにあげてまだ見ぬ花のかほを見るかなとうち泣きて見奉る。

聖は老衰して動きも出来ない身であつたが、どうやら護身の加持だけはした。加持をするときの聖僧の音聲は、普通の若人の聲とは變り、齒の落ちた隙間から漏れて乾枯びたものであつたが、いたく功德つきたる有様で陀羅經を讀んだ。恰度そのところへ、都から源氏の君をお迎へに來た人が出て來て、君の御病氣も、聖の加持によつて全快した喜びを申した。又禁中からも御使が來た。いよ／＼源氏の君も致處をお立ちになるといふので、僧都は世に珍らしいさま／＼の饗應を、谷の底にまで行きながら、あれやこれやと求め出してもてなした。さうして僧都が言ふには「私は三年間山籠する誓でありましたので、二ヶ年は既に終つたが、まだ残りの一ヶ年は山籠の誓も深く守つてゐるのであります爲め、只今源氏の君が都にお歸りなさるにつき御送り申すことも出來ず、對面を得た喜びはさるものながら、かく別れるとなると別れの名残が却つて悲しく思はれるのであります」など申上げて、御酒を君に捧げる。すると源氏の君は「この山の景色が、非常に私の心を引きつけましたので、この土地には愛着の念がありますが、私が致處にゐることにつき、禁中でも御心配になつてゐられるやうであるのも、甚だ恐れ多いこととであります。それで今は止むを得ず都に歸りますが、然しこの山の櫻花の満開の折を過ぎな

○宮人に行きての歌——補欄参照。

○目もあやなるに——見る目もまばゆいほど美しい。

○優曇華の花まぢ云々の歌——補欄参照。

○時ありて一度——玉の小櫛に「金光明經佛品に希有希、佛出於世、如優曇華時一現一耳」とあるのによつて書いたものである。容易にあひがたきをいふ。

○聖御盃たまはり——源氏の君が盃か加持のひじりにたまはる。

○奥山の松の云々の歌——補欄参照。

いで、再びもどつて來ませう。

宮人に行きてかたらふ山ざくらかぜよりさきにきても見るべく

と、斯く源氏の君が仰せられる舉動並にその話振りは、見てゐる者は目もまばゆい程に美しい姿であつたから、僧都是一首詠んで、

優曇華の花まぢ得たるこちして深山ざくらにめこそうつらね

と申上げると、源氏の君は微笑をもらされて、源氏の君「咲くべき時機が來て開くといふことは容易なことでないのに」と仰せられる。君の御病氣のために加持した聖僧は、源氏の君から御酒盃をいたゞいて、一首の歌

奥山の松のとほそをまればにあげてまだ見ぬ花のかほを見るかな

と詠み、いたく感慨に沈みながら、泣きつゝ君の御顔を拜した。

○宮人に行きてかたらふ云々の歌——私は今から都に歸り、宮中の大宮人だちに遭ひ、この山櫻の美しいさまを物語りませう。おつゝき風に吹かれてこの美しい花も散るだらうが、その花を散らす風よりも先きに、大宮人と共に來て花を見るためにさ。と源氏の君が仰せられたのである。○優曇華の花まぢ得たる云々の歌——僧都がいふには、源氏の君が斯うしてこの淋しい山奥にお出でくださったことは、恰度金輪王が世にあらはれるときの瑞相といはれてゐる優曇華の花を待つてゐて、その花が咲いたやうな心持がいたして嬉しうございます。この奥山の山櫻などは少しも目に美しいと感じませんの意。優曇華のことについては、河海抄に「案優曇



華金輪王出世瑞也。故號「靈瑞花」、人壽八萬歲、時節金輪王遊四州、其時海水半減するによりて此花出現する也、是を源氏を待ちえたるによそへたる也。詞に時ありて一たび開くるとあるも法華の久遠時一現の心也」とある。又源氏物語評釋には「華(ケ)をぐると書きたるは、重き聲によませんためにて、源氏をぐえんじ、法華經をほぐえ經といへる類也、み山ざくらは即ちこゝに咲きたる花をいへるのみなり」といつてゐる。○奥山の松のとほそ云々の歌——奥山にさし閉されてゐる松の扉をまれにあげて、まだ見たことのない美しい花を見ることであるよの意。まだ見ぬ花の語には優曇華の意を含ませて、源氏の君によそへたのである。岷江入楚に「私云、室の外にもまかでずとあれば、松の扉をまれにあげてと云ふ似合たり、かほを見る哉といふは、花のうつくしき心地。かほ鳥かほ花などうつくしき事也。云々かほにおほえ給といふもおなじ心敷、朝がほなどいふ朝うつくしき花といふ心敷」とある。

「御くだもの何くれと谷底まで掘り出で、云々」と、この句にて僧都が源氏の君のために、いたく奔走して御馳走をしてゐるさまがあらはれてゐる。

源氏の君は「山水に心とまり侍りぬれば云々、今この花のをりすぐさず参りこむ」と言つてゐられるが、これは櫻の花に心がとめられたのではなくして、他に別の花の蕾即ち紫上に心がひかれたのである。

聖、御まもりに獨站たてまつる。見給ひて、僧都、聖徳太子の百濟より得

○獨站たてまつる——獨站は菩提心の表相也とい

ふ。これは行人の常住しつ物であるが、又まもりなどの爲に人に奉ることもある。

○聖徳太子の百濟より得たまへる——一本ふだらくよりと有る。いはゆる天然の補陀落山より得給へるといへるのである。いづれにしても、ただ得がたき物のためしにいへるのみと見るべし。

○金剛子の珠數——金剛子の珠數を玉を以て飾つたのである。金剛子については、源注餘滴に「義楚六帖寶玉珍奇の部金銀のあひだに金剛子を載せたるを見れば、金の堅固なる物と知らる。此外に金剛樹といへる物あることをしるせり」と見える。○すきたる袋——透きたる袋。

○紺瑠璃の壺どもに——評釋に「紺色なる瑠璃の壺也」として河海に瑠璃佛の事かいはれたるは、小

たまへりける金剛子の珠數の、玉の装束したる、やがてその國より入れたる宮の唐めいたるを、すきたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに御薬ども入れて、藤櫻などにつけて、ところにつけたる御贈物ども、さげ奉り給ふ。君は聖よりはじめ、讀經しつる法師の布施、まうけの物ども、さまざまに取りに遣したりければ、そのわたりの山がつまで、さるべき物ども賜ひ、御誦經などして出でたまふうちに、僧都入り給ひて、かの聞え給ひしことまねび聞え給へど、「ともかうもたゞ今は聞えむかたなし。もし御志あらば、いま四五年を過してこそはともかうも」とのたまへば、さなむと同じさまにのみあるを、本意なしとおほす。御消息、僧都の許なるちひさき童して、

夕まぐれほのかに花のいろを見てけさはかすみの立ちぞわづらふ御かへし、

まことにや花のあたりは立ちうきとかすむる空のけしきをも見むと、よしある手のいとあてなるを、うちすて書いたまへり。



櫛に辨へられたることく用なきいたづらごと也。然れども紺瑠璃の壺に薬を入れたるは、かの薬師佛の手にもてるより思ひつきたるにはあるべし。事がらしか思はるる也」と。

○ところにつけたる御贈物——所がら事がらにつけての品々か贈物に奉り給ふのである。獨鈷念珠薬はわらはやみのため、五葉、藤、櫻ばなりからの山づとである。皆作者の意を用ひたる結構である。

○出でたまふうちに——出で給ふ間にの意。内にと心得たる注は間違である。この間に僧都は内に入り給ひて、尼君に紫上のことを語るのである。○さなむと同じさまに——新釋には「さあることなりと僧都も同じさまにいふなり」と。抄には「源氏尼君に對面の時も同心

源氏の君の御病氣平癒の加持をした聖は、君の御守にとて獨鈷を奉る。するとそれを見てゐた僧都は、聖徳太子が百濟から傳へた金剛子の珠數で玉の裝飾したるものを、それをすぐに百濟の國から傳來した箱で體裁が唐風なものに納め、これを透いてゐる袋に入れて、五葉の松の枝につけたものと、それから又、紺色の瑠璃の壺の中に御薬などを入れて、藤や櫻などの枝にとりつけたものとを源氏の君に對する贈物とした。此等の贈物はこの山間の場所柄としても、今の場合としても實にふさはしい贈物を奉つたものである。さて源氏の君は、加持をした聖僧を始めとし、讀經したところの法師への布施、それから用意の品々に至るまで、いろ／＼と都の方へ取り寄せに使を遣しなすつたのであるから、聖僧や僧都、法師は勿論のこと、そのあたりに住んでゐる賤しい民に至るまで、然るべき品物を賜つた。斯うして、源氏の君は御誦經などをしてそこを出で立たられる。この間に僧都は内へ入つて、嘗て源氏の君からお話しのあつた紫上のことについて、そのまゝ尼君に取次いで申されたが、尼君は「それはとにもかくにも只今は御返事申し上げることはむづかしい。若し源氏の君がこの紫上について御心があるならば、茲處四五年を経過してから、何とか致しませう」といふやうにの給ふのであつた。それで僧都も成程御尤なことであると、尼君と同じやうに考へてゐたので、源氏の君はつまらないことだと思召される。源氏の君は僧都の家に居る小さい童をして、尼君の許に言づれをなされる。そのとき源氏の君の歌に、

夕まぐれほのかに花のいろを見てけさはかすみの立ちぞわづらふ

とあつた。すると尼君からの返歌に、

まことにや花のあたりは立ちうきとかすむる空のけしきをも見むと、なか／＼由緒のある字で上品なのを、すら／＼とつくろふところもなく書き流した。

○獨鈷たてまつる——玉の小櫛に「奉るとよみ切て見るべし、見給ひてはたゞ僧都のそれを見たるよしのみ也。弄花の説あたらず、無用の注也」とある。源注餘滴に獨鈷、行法肝要抄云「五鈷三鈷金佛蓮三部杵也、五鈷五部之金剛、故爲金剛部、三鈷三部一體、故爲佛部、獨鈷摧破杵也、西方爲通調伏、妙觀察智、説法斷疑、是摧破也、西方蓮華即理也、理獨一法界、故爲一鈷」と。○聖徳太子の百濟より得たまへりける金剛子の珠數——原中最秘抄に「欽明天皇御時、太子六歳十月に百濟國より經律并種々の重寶等を吾朝へ渡さるゝ中に、件の御念珠有之歟、大和國法隆寺へ、文永の頃能海法印良觀上人同道して參詣の次、彼等重寶等拜見之時、御念珠兩三蓮在之、其中に金剛子數珠相交者也。」と見える。○すきたる袋——源注拾遺に「透きたる袋歟、また網に緒(スヤ)たる袋歟云々」と、玉の小櫛には「透きたる袋歟と拾遺にいへるがごとし」と言つてゐる。なほ源注餘滴には「河海に引き給へる萬葉の歌はかなはず、今按するにあやどりたる袋なるべし。うつほ物語にすき箱といへるみゆ、これは木をえりてす

なかりしが、今又僧都よりの返事も同じ事なれば本意にあらず思ひ給ふ也」とある。○夕まぐれほのかに云々の歌——補欄参照。○まことにや花のあたりはの歌——補欄参照。

かしたる物と見ゆ、繪あはせの巻に「すきたるぢんのはこ」と有るも同じかるべし。河海にひける歌、萬葉集卷の十八に「はり袋これはたはりぬすり袋いまはえてしかおきなさびせん」と有り、河は文字いさゝか誤りたり」とある。○五葉の枝——源氏官職故實秘抄に「五葉枝藤さ



くらは、是をも心葉こころはといふ。凡草木の枝に物を付くる事は、其色にしたがふよし也、梅がえの巻に、委しく見えたり。くしのはこ、かうごの宮の心葉の事は繪合の巻にしるすべし」と。

○紺瑠璃の壺どもに——河海抄に「貴布禰は鞍馬寺の鎮守也、鞍馬貴布禰の中間に僧正谷と云所あり、薬師佛不動尊靈験の地也、薬師佛の右の御手に紺瑠璃壺を持たしめ給ふ。僧都の送物に此壺に薬を入れて奉るも醫王の薬におもひよそへたる也」と、源注餘滴に「名義集曰、瑠璃此云青色寶、言金翅鳥之卵殻、鬼神得之、出賣與人、名紺瑠璃」と書いてゐる。

○夕まぐれほのかに花の云々の歌——源氏の君が此所をたちうく思ひ給ふ事を霞のたつにいひかけ、紫上を花にたとへて詠んだのである。さて歌の意は、夕暮方にぼんやりと花の色紫上を見たと爲めに、今朝は霞は源氏の君どうもあとに心が残つて立ち去るに忍びかねる。

○まことにや花のあたりは云々の歌——花紫上のあるあたりは立ち去りにくいものだと思はれたが、それは眞實なことではありませんか、霞源氏がの立ち去りにくいと思はれた空の景色源氏の紫上を思ひなざる様子を、ちつとながめて、まことであるかどうかを判断いたしませうといふ尼君の歌である。評釋に「初句は立ちうきへ保る意也、かすむるとあるに、いひかすめ給ふことをよせたること花鳥の御説のごとし。拾遺に下句をけさの御たちのけしきに見奉らんと也といへるはわろし」とある。

評「うちすて書いたまへり」とは、尼君がよき手にて、艶書めかず書きたるさまをあらはしたものである。





○大殿より云々——大殿は奏上の父である。この父から源氏の君は何方ともなくおでかけになつたよとて御迎に人々を参らせたまへるのである。

○頭中將、左中辨——共に大殿の君たちである。

○あさましうおくらさせ給へること——今こゝへ来た君達どもが、源氏の君の御供に召し連れなさらなかつたことを、たのみがひなくうらむのである。

○あかねわざかな——あきたらぬことである。そのままだち歸るのを、のこり多く思ひ給ふのである。

○盃まゐる——御迎の人々に御酒すすめ給ふのである。

○懐なりける笛——折ふし毎の興のために、笛を懐中してゐたのである。

○豊浦の寺の西なるや——催馬樂、葛城の句である。

御車に奉るほど、大殿より何方ともなくておはしましにけることゝて、御迎の人々、君達などあまた参りたまへり。頭中將、左中辨、さらぬ君達もしたひ聞えて、「かうやうの御供は仕う奉り侍らむと思ひ給ふるを、あさましうおくらさせ給へること」と恨み聞えて、「いとみじき花の蔭に、暫しもやすらはず立ちかへり侍らむは、あかねわざかな」とのたまふ。岩がくれの苔の上に並みゐて盃まゐる。落ち来る水のさまなど、ゆゑある瀧の下なり。頭中將、懐なりける笛とり出て、吹きすましたり。辨の君、扇はかなう、ちならして、豊浦の寺の西なるやとうたふ。人よりは異なる君達なるを、源氏の君いといたう、ち惱みて岩によりゐたまへるは、類なくゆしき御有様にぞ、何事にも目うつるまじかりける。例の篋吹く隨身、笙の笛持たせたるすきものなどあり。

尼君が御返歌を、源氏の君の御車にさしける頃、奏上の父左大臣から、源氏の君が何處ともなくおでかけなされたといつて、御迎に來た人々、殿上人などが多く來られた。その中には頭中將や左中辨、その他の上達部の方も追ひ慕つて來られた。さて是等の君達は、源氏の君に對

る。その文句などについては補欄に詳し。なほこの歌は光仁天皇の御時の童謡であつたのみ、催馬樂に入れたものである。豊浦寺は大和にあつた。この寺のことについては諸説がある。

○人よりは異なる君達なるを——御迎に参りたる人々は、いづれも皆類なき殿上人であるけれども源氏の君の前ではけおされて目立たぬのである。

○例の篋吹く隨身——いつも御供にひちりきを持つて参る人であらう。源氏官職故實抄によると、ひちりきは他の樂器よりも劣つてあるといふのか、主上、上皇の御儀能には用ひられない。

○笙の笛——これも源氏官職故實抄には「さうのふえは笙也。此樂器は天子の御儀能にも用ひ給ふ例あり云々」といつてゐる。

し「このやうなおでかけの御伴はいたしたいと思つてゐましたのに、私共を打ち棄てゝお連れ下さらなかつたことは、たのみ甲斐のないことでありませうかな」と恨み言を申上げて、さて又曰ふには「このやうにおびたゞしく満開してゐる櫻花の許に、暫くも遊ばずに歸つてしまふといふのは、面白くないことであるかな」と言はれる。そこで仕方なく岩石の下の苔の上に、君達がすらりと並んで花見の宴が開かれる。源氏の君は君達に酒杯をすゝめなされる。山の上から落ちてくる瀧の水の様子などは、何となく由緒のある瀧の下である。あたりの景色があまりによいので、頭中將は懷中に所持してゐた笛をとり出して吹きならしなされる。すると左中辨の君は扇を何といふこともなく打ち鳴して、催馬樂の葛城の歌である豊浦の寺の西なるやの句を歌ひだす。是等の君達は一般の人達とは異つた立派な方々であるが、それでも源氏の君が病後とて非常に惱まし相にしながら岩によりかゝつてゐられるのは、たぐふべき者のないほど立派な御様子でゐられる。故にこゝにゐる山の人々は他の事には一切目移りがせないで、たゞ源氏の君の姿に見入るのであつた。例の如く篋吹く隨身もゐるし、笙の笛を持たせた風流人などもある。

○豊浦の寺の西なるや——河海抄に「可津良支乃天良乃末江名留也、止與良乃天良能爾之奈留也、江乃波井爾之良太萬之川久也、末之良太末志津久也、於之止止於之止々云々、催馬樂、葛城。」とある。源注餘滴には「大和高市郡にあり、三代實錄卷之四十三、「宗岳朝臣木村等言、建興寺者、是先祖大臣宗我稻目宿彌之所建也云々、彼等、推古天皇之舊宮也、元號豊浦、故



爲「寺名云々」と。なほ詳細なことは源氏物語評釋に「北畠守部が催馬樂譜の入綾に云、豊浦寺の事行囊抄を考るに云、元興寺ハ飛鳥村ノ西南久米寺へ行方ニ在、豊等村ノ内也、昔ハ四方ニ四門ヲ建テ四ツノ額ヲ掛ケタリ、扁曰東門ニハ飛鳥寺西門ニハ葛城寺一本ニハ法興寺ト誤レリ南門ニハ元興寺北門ニハ法滿寺ト云フ、境内方廿二町餘最坊舎數十字有リシト也、今ハ僅カニ二間三間ノ瓦葺ノ御堂ニ御丈一丈ノ釋迦佛ノ銅像一體昔ノ餘波ニ殘レリ云々、豊浦寺云是也」と見え、又大和巡路記に此等の記録として引きて右の趣に云り、然れば此寺東門は飛鳥に向ひたる故に飛鳥寺といひ、西門は葛城に向ひたる故に葛城寺といひしなるべし。推古御時葛城邊に「いまだ寺あざりければ、彼四ツ五ツの寺號の中にも豊浦はもとの大宮の號、飛鳥葛城は地名なりける故にかの四天王寺を難波寺といひしやうに専ら此二つを以て呼びしならんかし、然るときは別に葛城寺といふが有りしにはあらず、今此四句は彼覆葉井の在方角を此寺の前通りにして少し西の方にあるよしを、詞をかへて云へるにて、二ヶ寺のあはひと云ふにはあらず云々、則葛城寺の前なるや其同じ豊浦の寺の西なるやといふ意也、又其えのはるも葛城寺のえのはるといひならへるまゝに無名抄のごとくにはかけるなればかれもひが事にはあらず」といつてゐる。

評「御迎の人々云々」と書き出したのは評釋にも「此段は餘波に書きなしてなほ上段のあへなく失せなん事を惜みたる法也、心をつくべし」といつてゐるが如く、前段からの名残である。又「例の筆策吹く隨身」の句は、抄に「ひちりき吹く隨身のこと、爰に初めて書きたり、まへくもかやうにこそありつらめ也、此物語の筆法也」の如く、作者は後になつて言ひ出し、以前も

斯くあつたといふやうに描く習癖がある。

○むつかしき日の本の—  
—上の僧都の歌に光源氏をば、優曇華にたとへて輪王の出世によせたので今かくいふのである。宜長は玉の小櫛に「かく皇國をいやくいひなすは法師のならひにてつれの事ながらいともしきさまがことなり」といつてゐる。  
○めでたき人かな—  
—上が源氏の君を、美しき人であるかなと見とれるのである。  
○宮の御ありさま—  
—紫上の父、兵部卿の宮をいふ。  
○さらばかの人の御子に—  
—然らば源氏の君の御子になりなさいと、乳母などが紫上に言ふのである。  
○いとようありなむ—  
—なるほどそれもよからう。

僧都、琴をみづからもて参りて、「これたゞ御手ひとつ遊ばして、同じくは山の鳥も驚かしはべらむ」と初に聞え給へば、「みだり心地いとたへがたきものを」と聞え給へど、げに、くからずかきならして、みな立ち給ひぬ。あかずくちをしと、いふかひなき法師童部も涙をおとしあへり。ましてうちには、年老いたる尼君達など、まだ更にかゝる人の御有様を見ざりつれば、この世のものとも覺え給はずと聞えあへり。僧都も、「あはれ、何の契にて、かゝる御様ながら、いとむつかしき日の本の末の世に生れ給ひつらむと見るに、いとなむ悲しき」とて、目押し拭ひたまふ。この若君幼心地に、めでたき人かなと見たまひて、「宮の御ありさまよりも勝り給へるかな」などのたまふ。「さらばかの人の御子になりておはしませよ」と聞ゆれば、うちうなづきて、いとようありなむとおもほしたり。雛遊にも、繪書い給ふにも、源氏の君とつくり出で、清らかなる衣著せかしづき給ふ。

僧都は自ら琴を持つて来て言ふには「どうぞ、源氏の君にはこの琴を一曲奏でたまひて、君



○離遊にも——嫌といふのは、もと手あそびのお人形で、多くは紙で作られた。我國では崇神天皇の頃からあるものといふ。  
○かしづき給ふ——抄には「いづきかしづくといひて、馳走する心也」とある。

若 紫

五三六

も出来るならば共々に山の鳥を驚かす妙音を弾じて下さるやうに」と強く願つたので、源氏の君も詮方なく、「病後とて心地が惱ましくて耐へられぬが」と仰せられながらも、まことに厭らしいと思はれる點もなく掻き鳴しなされた。さてそれからそこに居た人達は何れも皆、都へと歸途についた。嗚呼、さてもあくことなく口惜しいこと、だといふべき身分でもない法師や童兒に至るまで、源氏の君のお歸りの後は淋しさに感慨無量となり、涙を落して泣きあつた。それであるからして、ましてや内では老齡な尼君達などは、未だ嘗て斯様な高貴な方の姿を少しも見なかつたのであるからして、今見た高貴な方は實にこの世の人とは思はれないと言ひあつた。僧都も亦「あゝ、さてもどうした前世からの因縁で、斯様な高貴な方でありながら、源氏の君はかうしたけられた日本の末世鴻季の御世に御生れなされたのかなあとと思ふと、甚だ悲しいことである」と言つて、目を押し拭ふ。又彼の若君である紫上もまだ御幼少な御心ながらも、源氏の君は美しい方であると御覽なされて、「父兵部卿の宮の御姿よりはすぐれてゐらせられる」など仰せられる。すると乳母の女房どもが「それならば、彼の源氏の君の御子様におなりなさいよ」と申上げると、紫上はなるほど「打點頭」して、それは大變よろしいだらうと思つてゐられる。これからは、紫上が離遊をなさるにも、又繪畫をお書きなさるにも、源氏の君をお作りなされて、綺麗な著作を著せ、大切にもてなされた。

補

○琴——こゝではキンとよむ。然しキノコトともよむ。琴については河海抄に「琴神農作云々元五絃、宮商角徵羽是也、加文王武王絃、合七絃也、琴操曰長三尺六寸六分、象三百六十

六日）、前廣後狹（象尊卑）、上圓下方（象天地）、五絃（象五行）、清御原天皇吉野宮にて日暮に琴を彈せしめ給うけり前岫のもとに奇雲聳けり神女降りて曲につきて袖をあぐる事五廻天皇の外餘人不见、うたひて曰く「處女子がをとめさびすもからたまをたもとにまきてをとめさびすも」これ五節の濫觴也、をとめの巻にあり、此器曲上古渡來本朝之條勿論也、允恭天武以下令彈給之由見日本紀、其後延喜の比までも間彈する人有之歟、中古以來樂曲斷絶云々、此器于今相殘當家者也、又白虎通云琴者禁也、禁追於邪氣以正人心也云々、此心によらば源氏わらはやみの時分といひ、聖の言葉にも御ものゝけなど加はれるさま也といへり、僧都琴をあらがちに勧め申すも若有心歟、本當家は四辻宮大納言家の御前の事也小路云々今出川也」と言つてゐる。

評

源氏物語評釋に於て萩原廣道が評して曰く

此段紫上の源氏君にはじめて思ひつき給ふことを説き出でて後の伏案としたり、さてひいな  
の事も繪の事も皆後々に引きいでて用あることにあやなしたり、心をつけて置くべき也。す  
べて僧都の送り出られたる所よりは餘波のほひにそへたる文なる中におのづから末の巻の  
伏線をのこされたり、よく考へて味ふべし。

と、眞に廣道の言ふが如しである。至るところ伏線あり、餘韻あり、興趣絶えざるものがある。

○いづしと思しめしたり  
——帝が源氏の衰弱して

君はまづ内裏に參り給ひて、日頃の御物語など聞え給ふ。いといたう衰へ

若 紫

五三七



ある身體を見て、是れは  
穴變な事だと思召された  
のである。  
○阿闍梨——梵語で軌範  
師又は正行と譯す。僧俗  
の學解行儀を糾正指導す  
るものといふ。

○いかかと思ひ懼りて—  
左大臣がいふには、私  
は君をお迎に行かうかと  
思ひましたが、君が御微  
行であられるのに、いか  
がであらうかと遠慮いた  
して、差しひかへました。  
○自らはひきいりて奉れ  
り——紙江入楚に「源を  
ば端にのせ奉りて大殿は  
奥のかたにのり給ふ也。  
車はおくのかたはさがり  
也」とある。

○もてかしづき聞え給へ  
る——源氏の君は葵の君  
には少しも心はないけれ  
ども、左大臣がひたすら  
源氏の歡心を求めてあら  
れるので、これに對して  
は源氏も何と言つても無  
毒に思召され、葵の上の

にけりとて、ゆゝしと思しめしたり。聖の尊かりけることなど問はせ給ふ。  
委しく奏し給へば、「阿闍梨などにもなるべきものにこそあなれ。行法の勞  
は積りて、おほやけにしろしめされざりけること」と尊がりのたまはせけ  
り。大殿参りあひ給ひて、「御迎にもと思ひ給へつれど、忍びたるおんあり  
きには、いかゞと思ひ懼りてなむ。のどやかに一二日うち休み給へ」とて、  
「やがて御送り仕う奉らむ」と申し給へば、さしもおほさねど、ひかされ  
てまかて給ふ。わが御車にのせ奉り給ひて、自らはひきいりて奉れり。もて  
かしづき聞え給へる御心ばへのあはれなるをぞ、さすがに心苦しくおもほ  
しける。殿にもおはしますらむと心づかひし給ひて、久しく見給はぬほど  
に、いとゞ玉の臺に磨きしつらひ、よろづを整へたまへり。女君、例のは  
ひ隠れて、頓にも出て給はぬを、左大臣せちに聞えたまひて、辛うじてわ  
たり給へり。

山を出でられた源氏の君は、先づ最初に宮中に参内せられて、日頃の御物語をせられる。帝  
は源氏の君の御姿を御覽せられ、さても汝の身體も病氣で甚だしく衰弱してしまつた。これで

許に行かれるのである。  
○殿にもおはしますらむ  
——左大臣の邸即ち葵上  
の家の方でも、源氏の君  
が来られるだらうと準備  
を整へてゐた。  
○女君例のはひ隠れて—  
葵上はいつものとほり  
に恥づかしがりて逃げ隠  
れるのである。これが源  
氏の君と心の一致せない  
ところ。  
○辛うじてわたり給へり  
——左大臣が葵上にいる  
くといさめられたの  
で、葵上はやう／＼のこ  
とで源氏の君のお居でな  
さる御殿に行かれた。

は大變であると御心配あそばされた。又聖のなか／＼尊かつたことなどをお尋ねなさる。源氏  
はこれについて詳細に申上げる。すると帝は「なるほど阿闍梨などにもなるべき管の人であつ  
たのだらう。その聖僧は加持祈禱などの行法の功德も積つてえらい僧であるのに、朝廷では少  
しも知らなかつたことであるよ」と、尊敬せられて仰せられた。そこへ葵上の父である左大臣  
が来られて、「私は源氏の君を御迎へに行かうかとも思ひましたが、君には御微行でゐらせられ  
たものだから、御迎へに行くのもどうかと遠慮せられて、それはまあ止めいたしました。そ  
れでは今から私の宅の方へ御出で下されて、一兩日はゆつくりと御休みなさい」といふ考で、  
「これから直ちに私の宅まで御送りいたしますせう」と申上げたので、源氏の君としては、左大臣  
の宅即ち葵上の許へは、さまで行きたいとも思召しにはならなかつたが、左大臣に誘はれて、  
宮中から退朝なされる。左大臣は自分の乗つて来た車に源氏の君を乗せ奉り、自分は車の奥の  
低い坐席のところ坐られた。左大臣は斯くの如くに源氏の君を歡待なされ、一途に君の御心  
を葵上のもとに引きつけようとしてゐられる御心の中を察しては、源氏の君は葵上が心につか  
ぬとはいふものゝ、左大臣に對してはまことに氣毒だと思召された。さて左大臣の邸宅では源  
氏の君が御出でなさるだらうと準備してゐた。久しい間御覽にならなかつた間に、左大臣の邸  
は一層玉の臺のやうに磨き立て裝飾も施し、萬事の用意が整頓されてゐた。さて葵上はいつも  
の通りに源氏の君に逢ふのを恥づかしく思ひ、逃げ隠れて急に出て来られないので、父の左大  
臣は無理矢理に源氏の君の前に出るやうにと、娘の葵上に仰せられたので、葵上もやつとのこ



とで君の御前に出て來られた。

○阿闍梨——細流抄に「七高山阿闍梨、近江國比叡山美濃國伊吹山或國愛宕山攝津國神峰山大和國葛城山毎年給穀五十斛春秋各四十九日於三件山一修藥師悔過一祈天下五穀一也承和三」とある。○君はまづ内裏に参り給ひて——萬水一露に「鞍馬より源氏すぐに禁中へ参り給ふは孝行又は世上の法度をおぼしめす御心也」とあるはよし。

左大臣はひたすら源氏の君の御機嫌を取らうとつとめながら、又他の一方に於ては、娘葵上が物恥ちをして、源氏に逢ふを避けようとするのについても、氣を配らねばならぬのである。左大臣の心の中は實に氣毒なものである。世に娘を持つ父で又このやうな心づかひをしてゐる人も乏しくないだらう。

○物の姫君——繪に書きたる物語ぶみなどの中にある姫君。  
○みじろき——身を動かすこと。  
○思ふこともうちかすめ云々——これから源氏の君の詞とする。なほこれから後のところには少し脱字があるやうである、従つて學者の説明も區々としてゐる。

たゞ繪に書きたる物の姫君のやうにしすゑられて、うちみじろき給ふこともかたく、麗しうてもものし給へば、「思ふこともうちかすめ、山路の物語をも聞えむに、いふかひありて、をかしうち答へ給はゞこそあはれならぬ。世には心も解けず、うとく恥しきものにおもほして、年の重るに添へて、御心のへだてもまさるをいと苦しく思はずに、時々世の常なる御氣色を見ばや。堪へ難うわづらひ侍りしをも、いかゞとだに問はせ給はぬこそ珍し

○世の常なる御氣色を——世間普通の女のやうに、親しく相語らひ給ふなつかしい態度を見たいものである。  
○問はぬはつらきものにやあらむ——六帖五に、「こともしつこきはなけれどかた時も、とはぬはつらき物にぞ有ける」とある歌によつたものである。

からぬことなれど、猶うらめしう」と聞え給ふ。辛うじて、「問はぬはつらきものにやあらむ」と、後目に見おこせ給へるまみ、いとほしかしげに氣高う美しげなる御容貌なり。「まれ／＼はあさましの御事や、問はぬなどいふきは、ことにこそ侍るなれ。心憂くものたまひなすかな。世と、もにはしたなき御もてなしを、もしおもほし直るをりもやと、ごまかうさまに試み聞ゆるを、いと／＼おもほし疎むなめりかし。よしや命だに」とて、夜のおましにいり給ひぬ。女君ふとも入りたまはず。聞え煩ひたまひてうち歎きてふしたまへるも、なま心づきなきにやあらむ、ねぶたげにもてなして、とかう世を思しみだるゝこと多かり。

○問はぬなどいふきはは——とはぬなどいふことは、なり／＼かよふ所などにてこそいふべきことである。本妻の身分である汝の如き葵上が言ふべきことでない。  
○世とともにはしたなき——當住はしたなきこと。

葵上は源氏の君の御前に出られたけれども、繪に書かれた物語ぶみ中の姫君のやうにして坐してゐられる。斯く葵上は身動きもなされず、端然と行儀よくしてゐられるので、源氏の君はものたらぬ感じになられて「そのやうに葵上が、かたくるしい態度でゐられては何も申されませぬ。私の思ふことをもそれとなく物語つたり、山路の物語でも申上げるには、私の申すことにも言ひ甲斐があつて、あなたも面白く御返事をして下されてこそ、何事も話されて興味のあるものでありませう。然るにあなたは少しも打解けたところがなく、うとましくも恥かしいやう



○くしや命だに——古今集離別 其人知らず ぞしらぬ今こころみよ命あらばわれやわする人やとはぬと」の歌によつたもの。  
 ○聞え煩ひたまひて——源氏の葵上に言ひ煩ひ給ふのである。  
 ○なま心つきなきにや——葵上の事を源氏の氣にあはぬ故にしひても給はぬのである。

に思召され、年を経るに従つて隔てがましい御心が、だん／＼と増加して行くのは、甚だ心苦しう思ひがけないことである。常でなくとも折節は世間普通の夫婦のやうな、睦じき態度も見たいものである。吾はわらはやみの爲めに随分苦しみ、耐へられない程であつたのを、病氣はいかゞでありましたかと一言お尋ね下さらない程、あなたは無趣味でゐられます。斯うしたあなた達の殺風景な態度は何も珍らしいことでなく、いつもありふれたことでありますが、それでもやはり、恨めしうございます」と申された。すると葵上はやうやくのことで「間はぬことは無情なやうに思はれるものでありませうか、若しさうであるならば、源氏の君が私をたづねて下さらないのも、それと同様に無情に思はれます」と、ながし目でちろりと御覽になつた目つきは、いかにも恥づかしさうで上品なところがあり、美しい御容貌である。その言葉をお聞きになつた源氏の君は「時たまに仰せられることは、斯くなさけないことであるかな。間は無いなどといふことは身分によることで、吾々の如き夫婦の間柄に言ふべき言葉でない。それは妾などの言ふ言葉である。心苦しくも仰せられることであるわい。常になさけない御もてなしを若しや考へ直されることもあるだらうかと、あれやこれやと試みてゐる間に、少しも直りなされる點はなくして、一層私を疎みなさるやうである。嗚呼まあよろしい。命さへ永くあつたならばその間に思ひ直りなされることもあるだらう」と仰せられて、夜の御寝所にお入りになつた。然し葵上はすぐにもお入りにならない。この上は源氏は何とも葵上に仰せられないで、たゞ打ち敷きつゝ臥しなかつた。けれど源氏の君の御心はまだどうしても落付かない。葵上があつたやうな態度をしてゐるのは、要するにまだ春ごろがつかないためであらうかと思ひめぐらし、ねぶたさうにしながら、あれやこれやと世間のことも思ひめぐらし心をとり亂されることが多かつた。

○思ふこともうちかすめ云々——このあたりには脱字があるものとされてゐる。玉の小櫛に「年のかさなるにそへてといふより源氏の君の詞也、さてまさるをををもじおだやかならず、おもはずにといへるも言たらず、はぶきていひのこすも詞にこそよれ、かくては語とものはずさればここは御心のへだてもなさるはいと心ぐるしく思はずにこそと有りけんをはををに誤りこそを落せるなるべし。さてとき／＼はといふより源氏の詞としたる注はひがごと也、さては上におもほしてといへるにかなはず、おもほしての下より詞なることしるし」と、玉の小櫛補遺に「思ふことも打ちかすめ云々よりすべて源の御詞なり、小櫛あやまりたり」と、評釋には、「小櫛の説のごとくならばあはれならめといふ下にともじあるべき也、されど「おもほしてといふこと、葵上のおもほす事を源氏のの給へるならでは聞えがたし、さへば補遺の説の如く、心ふことも打ちかすめといふより源氏君の詞とすべきにや、さては又「いふかひありて云々あはれならめといふ語勢あまりなるやうなれどすべては心つゞくべし、かくても「思はずに」といふことば猶おだやかならず脱文などあるにやなほ考ふべし。諸抄に何のさだまなきはいとあらし」と言つてゐる。

源氏の君より年長でゐられる葵上に對して、源氏は「なま心つきなきにやあらむ云々」と言



つてゐられるのは、實に皮肉な言ひ振りである。斯うした特殊な性格を持つた葵上があらはれるので、讀者をして要を催さしめない。

○かの若草の——紫上の生育なき程との。  
 ○似氣なき程と——尼君が紫上と源氏の君とは年齢の上から言つて似つかはしいところがない。  
 ○いひより難き——源氏の君が紫上に言ひ近づくことがむづかしい。  
 ○いかに構へて——何とか工夫して紫上を迎ひたいと源氏の思ひ給ふのである。  
 ○なぐさめにも——藤壺に對するなぐさめとして見よう。  
 ○兵部卿の宮——紫上の父君。  
 ○あてになまめい給へれど——上品でしなやかなこと。  
 ○いひやかに——花やかで愛らしい。  
 ○かの一族に覺え給ひつらむ——紫上はどうして

かの若草の生ひ出てむほどの猶ゆかしきを、似氣なき程と思へりしも道理ぞかし。いひより難きことにもあるかな。いかに構へて、唯心やすく迎へりて、日暮のなぐさめにも見む。兵部卿の宮は、いとあてになまめい給へれど、匂ひやかになどもあらぬを、いかてかの一族に覺え給ひつらむ、ひとつ后腹なればにやなどおもほす。ゆかりいと陸しきに、いかてかと深うおもほす。またの日御文奉り給へり。僧都にもほのめかし給ふべし。尼上には、もてはなれたりし御氣色のつゝまじさに、思ひたまふるさまもえあらはしはて侍らずなりにしをなむ。かばかり聞ゆるにても、おしなべたらぬ志の程を御覽じしらば、いかにうれしう」などあり。なかにちひさく引き結びて、

「おもかけは身をもはなれず山ざくら心のかぎりとめて來しかど  
 夜の間の風も後めたくなむ」とあり。御手などはさるものにて、唯はかな

う押し包みたまへる様も、さだすぎたる御めどもには、目もあやに好ましう見ゆ。

後の藤壺の君に似なまつたのであらう。  
 ○ひとつ后腹——兵部卿と藤壺とは同腹であつたから。即ち兄妹であるため。  
 ○ゆかりいと陸しきに——紫上は藤壺のめい(姪)であるからして、いよいよゆかりしくなつて。  
 ○いかでかと——どうかして迎へたらうとの意。  
 ○もてはなれたりし御氣色——こぼみ給ひし様子。  
 ○侍らずなりにしをなむ——この語の下に「のこりおほく思ひ侍る」の語を補ふて解くべし。  
 ○かばかり聞ゆるにても——此の如く申すのにも、私の一方ならぬ心の程を察して下さい。然らば嬉しいことであらう。  
 ○おもかけは身をも云々の歌——補欄参照。  
 ○夜の間の風も云々——後撰集、元良親王の歌に

源氏の君は彼の若草のやうな年若い紫上の成身なすることを思ひ出すと、やはりなつかしさが湧き出すのである。然し尼君は、紫上が源氏の君の配偶者としては似つかはしくないと思つたのも成程それももつともなことであるわい。どうも紫上に言ひ寄ることはむづかしことである。何とか工夫をめぐらして彼女を自己の許に迎ひ取り、打解けた朝晩の慰めにして見よう。紫上の父上である兵部卿の宮は、まことに上品になよやかな方であつたが、美しい人ではなかつたのに、その子でゐられる紫上はどうして斯く美しく彼の藤壺一族の美しき方々に似てゐられるのでせう。それは兵部卿の宮と藤壺とは姉と姪との關係であつた爲めであらうかなどと源氏の君は思召なされる。さて藤壺と紫上とは姉と姪との關係でゐられるから、一層何とかして紫上を迎へようと強く思ひなされる。翌日は源氏が御便りを送りなされる。僧都の許へもその様子をそれとなく知らせなされたやうである。又尼君のところへは「私が紫上を迎ひたいと切にお願ひいたしましたのに、貴女が拒絶の態度をなされたので、私も恥かしくなり胸の思ひもすつかり申し上げられなかつたのであります。今又このやうに申し上げるのも、並大抵の愛慕の情でゐるのではないといふ點をお認め下さつたならば、どのやうに嬉しいことではありません」などと書いた手紙を送りなされた。その手紙の中に小さく引き結んだ紙に、



おもかげは身をもはなれず山ざくら心のかぎりとめて来しかど

夜の中に嵐が吹かないかと不安であります」と書いてあつた。その御筆跡などは然るべき立派なもので、何となくたゞ包んである手紙の有様も艶麗であつたから、年老いた尼君の御眼などには眼もさめるやうに派手やかに好ましく見えた。

○おもかげは身をもはなれず云々の歌——我が心のありだけを山櫻の許に止めてきたのに、まだどの心が残つてゐるのか、山櫻の様子がこの身を離れず、始終思ひ出されるのであるの意。おもかげは紫上の面影である。○押し包みたまへる——花鳥餘情に「河海につゝみ文をたてぶみの事にいへるおぼつかなし、つゝみ文は字治巻にも見えたり。たて文にては有るまじきにや。嫁娶記に見え侍り、艶書をつゝみやうは假令紫或は紅の薄様二重に歌をかきておしたゝみて引きむすびて墨を引きて其を又薄様を一重にて薬もしは砂逢などの如くつゝみて同薄様をほそくきりてひねりて頸にゆふ也、これに墨を引く不引は兩説也。」と、又新釋には「花鳥の説まことなるべし。雅亮装束抄に女御参り掣取などの文は結びてつゝむとあり」と言つてゐる。○さだすぎたる——細流抄に「さだは央字云々齡の半過ぎたる也」といひ、源注拾遺には「さだは河海に央の字を出し給へり、なにゝ見えたる字にかおぼつかなし、萬葉十一に「人間守あし垣てしにわぎもこをあひ見しからにことぞ左太おほき」おきつ浪へなみのきよる左太の浦の此さだ過ぎてのちこひんかも」此後の歌は第十二にもいれり、初のうたにつきて按ずるに、さだとはころといふ心と見えたり、さてころとは此ころの心なり、此物語になかさだのすぢなどあるは

「朝まだきおきてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに」といふのによる。  
○押し包みたまへる——年老補欄参照。  
○さだすぎたる——年老いて、よき年頃をすぎたるなむ。

中頃也、年のさだ過ぎたるとはよきころほひを過ぎる心也。央の字はかなひても見えぬ字也」といひ、評釋には「大かた此説のごとし、さだは定の意にて、よきほどの定りたる時をいふ。人の噂するをいふもいひ定むる意なり、これにていづこもたがはず」といつてゐる。

當時の人々の耳目の焦點となつてゐられた源氏の君から、めでたき筆跡の消息文を貰つた尼君は、さぞ目もあやにして恍惚としたに違ひない。

あなかたはらいたや、いかが聞えむと思しわづらふ。「ゆくての御事は、なほざりにも思ひ給へなされしを、ふりはへさせ給へるに、聞えさせむかたなくなむ。まだ難波津をだに、はかくしう續け侍らざめれば、かひなくなむ。さても、

あらしふく尾上の櫻散らぬまを心とめけるほどのはかなさ

いとくうしろめたう」とあり。僧都の御かへりも同じ様なれば、くちをしめて、二三日ありて、惟光をぞ奉れ給ふ。「少納言の乳母といふ人あべし。尋ねて委しく語らへ」などのたまひしらす。さもかからぬくまなき御心か

○あなかたはらいたや——尼君の心中の思ひである。ああ、御氣毒なことである。  
○ゆくての御事は——ついでに御事、評釋に「過しころは道のついでに立ちより給ひての事なる故に、ゆくての御事といへるをかし、舊注はひがこと也」とある。  
○ふりはへさせ——わざと御尋ね下さるのば。  
○聞えさせ——御返事申し上げること。  
○まだ難波津をだに——當時初學の人が習字の稽古としてゐた難波津の歌



な、さばかりいはけなげなりしけはひを、まほならねども見し程を、思ひやるもをかし。わざとかう御文あるを、僧都もかしこまり聞え給ふ。少納言に消息してあひたり。委しうおもほしのたまふさま、おほかたの御有様など語る。言葉おほかる人にて、つきくしく言ひ續くれど、いと理なき御ほどを、いかにおもほすにかと、ゆゝしうなむ誰もくおほしける。

源氏からの御便りを受け取つた尼君は、嗚呼氣毒なことである。何と御返事を申し上げたならばよいだらうと思ひ迷ひなさる。が遂に御返事の手紙を認められた。その文には「以前御立ちよりの序に仰せ下されたことは、左程氣にも掛けないで打捨て置きましたのを、此度わざ／＼御便を立てられ、御訪ね下されては本當に恐縮いたしました。何と御禮申してよいか、申上げる言葉ありません。紫上のことはまだ至つて小供でございますから、難波津の歌でさへもしかつりとつゞけて書かれない状態でありきす。それでつまらぬことでもあてさせていただきます。さうといいたしても、

あらしふく尾上の櫻散らぬまを心とめけるほどのはかなさ  
 一層不安に思はれます」と書いてあつた。僧都からの御返事も大體尼君の手紙と同じやうであつたので、源氏の君は残念に思はれ、それから二三日後、惟光を使として遣された。このとき源氏は惟光に仰せられるには「彼の尼君の家には少納言の乳母といふ人があるだらう。其女を

さへもつゞけて書けな  
 ○あらしふく尾上云々の  
 歌——補欄参照。  
 ○いとどうしろめたう—  
 さやうなばかなき君の  
 御心では、紫上をまかせ  
 奉るのが不安である。  
 ○さもかからぬくまなき  
 —いづこのくま／＼ま  
 でも、源氏君のすき心の  
 かかるをいふ。くまは限  
 でかくれたところをい  
 ふ。  
 ○委しうおもほしのたま  
 ふ云々——委しくはおも  
 ほしへは續かないで、下  
 のかたるへかかる。  
 ○いとわりなき御ほどを  
 ——一向にをさなくして  
 いかかとも分別なきほ  
 ど。  
 ○誰もく——僧都尼君  
 少納言以下源氏のわりな  
 く仰せられるのを笑止に  
 思ふのである。この語の  
 上にある「ゆゝしは孟津  
 抄には「心もとなきなり」

と注してゐる。

尋ねさがして彼女に詳細を話しなさい」など仰せられる。惟光思ふやう、源氏の君は斯くまでこの道にかけては至らぬ限ないすき心でゐられるわい。紫上はあのやうにまだ幼なくゐられる様子を、自分はよくはつきりと見たのでないが、一見したところから推察して見ても源氏が此女に心を悩ましてゐられるのかと思ふと笑止である。さて源氏から斯くわざ／＼と御手紙を賜つたのを僧都は恐縮の至りと申し上げる。惟光は少納言に案内されて會見した。このとき惟光は源氏の君の紫上、切に望み給うてゐられる様子、並に大體の事情を物語る。元來この惟光といふ男は多辯な男であつたから、似つかはしいやうに語つたのであるが、紫上はまだ極く幼稚でゐられるのに、甚だ無理なことゝもを、どうして源氏は斯く仰せられるのであらうかと尼君や僧都少納言などはいま／＼しく思つた。

○難波津をだに——細流抄に「面影は身をもはなれずの返歌をば紫上のし給ふべきを、いまだ手習などをさへ取りたてし給はぬと也、河海に見えたり」河海抄に「此詞を常の人、歌をいまだよまずと心得たるもあるにや、さにはあらず、古今序に難波津淺香山の歌を手ならふ人のはじめにものしけるといへる事なり、いろはのやうに一字づゝかきて、いまだ此歌をだにもかきえずといふ也、さて返事にそのはなちがきなん見まほしきといへる也」とある。なほ古今集序に「難波津の歌はみかどのおほんはじめなり。あさか山の言の葉は采女の戯れより詠みて、このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける」と、さて難波津の歌といふのは、王仁が仁徳帝の即位し給へるを祝ひて「難波津にさくやこの花冬ごもり今を春べと



さくやこの花」といふのである。○あらしふく尾上の櫻云々の歌——源氏の君が紫上の幼きに心を掛けなさるのは、あらしの吹いてゐる尾上に咲いてゐる紫花が散らぬその間だけ心を留めなさるやうに果敢ないものである。

【註】「少納言の乳母といふ人あべし云々」と言つてゐるのは前段にあつた文と相應してゐるのである。評釋にも、

上のかいまみのところに、少納言のめのとゞぞ人いふめるはと有りて、さて扇をならし給へる時、出で來たる人には名をいはず、こゝにて少納言をたづねてかたらへとあるにて、かの夜の人も、少納言なるべしとやうに、にほはせたる筆のたくみいひ知らず味ひあり」といつてゐる。

御文にもいとねんごろに書い給ひて、「かの御放書なむ、なほ見給へまほしき」とて、例の中なるには、

あさか山あさくも人をおもはぬになど山の井のかけはなるらむ  
御かへし、

汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見すべき

惟光も同じことをきこゆ。「この煩ひ給ふことよろしくは、このごろすぐし

○かの御放書——つづけさまに書かれないうで一字離して書いたのをいふ。  
○例の中なるには——前にも中にちひさく引き結びてとある。紫上への文である。  
○あさか山云々の歌——補欄参照。  
○汲みそめて云々の歌——補欄参照。

○この煩ひ給ふこと云々——尼君のこの病氣もよろしくなつたならば、京の殿（按察使大納言で尼君の夫）の許に行かれて、そこから何とか御返事をいたします。これ少納言乳母の言である。  
○かかる折だにと——藤壺が宮中から退出なさるやうな機會でもなければ相違ふことがむづかしいからとて。  
○あくがれ——心のあこがれること。心の浮き立つないふ。  
○内にても——宮中でも。  
○里にても——里邸でも。  
○つく／＼と——物を思ふ形容の辭。  
○ながめ暮して——ながめは物思のあるとき、うか／＼としてものゝみつめられるをいふ。  
○王命婦——この語については評釋の中に廣道が

て、京の殿に渡り給ひてなむ聞えさすべき」とあるを、心もとなうおもほす。藤壺の宮惱みたまふ事ありてまかで給へり。うへのおぼつかながら歎き聞へたまふ御氣色も、いといとほしう見奉りながら、かかる折だにと心もあくがれ惑ひて、いづくにもく／＼參うで給はず、内にても里にても、晝はつく／＼とながめ暮して、暮るれば王命婦をせめありき給ふ。いかゞたばかりけむ、いとわりなくて見奉る程さへ現とは覺えぬぞわびしきや。

【註】源氏の君からの御手紙は、大へん懇ろに書いてあつた。文中には「紫上の一字々々はなれ／＼に書かれた文字でもよろしいから見たいものである」と書きなまつて、例の如く小さく引き結んだ紫上あてへの文には、

あさか山あさくも人をおもはぬになど山の井のかけはなるらむ  
とある。さて尼君がこれに對しての返歌には、

汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見すべき

となさつた。惟光が歸つて源氏に申上げた御返事にも、同様に尼君のかたくなことを傳へた。又少納言からの御返事には「尼君のこの御病氣が少し快復の方に向ひなまつたならば、暫く程經て京にゐられる尼君の夫君按察使大納言の許に歸つて、さてそれから何とか御返事を申上げ



「王(ミコ)の女などの宮づかへして命婦となりたるをかくいふべし。傳注に王氏の命婦と注せられたるはいかゞ、皇國に王氏といふ氏はあつたことなし。河海の例は引きこられたまへる也。さてこの王命婦はこの御中のなかだちせし人也、といふ事をことわらずしてふとあらはしたる筆づかひ例のいとめでたしと。」

○せめありき給ふ——源氏の君が王命婦に、是非とも吾を藤壺にあはせよと、その折か能世せられて王命婦のあとにつきまといひなざるなむ。  
○わびしや——なやまし

ます」と云ふことであつたので、源氏は不安に思召される。

さて話をもとへ歸るが、彼の藤壺の宮は御病氣になりなまつて、御里邸にお歸りなされた。そのため帝が心もとなく思召され、悲しんでゐられ給ふ御様子は、實に御氣毒なことであると、源氏の君も帝に御同情を申しながらも、このやうな好機會でなくては、藤壺に逢ふことはとても出来ないと、心もそは／＼と浮き立つて、何處へもお出かけにはならない。たゞ宮中にゐても、里邸に居られても、晝間はつく／＼と物思ひに沈んで一日を暮し、夕方になると王命婦はどうぞ吾を藤壺に逢せてくれよと、あとを追ひながらせめたてなされる。王命婦がどのやうに取り計らつたのか、源氏の君は無理矢理に藤壺にお逢ひなされたときでも、それと意識されな

訓

○あさか山あさくも云々の歌——淺香山淺くは決して人(紫上をさす)を思つてゐない。深く／＼あなたを思つてゐるのに、どうして山の井(紫上)がそんなにかけ離れなざるのであらうかの意。○波みそめてくやしと云々の歌——本歌に六帖二(くやくぞくみそめてける淺ければ袖のみぬるゝ山の井の水)とあるをふまへて作つた歌である。淺いから袖ばかりがぬれるのであると聞いてゐる山の井の淺いのを知りながら、どうして影(紫上)を見せませうか。○王命婦——評釋に「(河)王氏の命婦也又上古は王姓をも給ひける也、續日本紀曰藤津王等言、亡父存日作請姓之表、云臣男四人女四人雖蒙王姓以世言之不殊匹庶。(釋)王姓をも給ひけるとあるは訝しき注也、姓を賜はるはやがて臣下の列に入り給ふ證なれば王といふ姓を賜ふべきいはれなし、續紀に王姓とあるはさる姓ありしにはあらず只輕く添ていへるのみ也、そは此時始て姓を賜はらんとて表を上り給へるなれば此前に姓の無りし事は知られたり、さて此王命婦は王とある人の女などの命婦になれるをいふなるべし」とある。なほ源氏官職故實秘抄に「王命婦とは女王の命婦をいふ、女王は皇孫のいまだ姓を給はらざる人也、たとひ一世にても内親王の宣下なきは王名を得給ふ也、命婦の事はきりつぼの卷にしるしぬ。繼嗣令、皇兄弟皇子皆爲親王以外並爲諸王、自親王五世雖得王名不在皇親之限」と記してゐる。

「見奉る程さへ現とは覺えぬぞわびしきや云々」とつき萩原廣道は「この一二句いとめでたし現とはおぼえず夢のやうなるぞわびしきといひて、源氏君の心を評したる也、さてこの物のま

ぎれの事、これより上にはひたすらに思ひかけ給ふけしきをほのめかしおきて、こゝに初めて逢ひ給へる事をいへるが、既に實事ありし後のこととして、藤壺の悔い給へるさまにかきなされたる、いとも／＼上手の筆つきといふべし、これより末々皆此意を脉としたり、深くあぢはふべし」と言つてゐるのは適評である。

宮もあさましかりしを思し出づるだに、世と共の御物思なるを、さてだにやみなむと深うおぼしたるに、いと心うくて、いみじき御氣色なるものから、懐しうらうたげに、さりとてうちとけず、心深う恥しげなる御もてなしなどのなほ人に似させ給はぬを、などかなのめなることだにうち交り給はざ

○宮もあさましかりしを——藤壺の宮も、源氏に逢ひなまつたことのおきるるばかりであつたことを。  
○世と共に——結えざる。不歸の。  
○さてだに——この前不



慮にあつたのさへ物思ひであつたから、二度とあはなぬであらうと思つてゐたのに。

○いと心うくて——今また藤壺の源氏に逢ひたまふのである。

○いみじき御氣色——迷惑な様子。

○懐しうらうらたげに——けれども源氏の君を思ふと懐しく愛らしくなつてくる。

○などかなのめなることだに——源氏の御心に藤壺はなどか少しでも、なほざりなところが交らないで、新しくとりあつめ世にすぐれ給ひて人の心をばかりつくさせ給ふのであらうと、せめて小事に思ひ給ふのである。いよいよ思ひ増す様である。

○つらうさへぞ——よろづにつきすぐれ給へるを却つてつらく思ひなされるのである。

○くらぶの山——細流抄

に「只くらき心にて夜をしたふ心なるべし」とある。ただ暗い心であるから暗いといふくらぶの山にやどりをとりたいたの意。

○あやにくなる短夜にて——いぢわるくも短い夜であつたから。

○見てもまた逢ふ云々の歌——補欄参照。

○世がたり人やつたへむ——補欄参照。

○御直衣——直衣などをそことなく脱ぎ捨ててあつたのを、命婦が世話をした、源氏に着せ参らすのである。これ源氏に別れの悲しさにうつつともなきさまを知らせたのである。

○殿に——源氏の君の里邸二條院をいふ。

○なきれ——なきながら眠るをいふ。  
○御父なども例の御覽じ入れぬよし——藤壺が源氏からの文をり給はない

りけむと、つらうさへぞおぼさるる。何事をか聞えつくし給はむ、くらぶの山にやどりも取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましうなか／＼なり。

見てもまた逢ふ夜まれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがなとむせかへらせ給ふさまも、さすがにいみじければ、

世がたり人やつたへむたぐひなくうき身をさめぬゆめになしてもおもほし亂れたるさまも、いと道理にかたじけなし。命婦の君ぞ御直衣などはかき集めて來たる。殿におはして、なきねに臥しくらし給ひつ。御文なども例の御覽じ入れぬよしのみあれば、常のことながらもつらういみじうおぼし惚れて、内裏へも参らで、二三日籠りおはすれば、またいかなるにかと御心動かしたまふべかめるも、おそろしうのみおぼえ給ふ。宮も猶いと心うき身なりけりと思し敷くに、惱しさもまさり給ひて、疾く参りたまふべき御使しきれど、思しもたたず。

藤壺の宮もその當時(源氏の君とあつたことをさす)のことどもの興のないことを思ひ出した

さるのでさへも、常々の心配事であつた。それでこれでは最早藤壺に逢ふことは止めてしまはうと源氏の君は深く決心はなさつたが、やはり心さびしくて今また藤壺に逢ふこととなり、なへん迷惑な有様でゐられるけれども藤壺の懐かしく愛らしい様で、なほそれでも打解けず、愛情こまやかに恥しげな御待遇の、世の常なるとは似てゐないのを思ふと、どうすることも出来なくなり、嗚呼藤壺にはなぜなほざりなところが少しも交つてゐないのであらう、少しでもなほざりな點があれば、それで断然交りをあきらめるのであるが、それもないので心苦しいことであると思召される。源氏の君は何事かを物語りなさつたのだらう。暗い心であるからして、暗いといふくらぶの山にでも宿をとりたいやうに思つてゐられたが、いぢわるくも夏のこととて夜も短かく、さつさと明けたので、逢見たのは逢見ないのよりも却つてつまらなく思ひなされた。さて源氏は

見てもまた逢ふ夜まれなる夢の中にやがてまぎるゝわが身ともがなと、一首の歌を藤壺に宛てゝお詠みになり、すゝり泣きしながら悲んでゐられる有様は、さすがに大へんなものであつたから、藤壺も御返歌として、

世がたり人やつたへむたぐひなくうき身をさめぬゆめになしても、思ひ亂れなさつた御様子も、ごもつとも至極で、氣毒でもあつた。このとき源氏の君の脱ぎ棄てられたあつた直衣を、命婦の君がとりあつめて、君のもとに持つて來た。さて源氏の君は里邸の二條院にお歸りになつても泣寝入りに床におつきなされた。源氏のもとから藤壺のも



由を王命婦などが語り申すのである。  
 ○またいかなるにかと——源氏の病氣のやうであられるのを、宮中では又どうしたのであらうと帝などが御心配になるだらう。  
 ○惱しさもまさり給ひて——かされて源氏にあひ給へる事を心うきことにおぼしなげきなさるから御病氣も重るのである。

とにお送りになる御手紙は、例の如く藤壺が少しもご覽にならぬといふことであつたからしてふだんもさうではあつたが心苦しく惱みなされ、大へんぼんやりと思ひ沈みなされた。従つて禁中へも参内なされず、二三日は籠居してゐらつしやつた。すると禁中の帝は、源氏はどうしたのであらうか、又病氣に惱んでゐやしないのかと御心配してゐらつしやるやうであつたから、それをお聞きになつた源氏の君は恐縮な次第であると思つてゐられる。又藤壺の宮もやはり心苦しい身の境遇であるとなげいてゐられるから、御病氣もだん／＼と重くなり、帝からは、早く禁中に歸るやうにと催促の勅使があつたけれども、参内のことなどは少しも思ひ立たれない。  
 ○くらぶの山——源注餘滴に「秋のよの月の光しあかければくらぶの山もこえぬべら也」古今秋、在原元方「こよひだにくらぶの山に宿もがなあかつきしらぬ夢やさめぬと」拾遺員外下「やどりせぬくらぶの山をうらみつゝはかなの春の夢のまくらや」拾遺愚草下○眞淵云天武紀に倉部倉麻など有は近江也山城に在と後にいふは誤也、歌は古今集に二首あり、又暗にはふを清み鏡には濁るといふ説は古意にくらき説也、かゝる言寄は其本語のまゝにいひてよせたることろにはすむも、にぐるもかかはらぬ例なるを古意しらぬ人はかゝる説をいふなり、此くらぶはもとにぐることなり」とある。○見てもまた逢ふ夜云々の歌——君と吾と相見えても、また逢ふといふことは極く稀でありますから、夢の中に見えてゐるときにそのまゝこの身をかきまぎらかして死んでしまひたいの意。玉の小櫛に「又あふ夜のまれなると夢の合ふ世の稀なると二にかたにかけたる詞也」とあるが、かうした意味も勿論含ませてある。○世がたりに人やつたへ

む云々の歌——惱みのあるこの浮身を、若しや夢の中に打ちまぎらかして死んでしまつたならば、私どもの事は比へなき世間の噂となつて後世に語り傳へられるであらうの意。評釋に「初二句はうき身を夢になして、むなしくなるとも、ためしなき世がたりにいひ傳へんがかなしとの意也、三句は初句の上に置きて心得べし」といつてゐる。

この段の最初の文に「宮もあさましかりしを思し出づるだに世と共の御物思なる云々」の句があるが、このあさましかりし・し文字は實にこの場合力強い意義を表はしてゐる。即ちこのし文字一字によつて藤壺と源氏とは既に關係のあつたことをこゝに至つてあらはしてゐる。花鳥餘情にも「是よりさき源氏君の女御にまわりちかづき給へること此詞に見えたり」と言つてゐる。作者の上品な書き方といふべきか。

まことに御心地れいのやうにもおはしませぬは、いかなるにかと人知れず思すこともありければ、心うく、いかならむとのみおほしみだる。あつき程は、いとど起きも上り給はず。三月になり給へば、いとるきほどにて、人々見奉りとがむるに、あさましき御宿世のほど心うし。人は思ひよらぬことなれば、この月まで奏せさせ給はざりけることと驚き聞ゆ。我御心一つには、しるう思し分くこともありけり。御湯殿などにも親しう仕う奉りて、

○御心地れいのやうにもおはしませぬ——藤壺御懐妊の徴である。悪産(つはり)月水などの意。  
 ○三月になり給へば——御懐妊から三ヶ月ばかり経たから。  
 ○いとるきほどにて——御懐妊もいちじるしく目立つまいふ。  
 ○人は思ひよらぬ——他人は思ひつかない。勿論



源氏との關係か思ひつかないのである。他人はなぞ妊娠なされたことを帝に申されないのでかと思ふに思ふのである。

○我御心一つにはしるう。藤壺の君一人だけはこれは帝の子でなくして、源氏の君の子であるといふことをよく考へてゐられた。

○御湯殿——清涼殿御湯殿上より簀子を隔てて西にあり、東西二間南北一間、天皇御入浴の所で浴槽がある。

○御乳母子の辨——この女房は源氏の君密通のことを知らない。

○命婦——王命婦である。この女房だけは源氏の藤壺に密通のことを知つてゐた。

○内裏にはおんものけのまぎれにて云々——御ものけのまぎれで、懐妊のこと氣色もなく知り兼ねた故に、この三ヶ月

なにごとの御氣色をもしるく見奉り知れる御乳母子の辨、命婦などぞ怪しと思へど、互に言ひ合すべきにあらねば、なほ遁れ難かりける御宿世をぞ命婦はあさましと思ふ。内裏にはおんものけのまぎれにて、頓にけしきなりおはしましけるやうにぞ奏しけむかし。皆人もさのみ思ひけり。いとあはれにかぎりなり思されて、御使などのひまなきも、そら恐しう物を思すこと隙なし。

藤壺は御自身の身體が何となく普通とは違つた氣分がするので、是はどうしたのであらうかと自分獨りで思ひあたること(源氏との關係)もあつたので心配し、これはどうなるのかと思ひ亂れて煩悶をせられる。恰度頃は夏の時節であつたから床から起き上ることもなさらぬ。三ヶ月ばかり経過すると腹部も随分大きくなつて、御懐妊の様子が目立つ程度になつた。それ他人もそれを見て、さては御懐妊なされたのかと不審がるについても、なさない藤壺の前世からの宿縁のほどは氣毒である。他人はこれは帝の御子でなくして、源氏の御子であるといふやうなことは少しも思ひよらぬことであるからして、この月になるまで帝に御懐妊のことを申し上げなさらなかつたことをどういふのかとびつくりしてゐる。然し、藤壺自身の心ではこの腹の子は誰の子であるかといふことは、ちやんと知つてゐらつしやつた。御湯殿などで御側近

まで奏せなかつたことを申すのである。

○いとどあはれに——帝は一層藤壺を可愛いものと思召れるのである。

○さら恐し云々——藤壺が帝の斯く愛して下されるについても、源氏との關係につき相濟ぬことになつたと聞えなざるのである。

くまで接して召使はれ、どのやうなことでもよく知つてゐる御乳母子の辨と、王命婦などこそは、これは不思議だと考へてはゐるが、さておたがひにそれにつき語りあふことは出来ぬから、不思議と思ひつゝも沈黙してゐた。けれども王命婦だけは藤壺と源氏との間柄のことは知つてゐたのだから、脱すべからざる前世の宿縁をなさないものと思つてゐる。又帝に對しては藤壺が御病氣でゐられた忙しいまぎれに、急に御懐妊の御様子もなかつたといふやうに奏聞せられたやうである。又身邊の他人達も亦、そのやうに思つてゐた。斯うなると帝は一層可愛いものだと思召されて、勅使をひまなく派遣なされて、藤壺を鄭重に待遇なされるので、藤壺は心中の惱みを思ふにつき何となく帝に對して相濟まぬ氣がし、こわくなり心配なざることが限りなかつた。

○三月になり給へば——花鳥餘情に「三月をみな月とかける本もあり、藤壺女御たゞもなくなり給ひて三月ばかりに成り給ふ也。此三四月の比、御心ちわづらひて、御さとにまし／＼ける時、源氏君近づきより給ひしより、御懐妊有りて卯月の比よりは六月は三月ばかりになる也、さるほどにみな月とかける本も心はちがはぬ也。かくてあくる年の二月十餘日に冷泉院は生れ給ふ、十一月にあたるにや」と言つてゐる。○御湯殿——禁秘抄上、恒例毎日常次第に「早旦供御湯。主殿官人奉行之。五位也。釜殿運湯。須麻志女官二人。取傳。藏人為鳴弦候。戸外。内侍具申之由。御船一。桶二。内侍候御垢。典待或上。進御湯帷奉河藥。次典待取河藥器抛板。于時藏人鳴弦。主殿官人稱名。主殿助藏人候之。時或稱是毎日毎度事



也。廢務之時。凡禁中着湯卷。上臈一人。典侍一人也。是候御湯殿故也。近代上臈中准此役。多着之。不可爲例。」と出てゐる。

源氏の君のすき心は、藤壺から紫上へ、紫上から藤壺へと、轉々と熱してゐられる間に、藤壺は源氏の君の御種を宿してしまひなかつた。これからの後は、源氏並に藤壺の運命はどうなるであらうか、今や一波瀾の最高に達しようとしてゐる。

○中將の君——源氏の君である。  
○合はするものを召して問はせ給へば——あはする者とは夢占の博士である。夢判断をする者。  
○およびなう思しもかけぬ——源氏の天子の父となるべきことなどないふ。  
○その中に違目ありて——そのなかに行きあはぬところがあつて。左遷の事をいふ。  
○慎ませ給ふべきこと——左遷の事をさしてゐる。  
○みづからの夢にはあらず人の御事を語るなり——

中將の君もおどろくしうさま異なる夢を見たまひて、合するものを召して問はせ給へば、およびなう思しもかけぬすぢのことを合せけり。その中に違目ありて、慎ませ給ふべきことなむ侍るといふに、煩しく覺えて、「みづからの夢にはあらず、人の御事を語るなり。この夢合ふまで、また人にまねぶな」とのたまひて、心の中にはいかなる事ならむと思し渡るに、この宮の御事聞き給ひて、もしさるやうもやと思し合せ給ふに、いとどしくいみじき言の葉を盡し聞え給へど、命婦もおもふに、いとむくつけう煩しき増りて、更にたばかるべきかたなし。はかなきひとくだりの御かへりの、たまさかなりしも絶えはてにけり。七月になりてぞ参り給ひける。珍しうあ

はれにて、いとどしき御思の程かぎりなし。少しふくらかになり給ひて、うち惱み面やせ給へる、はたげに似るものなくめでたし。

したがひめありてといふを聞きなまつて、いまいましく思ひなまつた上に、天子の父となりなされるなど占つたので懼り給ひて、これは我夢を占つたのではない他人の夢を占つて語るのであるといひまぎらして、さてこの事については他人に語つてはならぬと口がためをなまつたのである。  
○まねぶ——語る。  
○この宮の御事聞き給ひて——藤壺の宮御懷妊の事を聞きなまつて、もしや彼の夢合する者の言つたやうになるのではないかと考へめぐされ、今一たび逢ひ見んとして強く王命婦にそのことを仰せられたが。  
○むくつけう——そらおそろしい。  
○参り給ひける——藤壺が参りなまつたのである。ときに懷妊四ヶ月にあたる。

中將の君(源氏の君)もおそろしく様ことなる夢を御覽になつたので、源氏の君はこれはどうなる前徴であらうかと心配をせられ、夢判断をするものを呼び寄せになつて夢を判断せしめなまつた。すると夢占をする者が、源氏の君の身分としては及びもつかぬ、又思ひもよらない方面のこと(源氏が帝の父におなりなさるなどのこと)を判断した。又その夢の中にはゆきあはぬところがあつて、君には慎まねばならぬことがあると言つたので、源氏の君はうるさく思召され「汝夢占者が言ふやうに吾が帝の父になるとか、慎まねばならぬ(須磨左遷の事)などはわが夢のことについて語るのではない。他人の夢について語るのである。然しこの夢判断が心ふときまでは、決して他人に語つてはならない」と口がためをなされた。さうして御自身は心中に一體このやうな判断をするのは、どのやうな事があるのであらうと思つてゐられる。その間にこの藤壺の宮が御懷妊なされた一件をお聞きなされ、若しかそのやうな事があるかも知れないと思ひあたる筋もあつたので、是非ともう一度藤壺に逢つて話をして見たいと、切にいろ／＼と言葉を盡して申上げなまつたが、王命婦も考へて見ると、おそろしい氣持もし、うるさいことが多く増して、もはや源氏を藤壺に逢はせるやうにとりはからふべき計畫もない。藤壺からほんの一行ばかりの御返事がたまさかに源氏の君の許に來てゐたのも、遂に絶え果て、



○珍しうあはれ——帝の心の中に珍らしく可愛いと思召されるのである。  
○いとゞしき御恩の程——帝が深く藤壺を思召されるのである。  
○少しふくらか——御懐妊のさまをいふ。

若 紫

五六二

しまつた。斯くして七月になつてから、藤壺はいよ／＼宮中に参内せられた。帝は永らく見なかつたのが、今日藤壺に逢ふことが出来たので珍しう可愛いものとされ、甚だしく御寵愛なさることは果てしがない。藤壺の腹は既に御懐妊四ヶ月でゐられるから、御腹も少しふくれなさつて一寸惱しげにしてゐられる御顔はやゝ瘦せなさつたが、この御容顔はまことにたぐひなく美しくゐられた。

○さま異なる夢云々——花鳥餘情に「例へば源氏の北方の御はらに御子いでき給ひて位につかせ給ふべきさまの御夢にあはする也」弄花抄に「法事末の巻に見えたり」と、萬水一露に「此御夢を相せさすれば、御子三人あるべし、一人は天子、一人は后、一人は大臣なるべきよしをうらなふ也」河海抄に「およびなうとは、光源氏天子の親と成り給ふべき兆敷、その中にたがひめありとは左遷の事敷」と見える。○その中に違目ありて——源氏物語新釋に「その夢をあはせてみれば上をおかしてその罪にあたるべきなどの心有りつらんといふなり、かの須磨のうつろひの事も臘月夜の事のみならで、此天のとがめもあるべし、むくいなどいふは此記者の意也」と。

「命婦もおもふに云々」の句については、萩原廣道が「案に命婦も思ふことあるにもじの結びたしかならぬこゝちす、若くは詞脱ちたるか、たばかるべきかたなしとあるしはくとや有りけん、さては下文へのつゞき少し聞きよかるべし」といつてゐるやうに、このあたりには誤脱があるやうに見える。

桐壺巻には高麗の相人が源氏の前途を豫言したが、この巻に至つて夢占者がまた源氏の生涯の禍福吉凶を卜してゐる。然も高麗の相人の豫言よりも更に詳しくなつてゐる。是れ末々の巻に至る伏線をなしたものである。讀者は前後と相對照して玩味すべきである。

○例の且暮こなたにのみ——帝は朝晩宮に藤壺のところにはかり居られるのである。  
○御遊びもやう／＼をか——秋の頃となり、管絃の遊びも折から面白い時節であつたから。  
○御琴笛——藤壺での遊びに源氏は或る時には琴を弾じ、又或る時には笛を吹きなされるのである。  
○いみじうつつみ給へど——源氏の君は以前藤壺と關係のあつたことは強ひて隠してゐられたが、耐へられないで、その様子があらはれる時であつた。  
○宮もさすがなること——藤壺もやはり源氏の君をあはれと思召され

例の且暮こなたにのみおはしまして、御遊もやう／＼をかしきころなれば、源氏の君も暇なく召しまつはしつ、御琴笛などさま／＼に仕う奉らせ給ふ。いみじうつつみ給へど、忍びがたき氣色の漏り出づるをり／＼、宮もさすがなることどもを多くおほしつゞけけり。かの山寺の人は、よろしうなりて出て給ひにけり。京の御住處尋ねて、時々御消息などあり。同じさまにのみあるも道理なるうちに、この月頃は、ありしにまさる物思に、異事なくて過ぎ行く。秋の末つかた、いともの心ほそくて、歎きたまふ。月のをかしき夜、忍びたるところに、辛うじて思ひ立ち給へるを、時雨めいてうちそゞぐ。おはするところは六條京極わたりにて、内裏よりなれば、少し程遠きこちするに、荒れたる家の木立いとものふりて、こぐらう見えたるあり。例の御供に離れぬ惟光なむ、故按察の大納言の家に侍り、ひ

若 紫

五六三



と日ものたよりに訪ひて侍りしかば、かの尼上いたうよわり給ひにたれば、何事も覺えずとなむ申して覺りし」と聞ゆれば、「あはれのことや、とぶらふべかりけるを。などかさなむとも物せざりし。入りて消息せよ」とのたまへば、人いれて案内せさす。

帝は朝も晩も常に藤壺のそばにゐられていろ／＼と慰められた。恰度その頃は涼風さはやかに肌を吹く初秋の面白い頃であつたから、帝は源氏の君を始終お呼び寄せになり、側近くに侍らせて、或る時は琴を弾ぜしめ、又或る時は笛を吹かしめるなど、いろ／＼と興を添へさせなかつた。源氏の君は以前藤壺と關係のあつたことは、この際何とかして素振りにもあらはずまいと我慢してゐられたが、耐へられなくて思ひ惱んでゐられる態度が外面にあらはれる折もあつた。そのやうなときには藤壺の宮もやはり思ひあきらめられなくて、あれこれと煩悶せられた。

さて彼の北山にゐた尼君は、其後病氣も漸次と回復したので、遂に京の六條の里にある故按察使大納言の家にお歸りなされた。そこで源氏の君は尼君の京の住處を尋ねて、時々おたよりをなかつた。それには紫上のご書かれてゐたが、先方の尼君のもとから來る返書には、いつも同じやうに紫上はまだ幼なくゐらつしやるから、君の御爲めにはまだ役立ちませんといふことが、いつも同様に書かれてあるばかりであつた。これは道理ごもつともなことである。けれ

ることも多くあつた。  
○かの山寺の人は——紫上の祖母君即ち尼君は病氣もよくなりなされて北山を出で京の六條の里に出で給ふのである。  
○京の御住處——六條の里にある故按察使大納言即ち紫上の外祖父の家である。  
○同じさまにのみあるも——紫上の許即ち尼君の處から源氏のもとに來る手紙は何れも、紫上はまだ幼稚であられるから、君の役には立たぬといふことが常に書かれてあつた。  
○ありしにまさる——以前よりも一層な物思ひで藤壺のことをおぼしてゐられるのである。  
○秋の末つ方——前に七月になりてあつたからここでは秋の末頃となつて。  
○歎き給ふ——藤壺のことみなげきなさるのである。

○思ひたるところ——この思ひたるところは誰の思ひたるも判然しない。ところとも判然しない。  
○内裏よりなれば——禁中におはしまして、それから六條のところへ行かれるのであるから、程遠いのである。  
○故按察の大納言——惟光が、源氏に申すのである。紫上の外祖父にあたる。  
○かの尼上いたうよわり——上にはよろしうなりてと書いたが、今又病氣となつたのである。  
○などかさなむとも物せざりし——昔は尼君の尋ねべきであつたのを、なげ早くそのやうに告げなかつたか。

どもこの數月來といふものは、源氏の君は以前よりも一層心配な藤壺の一件で悩ませられ、他に何といふこともなくて月日を経過された。秋の末の頃になつて、君は非常に淋しい思ひになり、藤壺のことを思つてなげかれた。月の面白く照り渡つてゐる晩、源氏の君はこつそりと忍んで行かれる處へ、やつとのことでお立ちよになつたところが、折から時雨のやうな雨が降り出した。そのおでかけになつたところは六條京極附近で、このときは禁中から直ちにお出でなされたのだから少し道は遠かつた。そこには荒れ果てた家があり、まわりの樹木も古びいて晝でも木間いやうに見えた。このとき例の如く惟光が御伴をしてゐた。その惟光が源氏の君に申しあげるには「この古めいた家は紫上の外祖父である故按察使大納言の家でございます。或日のこと私がものゝ序にこの家を訪問いたしましたところが、かの尼君は非常に衰弱いたしましたので、今では何事も意識してゐないといふことを少納言女房などが話して居りました」と告げたので、源氏は「それは氣毒なことである。それと知つてゐるのであれば、早くからおとづれてやるのであつたのを、汝惟光はどうして早く、我にそれと告げなかつたか。まあ入つて案内せよ」と仰せられたので、惟光は人をやつて案内させた。

○漏れ出づるをり／＼——評釋に「をり／＼の下に詞落ちたるべし、今はもじひとつ補ひてその心をつらぬけり、猶考ふべし」と言つてゐる。○ありしにまさる——これ藤壺のことをさしてゐる。謙徳公集に「わすれなん今はと思ふときにこそありしにまさる物思ひはすれ」と。  
○かの紫上いたうよわり——花鳥餘情に「上にはよろしうなりてと書きて、今又かくいふは、



老病にて再發せるにや」と、評釋にはこれに對して「上に四十あまりとあれば老病ともいひがたきか、とにかくに物思ひ病の如くかきなしたるなり」と言つてゐる。

藤壺を思ひ、紫上を追想してゐられる源氏の君は、實に問々の中にその日／＼を過してゐられるのである。折から蕭條とした秋である。思ひに沈む人の胸を一層淋からしめるのである。

○わざとかう——もののついでではなくしてかくわざ／＼。

○驚きて——尼君の家の人々が。

○かたはらいたき事かな——尼君が病氣のために源氏に對面ができないので、源氏に對してお氣毒なことである。

○南の廂——廂は母屋のまはりにある狭き座敷。

○むつかしげ——見苦し

い所だが。

○かしこまりなだにとて——源氏の君ののざ／＼お尋ね下された御禮だけでも申さうとして。

○ゆくりなう——思ひがけなく。

○例に違ひておぼさる——

源氏もこのやうな粗末なところには入つたことはないと思召される。

○常に思ひ給へ立ちながら——源氏は常にたづねたいと思つてゐたが、紫上が幼いからとて御承諾下さらなかつたもので恥しくなり、遂に御無沙汰勝ちとなり尼君の御病氣も知らずにゐました。

○みだりこちはいつともなく——みだり心地のなやましいことは、何時も常のことでありませぬが、ともかくも臨終の際となつて斯く畏れ多くもおたづね下されたのに、自ら對面して直接御答へ申さないとは失禮なことである。

○わりなき齡すぎ侍りて——紫上の幼ないのも成長して。

○かすまへさせ給へ——君の思入の中に數へ入れて下さい。

○道のほだし——後世の

「わざとかう立ち寄り給へること」と言はせられたれば、入りて、かく御訪問

になむおはしましたる」といふに、驚きて、「いとかたはらいたき事かな。

この日頃、むげにいとたのもしげなくならせ給ひにたれば、御對面なども

あるまじ」と言へども、返し奉らむはかしこしとてなむ、南の廂引きつくる

ひて入れ奉る。「いとむつかしげに侍れど、かしこまりをだにとて、ゆくりな

う物深きおましどころになむ」と聞ゆ。げにかゝるところは、例に違ひて

おぼさる。「常に思ひ給へ立ちながら、かひなきさまにのみもてなさせ給ふ

につゝまれ侍りてなむ、惱ませ給ふことをも、かくともうけたまはらざり

けるおぼつかなさ」など聞え給ふ。「みだりこちはいつともなくのみ侍り、

かぎりのさまになり侍りて、いとかたじけなく立ち寄せ給へるに、自ら

聞えさせぬこと、のたまはすることのすぢ、たまさかにも思し召しかはら

ぬやう侍らば、かくわりなき齡すぎ侍りて、必ずかすまへさせ給へ。いみ

じく心ほそげに見給へおくなむ、願ひ侍る道のほだしに思ひ給へられぬべ

き」など聞え給へり。

惟光は使をして「源氏の君はわざ／＼御立寄りになつたのであります」と言はせたので、こ

の言傳を聞いた尼君の家の人は中に入つて「源氏の君は尼君の御見舞のために、かくわざ／＼

御尋ねになりました」と言つたので、尼君の家の人々は、びつくりして、少納言などは「尼君

は只今御病氣でゐられるため、源氏に直接逢つて御禮の言葉を申し上げることも出来ないとは

源氏に對してお氣毒なことである。近日来といふものは尼君も非常に衰弱なされ、たよりない

御身におなりあそばされましたから、どうしても源氏の君に御對面なさることはむづかしいだ

らう」と言つてゐるが、それだからとつてわざ／＼おたづねなされた君を、このまゝおもどし

するのにも畏れ多いと言つて、南方の廂の間に、源氏の君をお迎へする準備をして、そこへ入れ

申した。さうして女房はこゝはむさくるしいところでございますけれども、わざ／＼御見舞

下された君に對して御禮の言葉でも申上げようと思ひまして、こゝへお迎へしたわけでありま

す。咄嗟にこしらへました粗末な部屋でまことにおそれ入ります」と申上げた。源氏の君もな

るほど今まで嘗て、このやうなむさくるしい場所へ入つたことはないと思召される。さて源氏



〇いと近ければ——程もない狭い家であるから、尼君が内から申す言葉を開き給ふのである。

〇この君だにかしこまり云々——この君は紫上をいふ。紫上みづからがお給い申し上げられるやうな節度であるならばうれしいことであらう。

〇何か浅う思ひ給へむこゆふ——どうして私(源氏)は紫上を浅はかに思ふやうなことがあらうかない。心から深く思つてゐるのである。それであるからして紫上に對しても、すきなくしき態度を見せるのである。

〇いかなる契にか——契は宿縁のこと。如何なる前世からの宿縁であつたのだらうか、紫上をちらりと見染めてからは、非常に可愛く思ふのも不思議な程で、これもこの世ばかりの因縁でなくして前世からの宿縁である。

は「私は常に尼君のところをお尋ねいたさうと思つてゐましたが、紫上は御幼少でゐられるからとて御承諾がなかつたものでありますから、私も恥づかしい氣がいたして遂に御無沙汰勝ちにしてゐました。そのために尼君が御病氣といふことも、少しも存せなかつたわけで、不安なことです」などと申される。すると又尼君は内から「この尼の病氣は何時ものことであります。只今はもう臨終といふ重病になりました。この際わざ／＼御見舞下されて、まことにあります。只ことでもあります。然るに尼が直接君に逢つてお禮を申し上げられないのは残念であります。嘗てから仰せられてゐらつしやる紫上のことについては、もし萬一にも御思召が變らないやうでありましたならば、紫上の幼ない時期も過ぎ、相當成身してから、君の思人の一人に數へ入れて下さい。非常に可愛相にして置くのは、願つてゐる後生に往生するときのさまたげになると思はれます」などと申上げた。

〇引きつくりひて——これ疊しとねなどを敷いて御座所を設けるのである。當時は今の座敷のやうに何時でも萬事の設備が整つてゐるのではない。客人のある時にのぞんて斯く作るのである。〇物深きおまじどころ——西三條實澄の説に「物ふかきとは餘りに俄かなる故御座所のはしちかなるをわざと狂言に斯のごとく申す也」といつてゐるが、玉の小櫛には「これは物げなきを寫し誤れるなり、本のまゝにては聞えぬこと也、注はしひごと也」と言つてゐる。

評 「たまさかにも思し召しかはらぬやう侍らば、かくわりなき齡すぎ侍りて云々」と言つてゐる尼君の言は、如何にも老人らしい言ひ振りである。

いと近ければ、心ぼそげなる御聲たえ／＼聞えて、「いと辱きわざにも侍るかな。この君だにかしこまりも聞え給ひつべき程ならましかば」とのたまふ。あはれに聞き給ひて、「何か浅う思ひ給へむことゆゑ、かうすきずきしきさまを見え奉らむ。いかなる契にか、見奉りそめしよりあはれに思ひ聞ゆるも、あやしきまでこの世のことには覺え侍らぬ」などのたまひて、「かひなきこゝちのみし侍るを、かのいはけなうものしたまふ御ひと聲、いかでか」とのたまへば、「いでや、萬おほし知らぬさまに大殿籠り入りて」など聞ゆる折しも、彼方より來る音して、「うへこそ、この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見給はぬ」とのたまふを、人々いとかたはら痛しと思ひて、「あなかま」と聞ゆ。「いさ、見しかばこゝちのあしき慰みきとのたまひしかばぞかし」と、かしこきこと聞えたりと思つてのたまふ。いとをかしと聞い給へど、人々の苦しと思ひたれば、聞かぬやうにて、まめやかなる御とぶらひを聞え置き給ひてかへり給ひぬ。げにいふかひなのけはひや。さりともしとよう教へてむとおもほす。



○かひなきこころ——源氏が尼君に對面し、うと思つて来たが、それもかなはない、つまりらぬことになつたからして、どうかして彼の幼い紫上にあつて一言でも聞きたいのである。

○萬おぼし知らぬさまに——紫上は尼君の御病氣なども少し御存じない様子で。

○聞ゆる折しも——わづらしい爲めに、女房が紫上は寢入つてしまつたなどと偽つて申上げたのである。

○うへこそ——紫上は尼上よと呼び掛けたのである。

○この寺にありし——彼の北山の寺にありし。このはかのの意。

○々いとかたはら痛し——源氏はお困きになるだらうと内の女房共の苦しがるのである。

○あながま——嗚呼やかましい。

源氏の君のゐられるところ、尼君の寢てゐる部屋とは極く近いのであつたからして、尼君の心細い聲で言つてゐるのが絶え／＼聞えてくる、そのいふ言葉は「源氏の君が斯くわざ／＼お尋ね下さるとは甚だかたじけなひことでもあります。この紫上が御禮申されるやうな年齢であつたならばよいのに、まだそのやうなことも出来ない子供でありますから困つたものであります」といふのである。これをお聞きになつた源氏の君は可愛相に思召され、「我はどうして紫上を淺く思ふやうなことがあらうか、そのやうなことはすこしもない。若し淺はかに思つてゐるならば、斯うしたすき／＼しい態度を見せられませうか、それはとても出来ないことであらう。我が紫上をちらりと一見してから急に可愛相に思ひ奉るのも、不思議なことでもあります。これはこの世だけのことゝは思はれない。どうしても前世からの宿縁であるのだらう」など仰せられて、源氏は更に「尼君に逢はうとしてわざ／＼来たのに逢ふことが出来ないとは、まことにつまらない心地がするの、どうかしてせめてかの幼くゐられる紫上の一言葉でも聞きたいものであると仰せられた。すると女房どもは「いやはや、紫上は尼君の御病氣などいふことも御存じない様子で、もう既に御寢になりました。君に對してはお氣毒であります」などと申上げてゐる恰度そのときに、紫上が彼方からやつてくる音がして、紫上は「尼君よ、あの北山の寺にお出でなされた源氏がいらつしやた。なぜ早く源氏の君をごらんなさらないのか、早くごらんなさい」と言ふ。女房共はこれほとんどない所へ紫上が来たものである、笑止なことになつたと思ひ、紫上に「嗚呼やかましい、靜にいなさい」と言つた。すると紫上は「いやさ。女房どもは、嘗て源氏の君にお目にかゝつたときは、氣分の悪いのも全快したと仰つたであるぞや」と、利巧にもよいことを申上げたと思つて言つた。これをお聞きなされた源氏の君は、實に面白い事を知りたと思ひなされたが、側の者共がきまり悪く恥づかしがつてゐるのを氣毒に思ひなされ、聞かないやうな態度をして、何につき鄭重な御見舞を申上げてお歸りなされた。さて源氏は歸つてから思召されるには、彼の紫上は尼君の言ふ通り、なるほどまだ道理の少しもわからない子供であるわい。けれどもあの幼い紫上を我が處に迎へ取つて、よく教育してやらうと思しめされた。

○何か淺う思ひ給へむことゆゑ——萩原廣道は「源氏君の詞也、ひとり言といふ舊注はひがごととなり、あさく思ふ事ならば、かくをさなき人にすき／＼しきさまを見え奉らんやといふ意なり」とあるのはよい。○いかなる契にか——廣道の説に「ちぎりは例の宿縁也、いかなる前世の宿縁にかあらん、見そめしよりあはれに思ひ聞ゆるも、我ながらあやしと也、までの下少し詞足らぬこゝちす」と、又玉の小櫛に宣長は「此世のみの事にはあらじ、前の世よりの因縁にこそと也、過現未三世の事といふ注はいみじきひがごと也」と言つてゐる。

○いさ——いやさ。

○見しかばこころのあし——尼君などが、源氏君を見たら、氣分の悪いのも直つたと仰せられたと紫上がいふのである。

○かしこきこと聞えたり——よい事を聞いたと思つて、得意になつていふ。

○いとみかした——源氏は甚だ面白いと聞いたが。

○人々の苦しと思ひたれば——源氏は紫上とはお知りなかつたが、人々苦しげに思つてゐるさまを見知り給ふ故に、聞かぬさまをしたまふのである。

○げにいふかひなのけはひや——尼君の言ふが如く紫上はまことに、幼稚なものである。

源氏の君は如何にもして紫上を一日ながめたしと希望せられたが、女房どもは源氏の君の切なる戀をさまたげて、紫上は既に就寢なされた由を告げた。すると源氏の君は淋しくしてゐられる折から、彼方からさつさと紫上がやつてきて、「うへこそ、この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見給はぬ」と無邪氣に語りだしたのである。今日茲處を讀むもの誰しも破顔



一笑せざるを得ないのである。女房はびつくりして「あなかま」と言つて制したが、紫上は「いさ、見しかばこゝちのあしき慰みきとのたまひしかばぞかし」と輕やかに述べてゐるところは無邪氣な然も純な子供心が面白くあらはれてゐる。

またの日も、いとまめやかにとぶらひ聞ふ給ふ。例のちひさくて、

「いはけなき田鶴の一聲き、しよりあしまになづむ船ぞえならぬ

同じ人にや」と、殊更幼く書きなし給へるもいみじうをかしげなれば、やがて御手本にと人々きこゆ。少納言ぞ聞えたる。「問はせ給へるは、今日をも過しがたげなるさまにて山寺に罷りわたる程にて、かう問はせ給へるかしこまりは、この世ならでも聞えさせむ」とあり。いとあはれとおぼす。

秋の夕は、まして心のいとまなくのみ、思し亂るゝ人の御あたりを心をかけて、あながちなるゆかりも尋ねまほしき心も増り給ふなるべし。消えむ空なきとありし夕思し出でられて、戀しくもまた見劣りやせむと、さすがにあやふし。

手につみていつしかも見む紫のねにかよひける野邊のわか草

○例のちひさくて——いつものやうに紫上への御手紙は小さな紙をひき結んで、その紙には。  
○いはけなき田鶴の一聲云々の歌——補遺参照。  
○同じ人にや——同じく紫上を戀ひ慕ふのである。

○殊更幼く——幼き人即ち紫上への歌であるからして、わざと幼いさまに書きなされるのである。

○やがて御手本にと——此の源氏の君から来た文を、そのまま紫上の手習をなされるときの手本にしようとする人が言つた。

○少納言ぞ聞えたる——尼君からは返事がなくして、少納言女房が返事をした。  
○問はせ給へるば云々——

○この世ならでも——源氏の君の御米訪に對する御禮は、今世でなくして來世からいたします。尼君のなされるのを少納言が代つて言つたのである。

○秋の夕はまして心のいとまなくのみ——心のいとまなくのみと讀み切つて、さて思し亂るる人の御あたりへつづけて意味を考へるがよい。

○思し亂るる人——藤壺をさす。

○あながちなるゆかり——幼き紫上を無理に言ひ寄るないう。ゆかりは藤壺のゆかりである紫上をいふ。

○消えむ空なき——「おひたたんありかも知らぬ

十月に朱雀院の行幸あるべし。舞人などやむことなき家の子ども、上達部殿上人なども、その方につきくしきは皆選らせたまへれば、親王達大臣より初めて、とりくのさえども習ひ給ふにいとまなし。

翌日も亦、親切な御手紙が尼君のもとに送られた。その中には常のやうに小さな紙を引き結んで、紫上にあてた歌が書かれてある。

「いはけなき田鶴の一聲き、しよりあしまになづむ船ぞえならぬ

同じく紫上を戀ひ慕ふのであらう」と特別に幼稚なさまに書かれたのが甚だ面白いさまであつたから、すぐさまそれを紫上の習字の御手本にされたならよろしいとおそぼの人々が言つた。この源氏の君からの御手紙に對して、女房少納言が尼君に代つて御返事を書いた。それには「御見舞下された尼君は、今日一日をも過されぬほどの重病になりましたので、山寺に行つて死ぬやうにいたしましたわけで、斯く親切に御見舞下された御禮は、現世からではなく、あの世から尼君が致すことにいたします」とある。源氏はこれは氣毒なことだと思召された。蕭條たる秋の夕暮はまして一層心の落着く暇もなく哀愁が胸に湧き、思ひ惱んで戀してゐる藤壺の身を愛慕し、無理にも言ひ寄りたいたい藤壺のゆかりの紫上をも尋ねて見たいと思しめされる心も強いやうであつた。何時であつたか、尼君が「おひ立たむありかも知らぬ若草をおくらすつゆぞ消えむそらなき」とよまれた夕暮どきの様子が追想せられて、戀しさに堪えがたいが、然し紫上を



わか草をおくらす露ぞき  
えん空なきよみなき  
つた時の事などか思ひ出  
すのである。

○見劣りやせむ——紫上  
を深く思つてゐるが、事  
實見ると案外つまらない  
女であるかも知れない。  
○手につみていつしかも  
云々の歌——補欄参照。  
○とりくのざども——  
—さえば才にて音楽の器  
用をさす。琴笛いろく  
の藪かならひ給ふのであ  
る。

引き迎へて見ると案外つまらない女であるかも知れないと、切な戀に落ちてゐられるが又不安にも思はれる。

そこで源氏の君は

手につみていつしかも見む紫のねにかよひける野邊のわか草  
と一首お詠みなされた。

十月には帝が朱雀院に行幸があつて紅葉賀が催されるのである。それでそのときの舞人などには、高貴な攝政關白家の公達、並びに上達部殿上人どもの中で、舞ひ人として似つかはしい人々が皆選抜され、親王方大臣方より始め、これ等の人々まで何れもそれ／＼に各自に適した藝を修行なさつたからして、その間は少しも暇がなかつた。

○いはけなき田鶴の一聲きしより云々の歌——まだ幼い田鶴の一聲を聞いてからといふものは、蘆の生えてゐる間を通うてゐる船はどうしてよいかと思ひなやんでゐるといふ意で、いはけなき田鶴に紫上をたとへ、船に源氏の君をたとへたのである。評釋に「上句は紫上の一聲を聞き給へるをひな鶴によせてほめかしたる也。船は源氏退治からのたとへなり」と、玉の小櫛に「あしまになづむは思ひなやむをたとへたり、えならぬは淺からずにて、思ひなやむことの淺からざるよし也、えに江をもたせたり、えならぬの舊注どもみだり也」と、(えならぬの舊注としては細流抄に自由ならずとあり、河海抄にたゞならぬとある) ○同じ人にや——この句は古今集戀歌四にある「堀江こぐたなきし小舟こぎかへりおなじ人にやこひわたりなむ」

の歌による。○山寺に罷りわたる——源氏物語新釋に「この比は病みて死なんするほどには、山寺へわたして寺にて愁るさまにせしなり、かくの如き保蜻蛉日記にも見え、古歌のはし書きにもおやの喪に山寺にこもりたる事あるもさる類と見ゆ。出家したる人は殊にさもするにや」と言つてゐるが如く、當時の風習としては最早臨終近くなると山寺に移して、そこで死なさせるのであつた。○手につみていつしかも見む云々の歌——紫の根(藤壺)のそのゆかりである野邊の若草(紫上)を、何時自分のものとして見ることが出来るであらうかの意にて、河海抄に「此歌紫の名の始也、此紫上の名字先達色々に釋せり、いづれも今案の了簡也、根にかよひけるとは藤つぼの女御のゆかりと云也、古今に「紫の一本ゆゑにむさしの草はみながらあはれとぞ見る」といふ歌の心也云々」と、岷江入楚に「私云、此歌は源の紫上の事を思ひやりて、たゞ獨り口すさびに詠じ給へりとみゆ。又時分秋の末とみゆ、それに若草と詠じたる事如何。されど昔はかやうの事も沙汰なかりけるか、又尼公の若草の詠を思ひ出で給ふ故、人きかぬひとりごととなればなほざりに時分相違したれど詠じ給ふ歟」と、これに對して評釋には「岷江入楚に、此歌の時節の論あり、いたづらごと也、用ひまじき也、此歌の下に詞をはぶけるいとめでたし、野邊のわか草はかの消えむ空なきといふ歌より引きもて來れる也」と言つてゐる。○十月には朱雀院の行幸あるべし——花鳥餘情に「朱雀院は後院也、天子脱履の後の御在所也。三條朱雀院に四町に造られたり。延喜の御宇には宇多の御門を朱雀院と申し十月の行幸は紅葉賀の事なるべし」と、西三條實澄は「是は十月に行幸のあるべき事のあらましをいふ也。實は紅葉賀卷に



見えたり、前に連々稽古の最中也」といふ。評釋には「この行幸の事末摘花巻にも見えて、そのいとなみの事も見えたり、これ紅葉賀巻と引合せてとりつなぎたる照應の法なり、猶そこに「もいふべし」と言つてゐる。○やむごとなき家の子ども——毘江入楚に「舞人には攝政家大臣家以下の子どもも出づる事也、されば源氏頭中將などもまひ給ひし也」と。○とりくのさまども——評釋には「さえは才にて音楽の器用をさす、琴笛いろくの藝をならひ給ふ也、ならひ給ふの下にもし落ちたることしるれば今補ひつ、なくては聞えぬこと也、いとまなしはくの誤にはあらじか、しかあらんかた下へのことわりたしかなり」とあるのは卓見である。

山里人にも久しう音づれ給はざりけるをおもほし出でて、ふりはへ遣したりければ、僧都の返事のみあり。たちぬる月の廿日のほどになむ遂に空しく見給へなして、世間の道理なれど、かなしび思ひ給ふる」などあるを見給ふに、世の中のはかなさも哀に、彼めたげに思へりし人もいかならむ、幼きほどに戀ひやすらむと、故御息所に後れ奉りしなどはかしくしからねど思ひ出でて、浅からず訪ひ給へり。少納言ゆゑなからず、御返など聞えたり。忌など過ぎて、京の殿になむと聞き給へば、程經て自ら長閑なる夜おはしたり。いとすごげに荒れたるところの人ずくななるに、いかに幼き

○山里人にも久しう——源氏は舞などならひ給ふために暇もなく、尼君や紫上に御無沙汰なされたのである。山里人は尼君紫上をさす。○ふりはへ——孟津抄に「わざと也」と注す。わざと。○たちぬる月の——過ぎにし月の意。花鳥餘情に「尼公九月中旬の頃までは、六條京極の家にすみしが、おなじき廿日に北山にてつひにうで侍る也」とある。○世間の道理なれど——

人おそろしからむと見ゆ。例のところに入れ奉りて、少納言、御有様などうち泣きつつ聞え續くるに、あいなる御袖もたゞならず。

死ぬといふことは世間の道理であるけれども。○故御息所に後れ——源氏が母更衣に死に別れた折の事など。○はかしくしからねど——源氏三歳の時の事であるからして、たしかにおぼえては得なかつたが。○ゆゑなからず——ゆゑなく。○忌など過ぎて——祖母の服は三月、假は三十日である。こゝは三十日の假のあきたるをいふ。○京の殿になむ——紫上は京へ歸り給へると聞きたまへば。○程經て云々——源氏は暫時經てから。○例のところに入れ奉りて——前にありし南の廂であらう。○少納言御有様など——紫上が祖母君になれ給ひて、悲しみ給ふ御ありさまをかたり申すのである。

源氏の君は前段にもあつたやうに舞人の一人と選ばれたつた爲めに、その方の稽古のため忙しくて暇もなく、永らくの間山寺にゐる尼君や紫上を音づれないで御無沙汰をしてゐられたが、今日は思ひ出だされて、わざと使を山寺の方へ遣し、御手紙を送られた。すると僧都からは返事があつた。それには「尼君も過ぎにし月の廿日頃に、とうとう死んでしまひました。死ぬといふことは世間には選れられない道理なことでありますが、悲しく思つてゐます」などと、書き記されてゐるのを御覽になつて、浮世の無常なことも悲しく、又尼君が始終心配してゐた紫上はどうしたであらう、まだ幼少のことであるから尼君を戀ひ慕つてゐるだらうと、源氏は御自身が母なる桐壺の更衣に早く死に分れたときの事、それはつきりと記憶してゐないが、思ひ出して丁寧にお尋ねの手紙があつた。少納言は、これに對してゆる／＼しく御返事を奉つた。紫上は尼君の忌三十日も過ぎて、京の御殿にお歸りあそばされたとお聞きなされたから、暫くたつてから源氏御自身が長閑な夜おたづねになつた。その御住家は非常に物淋しく荒れ果てたところで、人も少ないのであるから、まだ幼少であられる紫上は、こわい感じに打たれなせることだらうと思はれた。さて源氏の君を例の南の廂の間に入れ奉りて、少納言女房が、紫上の尼君に死に分れなかつたとき悲しみなかつた有様を申し上げたので、源氏の君も何となく涙が落



○あいなく——何とな

ちて袖をぬらしなかつた。  
○戀ひやすらむと——玉の小櫛に「ともじ多くの本にこゝとあり、とは一本にある也、故といふこともあらまほしけれど、といふことは必ずなくてはかなはぬ所也、もしは戀やすらんとこ御息所にと有りしをたがひに落せるにやあらん」と、評釋には「此説によりて今假にこもじを補ひつ、故といふことも必あるべき前後の例也」と言つてゐる。

源氏が切に紫上を求めてゐられたが、尼君が頑固にもそれをまだ許されなかつた。然るに今やその尼君も死んでしまつた。今後は源氏と紫上とはいよいよ接近して來るのである。

○宮に渡し——紫上を父兵部卿の宮の御處へ渡さうとしたのを。  
○故姫君——紫上の實母である。紫上を父のとこへ渡すことを、故姫君はなさげなくうきものと思しなされたのである。これ繼母の心がさがないためである。  
○いとむげに——二、三歳のときであるならば無分別でよいが、紫上も今や十歳にもなり給へば、他人の中の住居もどうであらうかの意。

「宮に渡し奉らむとはべるを、故姫君のいと情なく憂きものに思ひ聞え給へりしに、いとむげに兒ならぬ齡の、まだはかくしう人のおもむけをも見知り給はず、中空なる御ほどにて、あまたものし給ふなる中のあなづらはしき人にてや交り給はむなど、過ぎ給ひぬるも、世と共におもほし歎きつるも、しるきこと多く侍るに、かくかたじけなげの御言の葉は、後の御心もたどり聞えさせず、いとうれしう思ひ給へられぬべき折節に侍りながら、少しもなずらひなるさまにもものし給はず、御年よりも若びて習ひ給へれば、いとかたはら痛く侍り」と聞ゆ。「何か、かう繰り返し聞えしらす

る心の程をつゝみ給ふらむ。そのいふかひなき御有様のあはれにゆかしう覺え給ふるも、ちぎりことになむ心ながら思ひ知られける。なほ人傳ならで聞え知らせばや。

あしわかの浦にみるめはかたくともこは立ちながらかへる波かはめざましからむ」とのたまへば、「げにこそいとかしこけれ」とて、「よる浪のこゝろもしらでわか浦に玉藻なびかむほどぞうきたるわりなきこと」と聞ゆるさまのなれたるに、少し罪ゆるされ給ふ。

○まだはかくしう——ひたすらに幼きか、分別あるかにてあれば人に添ふものであるが、只今の如く十歳といふ年齢では、そのどちらへもつかぬ中途半端即ち中空である。はかくしうはしつかりとしたこと。  
○人のおもむげ——他人の心ばへ、心もち。  
○あまたものし給ふなる——兵部卿の御子様は深山あられるが、その中で輕蔑せられる人となられるであらう。  
○過ぎ給ひぬるも——亡くなりなかつた尼君をさす。  
○世と共に——常に。  
○しるきこと多く——少納言が繼母の趣を知つて今物語るのである。  
○なげの御言の葉——かくかたじけなく仰せられる事は、ありさうもない御詞でありながら。  
○少しもなずらひなざる

少納言は源氏の君の御前で「この紫上を御父兵部卿の宮にお渡し申すべき筈でございましたが、亡くなりなされた紫上の母上が、繼母の心もよくないから、そこへわが娘をやることは甚だ可愛いことであり、心苦しいといふので遂におやりにならなかつたのが、今は既に相當な年齢となられたにも拘らず、まだしつかりと世人の心もち機嫌が、わきまへられるほどでもなく中途半端な有様でゐられます。これでは父宮には澤山の御子様がゐられるのだから、その中の輕蔑せられる人とおなりなざるだらうと、先日亡くなりなされた尼君も、常々心配してゐられたことは、大へんなものでありました。斯うした折から源氏の君には紫上に對して、ありがたのお言葉を賜はり、君の温い御心はこの後とても變らないものであるかどうかはわかりませんが、そ



さまに——紫上はまだごく幼少であられるから、源氏の御妻にくらべられないありさまである。  
 ○何か、かう繰り返し聞えしらす云々——源氏の詞也。どうして私がかく幾度も／＼申し上げる切なる心を、明らかに受取りなさないで御遠慮なさるのであらうか。

○ゆかしう覚え給ふるも——評釋に「こも源氏みづからの給ふなれば、給ふるも有るべきことしるければ今補ひつ」とあるに従つて置いた。  
 ○ちぎりことになむ——斯く吾が幼少の紫上を強く思慕する。  
 ○あしわかの浦にみるめは云々歌——補欄参照。  
 ○めざましからむ——心得がけずびつくりすることであらう。  
 ○よる浪のこゝろもしらでわかの浦に云々の歌——補欄参照。

れでも嬉しく思はれます。けれども紫上はまだあどけない様でありますから、君の御妻になすらひなさるやうでもありません、實際の年齢よりは子供らしくゐられるので、もう少し／＼つかりしてゐられるならばよろしいのにと、君の爲めには氣毒なことであります」と申し上げた。すると源氏の君は「私が斯く熱烈に紫上を思慕してゐるのに、どうして繰返し／＼申し上げる私の言葉に對して、遠慮をなされて打解けた物語りをなさらないのでせう。紫上はまだごく幼稚な子供でゐられる御様子、吾にとつては非常になつかしう思はれるといふのも、吾と紫上との因縁は、世上の普通のものとは變つた特別なものであると思はれますぞ。それでは他人にたよらず、私自身から直接にこの思慕してゐる情をお知らせいたしませう、

あしわかの浦にみるめはかたくともは立ちながらかへる波かは  
 心得がけぬことであらう」と仰せられたので、少納言は早速それにお對へして「いかにも恐縮の至りでございます」といつて、一首  
 よる浪のこゝろもしらでわかの浦に玉藻なびかむほどぞうきたる  
 御無理のやうに思はれます」と申しあげる有様が、如何にも物馴れた態度であつたから、源氏の君の心も少し慰められた。

○あまたものし給ふなる中に——花鳥餘情に「兵部卿の宮の御むすめ今の北方の御はらに女一人、冷泉院の女御也、又一人ひげくろの大將の室也、その外は系圖にのせず」と、眠江入楚の箋に「兵部卿宮御女三人有り。冷泉院の女御と將軍大將の北方とは、北方の腹也、いま一人

○わりなきこと——御無理なことである。

は紫上也」と見える。○かくかたじけなきなげの御言の葉——評釋「無氣とは有りげにもなきとの意也、かくかたじけなくのたまふはありげにもなき御詞ながら、後に御心のかはるとかはらぬをもとはず。まづいとうれしき折ふしなり、さはあれど紫上の源氏君の御めになり給ふべきさまにもあらず、年よりもさなくおはすればきのどくなりといふ意也、なすらひとは御妻に準ふといふ心の體言なり」と見える。○つみ給ふらむ——この語の考證については評釋に「此所意とほらず、案につみ給ふらんとあるは、つみ給へんと有りしを寫しひがめたるなるべし。其故はかうくりかへし聞えしらす心のほどいふまでは、源氏のみづからのうへをの給ふなるに、つみ給ふらんとては、少納言がつむ事となれり、されば必しか有りしにこそ、一本には給らんと書きたり、やちかし。さてこれはなげの御ことのはなどいへるに答へてかうくりかへし、いひしらすることのほどを、何かつみ侍らんとたまへるなり、かくて心明らけし。注どもみなひがことなり」と論じてゐる。○あしわかの浦に云々の歌——葦若の浦で海松(見る目)はたとひむづかしくとも、さらばとてこの儘で立ち去る波であらうかの意で、その意の中には若い紫上を見ることは出来ないとしても、それですごと／＼と歸へられませうか、そのやうなことは出来ないの意。評釋に「紫上に對面はなしがたくとも、物ごしに立ちながら、此まゝにかへるべき事はといふ意なり、故にげにこそいとかしけれといへる也。わかの浦に紫上の幼きをよそへ、海松に見る目をそへたる也、葦若の浦の説拾遺のことし。別に記しつ」と。玉の小櫛に「結句かへるべき波かはといふべきをかへる波かはといへるはず



こしいかど」といつてゐる。蘆若の浦については源注拾遺に「今按蘆若の浦を別にひとつの名所とするは誤れるを、此細流にはよく釋し給へり、蘆の若きによせたる事少納言がかへしに、あしを捨て只わかか浦とよめるにて明らか也」と論じてゐるがよい。○よる浪のこもろもしらで云々の歌——近寄つて来る浪（源氏の君）の心をもよくわきまへないで、和歌の浦の玉藻（紫上）が靡いて、御意に従ふといふのも、あまりに浮氣なことではありませぬかの意。この歌について評釋には「よりくる源氏君の御心をもしらすして、なびきしたがひ給はんは、うきたる事ならずやといふ意を、わかか浦の波によせていへり。玉藻は海藻に丸き實のあるをいふと先達はいへりき。なびかんうきたる皆藻の縁にて、上の歌の海松をうけたる也、わかか浦はあしわかか浦をうけて、紫上をふくめたるは勿論也、舊注あらくして事の心聞きとりがたし」と。

評 源氏の君が紫上に對する心持ちはいよ／＼強烈となつてきた。あしわかか浦にみるめはかくともこは立ちながらかへる波かは」とある歌によつても、この後の行末には何か事が起るやうに豫感せしめられるのである。

なぞ越えざらむとうち誦じたまへるを、身に染みて若き人々おもへり。君は上を戀ひ聞え給ひて泣き臥したまへるに、御遊がたきどもの、直衣著たる人のおはする、宮のおはしますなめりと聞ゆれば、起き出て給ひて、「少納言よ、直衣著たりつらむはいづら、宮のおはするか」とて寄りおはした

○なぞ越えざらむ——河海抄に「人しれず身はいそげども年をへてなぞこえざらんあふ坂の關」と引いてゐる歌によつたものである。  
○若き人々——若き女房どもをいふ。

る御聲、いとらうたし。「宮にはあらぬど、またおほし放つべうもあらず。此方」とのたまふを、恥しかりし人とさすがに聞きなして、あしういひてけりと思して、乳母にさし寄りて、「いざかし、ねぶたきに」とのたまへば、「今更など忍び給ふらむ、この膝の上に御殿籠れよ。いま少し寄り給へ」とのたまへば、乳母の、「さればこそかう世づかぬ御程にてなむ」とて、押し寄せ奉りたれば、何心もなく居給へるに、手をさし入れて探りたまへれば、なよよかなる御衣に、髪はつや／＼とかかりて、末のふさやかに探りつけられたる程いと美しう思ひやらる。

源氏の君は、吾はどうかして紫上と一緒にならう／＼と思つてゐるから、「どうして世の人の目があるとしても、それを越えられないことがあらうか、年を経たならば相逢ふことが出来るだらう」との意の古歌を吟ぜられた。これを聞いた若い女房どもは胸にしみ／＼と思ひあたるところがあつた。紫上は亡くなつた尼君を戀ひ慕つて泣き臥してゐられると、紫上の遊び友達どもが「直衣を著たお方がお出でになりました。是は父兵部卿の宮がお出でなされたのでありませうと申し上げたので、紫上は起き出で、少納言よ、直衣著た人が来たといふが、その方はどこにゐられますか、父兵部卿の宮がお出でになつたのか」と言ひながら、少納言のもとに

○君は上を——君は紫上をさし、上は尼君をさす。  
○御遊がたき——お遊びのあひて、遊び友達。  
○宮の——紫上の父宮をさす。  
○またおほし放つべうもあらず——我も他人とおぼし放つべきではありませんと源氏が答へられたのである。  
○恥しかりし人——上に御子になりておぼしませよなどといつた人であるからして、ぼづかしかりし人と言つたのである。  
し文字に心をつくべきである。  
○さればこそかう世づかぬ云々——それであるから御覽なさい、まだ世の交りをも知らないほどな子供でございませと、乳母の少納言が言つたのである。  
○手をさし入れて——源氏が紫上の上の衣のあひへ手を入れて髪をさぐ



りなざるのである。このとき紫上は衣をうちかけて、その中に髪をきこめてあられたものと思はれる。  
○いと美しう思ひやらる  
——補欄参照。

○強ひて引き入り——紫上が母屋の奥に入りなせるのである。  
○すべり入りて——にじりよつて、するくくと入るのである。  
○今はまるぞ思ふべき人——尼君が亡くなつた今日、吾源氏こそはたよりとしてあなざるべき人であるぞよ。  
○聞え知らせ給ふとも——紫上はまた幼少であられるから、源氏がいろいろと仰せられてもその甲斐がない。  
○さりともかかる御程をいかゞばあらむ——斯く

近寄りなざる御聲は非常に愛しい。源氏の君は「吾は兵部卿の宮ではないけれども、然し他人として思ひ放つべきやうなものでもない。さあこちらの方へあつしやい」と仰せられると、紫上はさあ恥づかしい源氏の君であつたとさすがにお聞き知りになり、悪いことを言つたと思はれ、乳母の少納言のそばに寄り添ひ、「さあ、ねぶたいからねさせてよ」と言はれる。源氏は斯うなつてどうしてそんなにお姿を隠しなされるのですか、まあ私の膝の上にお眠りなさい。もう少しこちらへ近寄りなさい」と言はれた。すると乳母は「このやうでありますから、御覽の通り世の交りを知らないのであります」と言つて、紫上を源氏のもとに押し寄せると、姫は何心もなくそこに居られるのを、源氏は手をさし伸して、紫上の上衣の下に入れなかつた。するとなよ／＼とした軟かな御衣に、髪はつや／＼と垂れ下り、髪末の房々とした様が、手で探つたとき觸つたのは非常な美しい姫であるやうに察せられた。

○なぞ越えざらむ——源注餘滴に「(河)人しれず身はいそげども年をへてなぞこえざらん逢坂の關」後撰集戀三伊尹朝臣初五文字「人しれぬ」四句「なぞこえがたき」とあり」と。又評釋には「こえがたきを越えざらんとて引きたるは例の筆也、戀ざらんとある本はことわりなし。河海はおぼえそこね給へるなるべし。さてこの意は年をへなばなどは逢ふといふ關も越えざらんと也、いとをかし。」と言つてゐる。○いと美しう思ひやらる——この語によりて當時の世態の一端をも知られるほど深遠な意味が含まれてゐる。評釋にも「此物語のころの女は髪をたれてありければ、何物よりも先づ髪のためたきをほめたること也。上に紫上の髪のことを

たび／＼いへりし脈也、心をつくべし、思ひやらるとはきぬの中にて見えぬ故にいへり」とは明解である。

評 「押し寄せ奉りたれば云々」の句は尼君ならばとても爲さないことであるが、尼君が亡くなりなかつた今日は、少納言が紫上の世話をしてゐるとはいへ、他人である悲しさには大膽にも源氏の御前に押し寄せ奉るなどのことが出来たのである。

手をとらへ給へれば、うたて例ならぬ人のかく近づき給へるは恐しうて、  
「寝なむといふものを」とて、強ひて引き入り給ふにつきて、すべり入りて、「今はまるぞ思ふべき人、な疎み給ひそ」とのたまふ。乳母「いで、あなうたてや、ゆゆしうも侍るかな。聞え知らせ給ふとも、更に何のしるしも侍らじものを」とて苦しげに思ひたれば、「さりとも、かゝる御程をいかゞはあらむ、なほ唯世に知らぬ志の程を見はて給へ」とのたまふ。霰降り荒れて凄き夜のさまなり。「いかで、かう人づくなに心ほそうて過ぐし給はむ」とうち泣い給ひて、いと見捨てがたき程なれば、「御格子まありね。物怖しき夜の様なめるを、宿直人にて侍らむ、人々ちかう侍らはれよかし」



とて、いと馴れ顔に御帳の内にかき抱きて入り給へば、怪しう思の外にもとあきれて、誰もく居たり。乳母は後めたうわりなしと思へど、あらましう聞え騒ぐべき程ならねば、うち歎きつゝ居たり。

源氏の君は紫上の手をしつかとお握りなされると、紫上はいやですよ。常に馴れ親しんでゐる人でもないのに、斯く馴々しくなさるのは恐ろしいことである。「さきから寝ようと言つてゐるのに」と言つて、無理に母屋の方に行きなされる。源氏もその後からくつゝいて、する／＼とお入りになり「尼君の亡くなつた今日は、吾源氏こそは、汝のたよりとしてたのみなされる人であるぞ、決して吾をうとみにくんではならない」と仰せられる。乳母の少納言は「さあ、大へんなことになつたかな。如何に源氏が姫に言ひ聞かせなされたとしても、更に少しのきゝめもないのであるのを」と心苦しうに思つてゐたから、源氏は「斯るとも、まだ御幼少でゐられるから押立ちて無理なことがあらうか、そんなことは無い。それでも唯だ世に類ない我が熱烈な志の程を見て下さい」と仰せられる。その晩は霞が降り荒れて、物凄く晩であつた。源氏は「斯う淋しい處であるのに、どうして斯く少人数で心淋しくその日／＼を過しなされるのであらう」とうち泣きなされ、今晚は見捨てがたい氣がするからとて、「早く格子戸を下しなさい。物凄く晩のやうでありますから、吾は宿直人となつてやらう。さあ汝等は吾の側近くへ寄つて来いよ」と言はれ、甚だ馴々しい顔をしながら御帳の中に、紫上を抱いてお入りなされた。女房共はこ

あるとも、まだ御幼少であられるのだから、押立ちて無理なことばない。○世に知らぬ——世にたぐひない程な。○いかでかう人すくなに——このあれたる所に人があらずなくて、幼き人がどうして月日を過しなされるだらう。○御格子まゐりね——御格子を下せ、怖い夜であるから、吾が夜番をしてやらうと源氏が仰せられるのである。○あちま——こほにかになどと、あち／＼しく言ひ騒ぐべき事でもないと少納言が思ふ。

○若君——紫上をいふ。○いと美しき肌つきも——根江入楚には、紫上のはだつきとあるはひがことである。源氏の御肌つきをさす。さうでなくしてはおぼしたるをといふことは聞えがたい。○ひとへばかりをおしくとみて——おしくとみてはおしつゝみでの意。紫上をひとへばかりにしておしつゝみ、肌こそへたまふのである。○いざ給へよ——さあ御

の様を見て、不思議にも思ひの外のことであるとあきれ果て、誰もくそこに居た。乳母の少納言は心配なことになつた。大へんなことだと思つてゐるが、さればとて荒々しく言ひ騒ぐべきことでもないから、心配しながらそこにゐた。

○すべり入りて——評釋に「廂の間の御座より母屋のかたへすべり入り給ふなるべし」とある。○世に知らぬ——評釋に「此世中にはいまだ見も聞きもしらぬといふ意也。すべてめづらしき事うつくしき事いみじき事にもいひならひて皆甚しき意也」と。

源氏と紫上との背景としては、「霞降り荒れて凄き夜のさまなり」の句がこの場合一層の情趣を添へるのである。

若君はいと怖しういかならむとわなゝかれて、いと美しき御肌つきもそのろ寒げに思したるを、らうたく覺えて、ひとへばかりをおしくとみて、わが御心地もかつはうたて覺え給へど、あはれにうち語ひて、「いざ給へよ、をかしき繪など多く、難遊などするところに」と、心につくべきことをのたまふけはひのいとなつかしきを、幼き心地にもいといたうもおぢず、さすがにむつかしう寝も入らずおぼえて、みじろぎ臥し給へり。夜一夜かぜふき荒るるに、「げにかうおはせさしましかば、いかに心ほそからまし。同



川で下さいと、源氏が紫上を二條院へ渡し奉らんとなさるのである。  
 ○心につくべきこと——紫上の心になふこと。  
 ○幼き心地にも——源氏のやさしく仰せられるの、幼い紫上の心には何とも思はないのである。  
 ○みじろぎ——身を動かすこと。  
 ○げにかうおはせざらましかば——この嵐の吹く晩に、源氏の君があらつしやらなかつたらば、さぞ心ほそいことであらうと女房どもが思ふのである。  
 ○同じくはよろしき程に——紫上もどうせ源氏と御一緒にになりなされるのであるならば、適當年齢であればよいのにと、女房らしき考を言つてゐるのである。  
 ○風すこし吹き止みたるに——風も少し静になつて、源氏は出でたまふと

じくはよろしき程におはしまさましかば」とさゝめきあへり。乳母は後めたさに、いと近う侍ふ。風すこし吹き止みたるに、夜深う出で給ふもことありがほなりや。「いとあはれに見奉る御有様を、今はまして片時のまもおほつかなるべし。旦暮ながめ侍るところにわたし奉らむ。かくてのみはいかゞ物懼し給はざりける」とのたまへば、「宮も御迎になど聞えの給ふめれど、この御四十九日過してやなど思ひ給ふる」と聞ゆれば、「たのもしきすぢながらも、よそくにてならひ給へるは同じうこそ疎う覺えたまはめ。今より見奉れど浅からぬ志はまさりぬべくなむ」とて、かい撫でつつ、願みがちにて出で給ひぬ。

源氏の君は御帳の中へ、紫上を掻き抱いてお入りになつた。すると年若い紫上はどうなるのだらうと恐れふるへてゐられる。又源氏の君の美しい肌も、ぞつとこわくさむさうに思つてゐられる。この有様を見て源氏は益々可愛さうと思し召され、單衣一枚に押し包んでしまはれる。さうして源氏は御自身でもさうはいふものゝ何となく可愛く思し召されて、いろ／＼と語られるには「さあ、こちらへゐらつしやい。面白い繪などが澤山あり、雛様の遊びをするところにまゐりませう」と、紫上が喜びなさるやうに仰せられる、その言葉が如何にもなつかしみのあ

いふ意。  
 ○ことありがほなりや——御忍び歩きなどの歸るさまである。  
 ○宮も——兵部卿の宮も。  
 ○たのもしきすぢながら——兵部卿宮は父宮でたのもしい方であるけれども、紫上は尼君の方にゐられたため、よそ／＼ほしくしてゐたのだから我と同じやうにうとくおほされるだらうの意。  
 ○今より見奉れど——我はわづかに今日より見始め奉るが。  
 ○浅からぬ志はまさりぬ——深き志は父君よりもまさるだらう。

る態度であつた。それで紫上は幼な心地ながら甚だしくもおそれられない。けれどもやはりこわがられて身をもぢ／＼させられて、ゆつたりとお休みにはならなかつた。恰度その晩は一晚中風が吹きあれたので、女房どもは「なるほど源氏の君が、今晚こゝにお泊りなさらずにお歸りなされたならば、私共は淋しくて、どれほど心細いことであるだらうぞ。紫上が、かく源氏の君と御一緒にになりなされるのであるならば、適當年齢でゐらつしやつたならばよかつたのに」と、こそ／＼と語りあつた。乳母はこれはどうなるのかと心配であつたからして、ごく近いところ待つた。戸外の風も少し吹き止んで、夜も靜かに更け渡つた頃、深更から出であるくのも斯うした忍び歩きのさまとしては一興であるだらうと源氏はお考へになり、源氏は「大へん可愛く思つてゐる紫上の御様子を見奉ると、今は一層可愛ものと思はれて、寸時も離して置くのが不安であるだらう。それで朝晩常に見て居られるところへ連れて行かう。このやうにしてゐては、どうして物におそれなさらないでゐられませう」と仰せられる。すると少納言は「父宮である兵部卿の宮も、紫上をお迎へに來られるといふやうであるが、それはこの四十九日を経過してからお迎へに來られるのであらうと思はれます」と申上げた。それをお聞きになつた源氏の君は「兵部卿の宮は父君でゐられるのだから、紫上にとつてはたよりとなるべき方でありませうが、今まで別居してゐられたことでもありますから、紫上は吾(源氏をさす)と同じやうに疎しくいやがられることであらう。私は今日から紫上をお世話するのであるけれども、深く愛してゐる親切な心は私の方がまさつてゐるでありませう」と、紫上の頭髮をなでながら、あとをか



へり見がちに出られた。

補 ○いと美しき御肌つき——評釋には「眠江に紫上のはだつきとあるはひがこと也、源氏君の御肌つき也、さらではおぼしたるをといふこと聞こえがたし」と言つてゐるが、これは眠江の一本であつて、他の眠江の一本には「源氏のはだつきなるべし」となつてゐる。○いか物懼し給はざりける——評釋に「諸本みなけりとあれどけるの誤しるければ今は一本によりつ、けりとある本によりていへる説はひがこと也。紫のかくてのみ居給はゞいかゞは物おちし給はざるべきといふ義にてけるはおしてきはむる意也」とある。○この御四十九日過して——花鳥餘情に「十一月九日尼君の中陰はつる也、此時はゞや朱雀院の行幸なども過ぎたるべし」といつてゐる。

評 源氏の君の、言葉やさしくすかしなぐさめなさるところ、女房どもが荒涼たる晩、男である源氏の君にたよつて安心してゐるところ、紫上のあどけないさま、乳母は乳母だけに心配してゐるあたり、又女房どもは今となつては源氏の君と紫上の年齢のふさはしいものであればよいと言つてゐるなど、それ／＼の性格があらはれてゐて面白い。

いみじうきり渡れる空もただならぬに、霜はいと白うおきて、まことの懸想もをかしかりぬべきに、さう／＼しう思ひおはす。いと忍びて通ひ給ふところの道なりけるをおほし出でて、門うち敲かせ給へど、聞きつくる人

○さう／＼しう思ひおはす——紫上のこのやうなあどけなさではと、物足らず淋しく思ひめされる。  
○いと忍びて通ひ給ふと

なし。かひなくて、御供に聲ある人してうたはせ給ふ。

あさぼらけ霧立つそらのまよひにも行き過ぎがたきいもが門かな

と二返ばかりうたひたるに、よしばみたる下仕を出して、

立ちとまり霧のまがきのすぎうくば草のとさしにさはりしもせじ

と言ひかけて入りぬ。また人も出て來ねば、歸るも情なけれど、明け行く空もはしたなくて殿へおはしぬ。をかしかりつる人のなごり戀しく、獨ゑみしつゝ臥し給へり。日たから大殿ごもりおきて、文やりたまふに、書くべき言の葉も例ならねば、筆うち置きつつすさび居給へり。をかしき繪などをやり給ふ。かしこにはけふしも宮わたり給へり。年頃よりもこよなう荒れまさり廣うものふりたる所の、いとゞ人づくなにさびしければ、見渡したまひて、「かかるところには、いかでか暫しも幼き人の過したまはむ。なほ彼所に渡し奉りてむ。何の所せき程にもあらず。乳母は曹司などしてさぶらひなむ。君は若き人々などあれば諸共に遊びて、いとようものしたまひなむ」などのたまふ。

ころの——玉の小櫛に  
「此段を寄けることは上にまことのけさうもをかしかりぬべきに云々といひて、紫上幼き故かへるさ、さう／＼しくおぼすから此女の家に着つれ給ふ也、注に此段物語のかざりにて奇妙也云々とのみあるはことならずとあるやうに、源氏の以前通うてあられた女のとまのこともか思ひ出だされるのである。  
○あさぼらけ霧立つそらの云々歌——補欄参照。  
○二返り——二度繰返して歌をうたふ。  
○よしばみたる——奥ゆかしい氣の利いた。  
○下仕——瀧水一露に「ぼしたものよりぼちと上なる人なり、しもにつかふ女也」とある。  
○立ちとまり霧のまがきの云々歌——補欄参照。  
○歸るも情なけれど——そのままでは歸りにくい



事であるけれども、夜明けはてはいかゞと、きまりわるく思召してお歸りなさるのである。  
 ○をかしかりつる人——紫上をいふ。  
 ○大段ごもりおきて——玉の小櫛に「ただおき給ふ事なかくいふは、おほとのもりて有りしがおき給ふよし也。花にさきちるといふもただちる事にて、咲きて有りしがちる意なるに同じ」とある。  
 ○書くべき言の葉も例ならねば——常の後朝の文とは異つた場合であるからして、さて書くべき詞もないのである。  
 ○すまび居給へり——評釋に「筆をさしおきつづ案じ給ふさまをすまびといへり、手なぐさめにするやうの意也」とあるはよし。  
 ○何の所せき程にもあらす——紙江入楚に「所せばきやうにことごとくしき

ほどの紫の御身にもあらすとのたまふ也」といつてある。  
 ○乳母は曹司などして——少納言は部屋をこしらへてゐるがよいと兵部卿の宮の言ふのである。

大へん霧が立ちこめてゐる空の有様は一通りではないのに、更に霜が甚だ白く降つてまことに寒い。このやうな朝こそ戀人の許に通ふのも本當に面白いだらうと源氏の君はお考へなされるについても、紫上はまだあどけないので、何となく物淋しく思つてゐられる。そこでこれは以前女の家には甚だこつそりと隠れ忍んで通うた道であつたと思ひ出だされると、どうすることも出来ない氣になつて、その家の門を打ちたゞかせられたが、すこしも聞きつけて出てくるものはない。つまらなかつたので御伴の中で聲の良いものに歌をうたはせられる。その歌といふのはあさぼらけ霧立つそのまよひにも行き過ぎがたきいもが門かな  
 これを二度ばかり繰返してうたふと、氣の利いた侍女をだして、  
 立ちとまり霧のまがきのすぎうくば草のとさしにさはりしもせじ  
 と返歌をした。その侍女は返歌をするすとすぐ内に入つてしまふ。その後は誰も出て来ないので、このまゝで家に歸つてしまふのも情けないことであるが、空はだん／＼明るくなつてくるので、このまゝでゐるのも人目に對して體裁がわるいとお考へになり、里邸二條院にお歸りになつた。あのをかした様子であつた紫上との別れが戀しくなり、源氏の君は獨り微笑を漏らしながら御就寝なされた。その朝は太陽が高く上つてから、やう／＼に床から起きなされ、紫上の許に送る手紙を書きなさらうとされたが、然し普通の懸想とは違つてゐたから、何と書いてよいか書くべき詞もわからず、筆をさし置いて考へられた。さうして面白い繪などを送られる。紫上の所では今日は父兵部卿の宮がお出でなされた。あたりの様子を御覽になると近年よりは非常に





荒れ果てしまひ、廣く古くなつた所は甚だ人氣稀に淋びしいさまであつたから、そこらをすつと御覽になつて、「このやうなところには、幼い紫上がどうして暫時でもお居でなさることが出来ようか、やはり我が居るところに連れて行かう。紫上は彼處は所が狭いなどいふほどのよい身分でもない。乳母の少納言は部屋を作り、そこに居てお仕へしたらよいだらう。又紫上は年若い兄弟達が澤山おられることであるから、御一緒に遊びなさつても、大へんよいことでありませう」など仰せられる。

**補** ○いと忍びて通ひ給ふ——花鳥餘情に「上に月のをかき夜忍び給ふ所にかよひ給ふとあり其人の事なるべし。夕顔巻の初に六條わたりの御忍びありきとあれば忍びてかよひ給ふ所といふに相叶ひて聞え侍り、但し系圖などには別人といへり」と。○あさぼらけ霧立つそらの云々の歌——夜明け方の霧立ち渡る空に、そこといふあてどもなく迷ひ出たが、我がかねてから戀ひ慕つてゐる女の門はまぎれもせず目について、そこをたゞ通り過ぎるわけには行かないの意。河海抄に「妹之門、催馬樂にあり、猿丸太夫集云、あひしれる女の家の前をわたるとて草をむすびていれたりける」「いもが門行過ぎかねて草むすぶ風吹きとくなあはん日まで」といひ、眠江入楚には「妹之門 催馬樂」「いもが門、せなが門、行すぎかねてや、わがゆかば、ひちかさの雨もやふらん、しでのたをさ、あまやどり、笠やどり、やどりて、まからん、しでのたをさ。」といつてゐるが、評釋には「此歌催馬樂の妹が門をおもはれたるさまなれど、意はかれにかゝはりたるにはあらず、たゞ霧たつ空のまよひにも妹が門はまぎれず思ひ出でられて行過ぎがた

しといふ意のみ也云々」といつてゐる。○立ちとまり霧のまがき云々の歌——霧が立つて隔ての垣をして過ぎ難いことであるならば、草のとさしには、おさはりもないだらうの意。河海抄に「後撰、女のもとにまかりけるに門をあけざりければ、兼輔「秋のよの草の戸さしの佗しきはあくれどあけぬ物にぞ有りける」女返し「いふからにつらさぞまさる秋の夜の草の戸さしにさはるべしやは」とある。○かしこにはけふしも——評釋に「けふしもといへるは、源氏君の文やり給ふ日しもといふ意にて、宮のわたり給へる危さをふくめたる辭也」とある。

近う呼びよせ奉りたまへるに、かの御移香のいみじう艶にしみかへり給へれば、「をかし御にはひや。御衣はいとなえて」と心苦しげにおほいたり。「年頃もあつしくさだ過ぎ給へる人にそひ給へるにより、時々かしこに渡りて、見ならし給へなごものせしを、怪しう疎みたまひて人も心おくれりしを、かかるをりにしもものし給はむも心苦しう」などのたまへば、「何かは、心ほそくとも暫しはかくておはしましたむ。少しもの心おほし知りなむに渡らせ給はむこそよくは侍るべけれ」と聞ゆ。よるひる戀ひ聞えたまふに、はかなきものも聞しめさずとて、げにいといたう面瘦せ給へれど、いとあてに美しくなかく見え給ふ。「何か、さしもおもほす。今は世になき

○御衣はいとなへて——いみじい香が衣服にしみこんでゐるが、甚だしくなえたるを心苦しう思ひなされるのである。これ紫上の後見のないのを可愛さうに思つて。  
○あつしくさだ過ぎ給へる人——病身で年老いた尼君。年頃は、ものせしなといふ語にかかる語。  
○見ならし給へなど——父宮がこなたの方へ来て當世風のことをも見馴れなさいと言つたが。  
○怪しう疎みたまひて人も——不思議にも紫上は



人の御事はかひなし。おのれあれば」など語ひ聞えたまひて、暮るれば歸らせ給ふを、いと心ぼそしと思ひて泣い給へば、宮もうちなき給ひて、「いとかう思ひな入り給ひそ。今日明日わたし奉らむ」など、かへすくこしらへおきて出て給ひぬ。

繼母をうとみなされたので、繼母もへだてを置くやうになりました。然るに今のやうに尼君も死んでしまひ、詮方ない場合となつてから、父の方へ來なまつては、繼母の心もどうであらうかと心苦く思はれると、父宮が仰せられるのである。

○何かは心ぼそくとも——前に父宮がいかでかしはしもをさなき人の過ごし給はんと仰せられたのをうけて、どのやうなことがありませうか、心ぼそくあるとも當分はこのやうにしてゐられるでせうと、少納言の返答である。

○開し召さずとて——玉の小櫛に、「此とては云々と、めのとなどの申すがそれ故とてげにいと云々の意也」と言ふ。

○何かさしも——紫上は夜晝と尼君を戀ひ給ひて物もまゐらぬとのことな

父兵部卿の宮は紫上を側近くへお呼び寄せになると、源氏の君の移香がひどくなまめかしく染み込んでゐたから、宮は「これは不思議な香氣である。ゆかしい香氣はするが、それにひきかへ御衣はひどく萎へてゐるわい」と可愛想に思召された。なほ父宮は「紫上は病身で年老いた尼君に世話をせられてゐらつしやつたから、それではじみな性質になるだらう。時々は我のゐる所に來て當世風の派手なことを少し見馴れた方がよいと、この數年來は言つてゐたのに、不思議にも繼母である北の方をうとみなさつたので、北の方でも隔心を持つやうになりました。それであるからして、今のやうに尼君が亡くなられ、詮方ない身上となつてから、此方へ來られては繼母北の方も、どう思ふであらうかと心苦しく思はれもいたしますが」など仰せられる。そこで乳母の少納言が申すには「紫上がこのやうにしてゐられたとてどのやうなことがありませうか。假令心細く思召されるとも、暫しの間はたよりないかうした有様でゐられるだらう。少しは物の道理もお分りになられてから、父宮の方へお出でなされた方がよろしくございませう」と申上げる。當の紫上は夜も晝も亡き尼君を戀ひ慕ひなまつて、一寸した食事でもさへも召

父君が聞きなまつて、なごさやうにおぼしなげくぞ。今はただ我をたのみ給へと父宮の言である。

○おのれあれば——父宮があるからして心細いことばないだらうと慰めなされるのである。

○今日明日わたし奉らむ——父宮の御方へ近日中に連れて行くから心細く思ふなよの意。

しあがらないさまであると少納言が申すが、成程紫上は顔も大へんお瘦せなされたが、それでも却つてその方が上品で美しくなつて見えた。父宮は「どうしてそのやうに亡き尼君のことを思召されるのか、最早この世になくなつた尼君のことなどは何と言つたとて仕方のないことである。まあそれよりもこの父をたよとしたがよい。この父が今後世話をしてやるから心配には及ばぬ」などお話しになり、さて夕暮となつたからお歸りなさらうとされた。すると紫上は大へん心細く思つて泣きなされたので、父宮もお泣きになり、「お前はそのやうに心配するにも及ばない。何れ今日明日中にかしこに連れて行つてやらう」など、繰返し／＼すかしなだめて出でられた。

○何かは心ぼそくとも——眠江入楚に「前にかゝる所にはいかでかしはしもをさなき人の過ごし給はんと父宮の宣へるをうけて、何かはといふなり」とある。又首書本には「河内本にはかゝるきほひに何かは心細くともとあり、花鳥には河内本の通りに注し給ふ也」と見える。

○少しものの心——眞淵は「少納言が下心には、かくおはしまさせて、よきほどに、源へすぐに參らせんと思ひていへるなるべし」と言つてゐる。

「年頃もあつしくさだ過ぎ給へる人にそひ給へるより云々、怪しう疎みたまひて人も心おくめりしを、かゝるをりにしもゝのし給はむも心苦しう」の仰せられてゐる父兵部卿の宮の心中は、この場合の眞情の動きがよく窺はれる。又紫上が亡き尼君を慕つてゐるところもよく書かれてゐる。



○名残も慰めがたう泣き居給へり——父宮の歸られた別れが慰しくて慰めがたいたのである。  
 ○たち離るるなりなう——尼君に離れる折もなく始終親んで居た。  
 ○晝はさても——晝の間は悲しきも何かと忘れる折もあるが、これ幼時のさまを書いたものである。  
 ○乳母も泣きあへり——あへりといふのは、乳母も他の人々の意をふくめあらはしたものである。  
 ○参り来べきを——源氏が惟光を使として、仰せつけられた消息の詞である。紫上の方へまゐるべきであるが、参内のことがあつて参られぬ。  
 ○心苦しう見奉りしも——紫上の夜は泣きなまるのを、源氏は氣毒に思ふからとて、惟光などを宿直人として遣はされる。

名残も慰めがたう泣き居給へり。行先の身のあらむことなどまでも思し知らず、ただ年頃たち離るるをりなうまつはしならひて、今はなき人となり給ひにけると思すがいみじきに、幼き御心地なれど、胸いと塞がりて、例のやうにも遊び給はず。晝はさても紛はし給ふを、夕暮となれば、いみじう屈し給へば、かくてはいかてか過し給はむと慰めわびて、乳母も泣きあへり。君の御許よりは惟光を奉れ給へり。「参り来べきを内裏よりめしあればなむ。心苦しう見奉りしも、しづ心なく」とて、宿直人たてまつれ給へり。「あぢきなうもあるかな、戯にても物のはじめにこの御ことよ。宮聞し召しつけば、さぶらふ人々の、疎なるにぞさいなまれむ。あなかしこ、もののついでに、いはけなくうち出て聞えさせ給ふな」などいふも、それをば何とも思したらぬぞあさましきや。少納言は惟光にあはれなる物語どもして、「あり經て後やさるべき御宿世遁れきこえ給はぬやうもあらむ。ただ今は、かけてもいと似げなき御ことと見奉るを、怪しう思しのたまはずも、いかなる御心にか、思ひよるかたなう亂れ侍る。けふも宮渡らせ給

○後にても——源氏が宿直人などをつかはして、れんごろになさるので、たとへ源氏の當座のたはぶれにし給ふとしても困つたことである。  
 ○物のはじめに——物のはじめに紫上を源氏の妾などにしては、父兵部卿の聞こしめしてお怒りになる。  
 ○さぶらふ人々の疎なるにぞ——紫上についてある人々即ち少納言などの疎略のいたすところとしてお叱りを受けるだらう。  
 ○あなかしこ——紫上に氣をつけてみて、物のついでにも父宮へ源氏の御出での事や、又宿直人として惟光などの来たことを申し上げるなど口止めをするのである。  
 ○それをば何とも云々——今乳母がいゝと注意したが、紫上は何故とも考へてゐられないのは

ひて、後やすく仕う奉れ。心幼くもてなし聞ゆななどのたまはせつるもいと煩しう、ただなるよりは、かかる御すきごとも思ひ出でられ侍りつる」などいひて、この人もことありがほにや思はむなどあいなければ、いたう歎かしげにもいひなさず。大夫もいかなることにかあらむと心得がたう思ふ。  
 父宮がお歸りなされたので、紫上はその別れが悲しく、慰められないほど泣かれた。紫上は今後の行先に自分はどうなるだらうかなどいふことは少しも考へられず、たゞ數年來離れることなく始終つき纏つて馴れ親んでゐた尼君が、今はこの世に亡き故人となりなされたと思はれると、ひどく悲しくなり、まだ幼い御心地でゐられるが、それでも胸もぐつと塞つて、以前のやうに楽しく遊ばれることはない。晝はそれでも何かと悲しみもとりまぎれてゐられるが、夕暮となると大へん心も打ち沈んで悲まれるので、斯う云ふやうではどうして月日を過しなされるであらうと慰め困つて、乳母や女房どもはお互に泣き合つた。このとき源氏の君の許から惟光を使として遣はされ、消息の言傳をなされた。その言傳には「君が自ら参上いたすべきであるが、宮中からお召しがあつたのであなたの方へはお伺ひいたされません。紫上には心淋しくお暮しであつたのを見奉つてからは、氣毒に思はれまして宿直人を遣はします」と仰せられて、惟光を宿直人として差遣せられた。少納言は「これは困つたこと



困つたものである。  
 ○あり無て後や云々——  
 (在々)あり〜て月日を  
 経過し紫上も成人なまつ  
 て後ば、さるべき宿縁が  
 あつて夫婦となりなさる  
 こともあらうの意。  
 ○思ひよるかたなう——  
 源氏と紫上とは似氣なき  
 ことでありながら、不思  
 議なほど熱烈に仰せられ  
 るのは、どういふ御心で  
 あるのかと分別しがた  
 い。

○後やすく——うしろめ  
 たきことなく。心配なく。  
 ○心幼く——紫上を心な  
 さなくもてなすな。おと  
 なしくかしつけよ。  
 ○たゞなるよりは——平  
 生よりはなほ一層、源氏  
 のすき心がわづらはしう  
 思ひ出でられる。  
 ○この人もことありがほ  
 にや——少納言の心であ  
 る。かやうにいふと源氏  
 と紫とは夫婦の契りがあ  
 るやうに思ふだらうと體

になつた。當座のたはぶれとしても、この幼い紫上を事の始めに本妻のある源氏の君の妾とし  
 ようとするのである。このことを父兵部卿の宮がお聞きになつたならば、側に仕へてゐる吾々  
 どもの疎略のいたすところであると責められるだらう。嗚呼こわいことである。ものゝついで  
 に、幼くも源氏とのかうした関係を父上に物語つてはなりませんよ」など言つても、當の紫上  
 はその言葉を何とも理解なさらぬとは困つたものであるわい。少納言は惟光に哀れなる物語な  
 どをして、「月日をすん〜と経過した後は、紫上も成人なされて、さるべき前世からの因縁は  
 遁れがたく、遂に源氏の君と御夫婦になりなさるやうにもなるだらう。然し只今の有様ではか  
 りにも源氏と紫上との年齢に隔りがあつて、似つかはしくないと思つて見てゐるのに、不思議  
 なほど君の方から熱烈に仰せられるのは、一體どういふ御心でゐられるのでせう。合點が出来  
 なく思はれます。今日も兵部卿の宮がお尋ね下されて、後めたきことのないやうに仕へよ。姫  
 を幼稚なさまに育てるな〜と仰せられるのも、うるさいことでもありません。平常よりもこの  
 やうなときには、源氏の君のすき心でゐられるのが一層思ひ出だされます」と言つた。けれど  
 もあまりに露骨に言ふと、この惟光も源氏と紫上とは関係があるのであらうと合點するであら  
 う。それは體裁が悪いからして、ひどく軟くやうなさまをして強くも言はなかつた。惟光も亦  
 どういふのであるか、はつきりと分らなかつたので不思議がつてゐた。  
 補 ○戯にても——玉の小櫛に「かりそめにてもといはんが如し。舊注にたとへ源の當座のたは  
 ぶれにし給ふとともといへるはたがへり。かくいふ詞の例をしらざる也、たはぶるゝことには

幾が悪つたからそれほど  
 にも言はなかつた。  
 ○大夫——惟光。

○参りて——惟光が源氏  
 のもとに歸りて。  
 ○さて通ひ給はむも——  
 紫上はまだ幼いのに、通  
 ひなさるのば、世間の聞  
 えも如何であらうかと思  
 はれて。さて二條院に迎  
 へなさるのである。  
 ○すまらぬなこちして  
 ——はしたないやうな心  
 地がして。  
 ○もてひがむ——おもし

あらず」と言つてゐるが、舊注の説と宣長の説とは要するに同じ意味となる。○物のはじめに  
 ——評釋に「きはやかに妾などいふべきさまにはあらねど、おひさきいかなるさちもあるべき  
 人を、まだきより、本意ある人にははするは罪なまれんと意なるべし」とある。○ただなる  
 よりは——評釋に「御すきこともたゞなるよりはわづらはしといふ意也。たゞなるよりは父  
 君のうしろやすう云々とのたまへる時なれば、たゞ平生よりは源氏君の御すき事のわづらはし  
 う思ひ出でられたりといふ意也。舊注よしなき説どもおほし」と言つてゐる。  
 評 父宮が「後やすく仕う奉れ。心幼くもてなし聞ゆな云々」と仰せられたので、少納言は「た  
 ゞなるよりは、かゝる御すきことも思ひ出られ侍りつる」と思ひめぐらすところは自然な心理  
 の移りがあらはれてゐる。

参りて、ありさまなど聞えければ、あはれに思しやられるれど、さて通ひ給  
 はむもさすがにすまらぬなるこちして、輕々しうもてひがめたる事と人も  
 や漏り聞かむなどつゝましなければ、たゞ迎へてむと思ほす。御文は度々奉  
 れたまふ。暮るれば、れいの大夫をぞ奉れたまふ。「さはる事どももありて  
 え参り來ぬを、おろかにや」などあり。「宮より明日にはかに御迎にとのた  
 まはせたりつれば、心あわただしくてなむ。年頃の蓬生をかれなむもさす



ひがむ。  
○只迎へてむと思はず—  
—二條院に迎へようと思  
はれた。

○さばる事どものありて  
云々—源氏の惟光をし  
て言ひつかはすのであ  
る。差障ることがあつて  
参上しないのをおろそか  
にしてゐると思召すな。  
おろかはおろそかの意。  
○宮より明日にはかに云  
々—少納言などの惟光  
にかたるのである。必ず  
しも源氏の君への御返事  
とは聞えない。

○年頃の蓬生をかれなむ  
云々—數年來住みなれ  
てゐた蓬の生えてゐるこ  
の家から別れることにな  
ると心細いことである。  
○かさく—あへしらはす  
—あまり惟光をももて  
なさず、物のひなどして  
出で立つ支度をするので  
ある。  
○参りぬ—惟光が歸り  
参るのである。

がに心ほそう、侍ふ人々も思ひ亂れて」と言ずくなに言ひて、をさく—あ  
へしらはす。物縫ひ營むけはひなどしるければ、参りぬ。

君は大殿におはしけるに、例の女君とみにも對面し給はず。ものむつかし  
り覺え給ひて、あづまをすがきて、常陸には田をこそ作れといふ歌を、  
聲はいとなまめきてすさび居給へり。参りたれば、召し寄せて有様とひ給  
ふ。しかく—なむと聞ゆれば、口惜しう思ひて、かの宮に渡りなばわざと  
迎へ出でむもすきく—しかるべし。幼き人を盗み出でたりともどきおひな  
む。そのさきに、暫し人にも口がためて渡してむと思ひて、「曉かしこにも  
のせむ。車の装束さながら、隨身一人二人あふせおきてたれ」とのたまふ。

惟光は歸つて来て、紫上のところの様子を逐一申しあげたので、源氏はそれをお聞き召され  
ては、可愛想なことであると思ひなされたが、さればとてお通ひなさるのもやはりはしたない  
心地がするし、又世人も道ならぬことゝ漏れ聞くだらうと心恥しい點もあつたので、唯紫上を  
この二條院に迎へ取らうと考へられた。御手紙はたびゝ送られる。夕暮になると、太夫惟光  
を宿直にやられた。このとき惟光に託された御手紙の中には「源氏は只今少し差障ることがあ  
つて参上いたしませぬのを、疎遠にしてゐると思召されるでありますう」などの語があつた。

○大殿におはしけるに—  
—源氏葵上の所へ行かれ  
る。  
○ものむつかしう—う  
るさく。  
○あづま—和琴。  
○すががき—補欄参  
照。

○常陸には田をこそ作れ  
—補欄参照。  
○しかく—なむと—明  
日は紫上も父上の邸にお  
移りになるとのことを、  
惟光から申上げるのであ  
る。  
○暫し人にも口がためて  
—紫上の方の人にも、  
源氏の紫上を盗み出で給  
ふ事を沙汰するなと物語  
なさるのである。  
○車の装束さながら—  
今日大殿へ乗用の車の装  
束をそのままにしてお  
け、曉には彼の紫の方へ  
行かんと惟光に仰せられ  
るのである。  
○おきてたれ—掬てて  
あれにて掬てよといふこ

少納言のいふには「父兵部卿の宮から、明日急に紫上を迎ひ取ると仰せられましたので、今は  
その移轉のために心は忙しくございます。數年來住み慣れて来たこの蓬生の宿を離れるのも、さ  
すがに心細うございます。今までお仕へしてゐた人々も、いろく—と思ひ亂れるのであります」  
と、言葉少なに言つて、まあ—惟光の方は待遇もせず、彼等は物を縫つたり、移轉の準備な  
どに忙しい様子がそれとなく見えたので、惟光は遙にもどつてしまつた。

さて源氏の君は大殿にお出でなされたが、例の如く葵上はすぐにも出で、御對面なさらない。  
君はうるさいことだと思召され、和琴をすがきてなさつて、風俗常陸歌の「常陸には田をこそ  
作れ云々」の句を、聲は艶にして慰め半分に歌はれた。そこへ惟光が歸つて来て、兵部卿の宮  
は明日行きなされ、紫上を自宅にお連れなさるといふので、女房どもはその用意をいたして居  
ります。先づ斯様な有様であるといふことを申し上げたので、源氏はそれは残念なことである。  
彼の紫上が父の邸にお行きなされると、殊更に吾が二條院に迎へるのもすきく—しいことであ  
らう。又幼少な彼女を盗み出したといふ非難を受けるであらう。それよりは暫しの間は人々の  
口がためをさせて置いて、父の兵部卿がお連れに行かれるさきに、我が迎へ取らうと思ひて、  
「明方になつたら紫上の宅に行かう。今この大殿の所へ乗つて来た車のかざりはそのまゝにし  
て置け。又明朝連れて行く隨身を一人二人言ひつけて用意して置けよ」と仰せられる。

○あづま—評釋に「あづまとは和琴の事也」といひ、又「日本琴をあづまといふは、もと  
東遊の歌をひくより出でたる名なるべし。さて東遊といふ名は東國のひな歌を、かしくうた



ふより出でたる也。もろこしの琴にむかへてやまと琴といふだにいかゞしきいひさまなるに、東ともしもいひならへるはいとあかぬこと也。これわが皇國の固有の琴なるものを」とある。

○すがゝき——眞淵の新釋には「案にすがゝきは雙の音をすがといふ也。片掻てふに對へてもしるく且雙六をすぐろくといへる例をもおもへば也」と、花鳥餘情には「和琴に菅攪片掻とて神樂催馬樂に用ゐる事あり、五つ拍子にはすがゝき、三度拍子にはかたがきと云り、又等にも毎樂曲終にかくを菅攪と云ふと云々」とある。○常陸には田をこそ作れ——この歌については玉の小櫛に詳しく注して曰く「風俗常陸歌、比太知仁波、太乎己曾川久禮、安太己々呂、可奴止也支見如、山乎己衣、乃乎己衣、安木與支末世留、これは常陸なる女の、となりの國などより、通ひ來たる男によみかけたるにて、歌の意は我は田を作りてこそ居れ、他事はなきに、もし君がきまさぬ間に、あだ心ありて他男をかねて通はすかと疑ひやし給ふらん、野山をこえてかゝる雨夜に來ませるとよめる也、扱今源氏君のうたひ給へるは、我は此常陸の女の田をこそつくれとよめる如く、あだ心はなきに、あだ心ありとおぼすにや、葵上のとみにも對面し給はぬことよといふ意にて也、注に末摘花の事とあるはいと物どほくこゝによしなき事也」とある。細流抄には「此段古來不審也、河内方源中最秘抄などには色々沙汰あり、花鳥河海不及沙汰一也、いかさま此物語いづくにても、より所のなき事はかゝざる也、ひたちにはの歌をふと歌ひ出だされしは、いかさま心あるべきこと也、今案、いま葵上の例のとみにも對面せず、物むつかしき様なるをうらめしく思て、様々のこと、人の上など思ひ出で給ふに、末摘花の事を

ふと思ひ出で給ふなるべし。末摘は常陸宮のむすめ也、然も末摘に逢ひ給ふこと此時分にあたるべしと云々」と言つてゐる。

うけたまはりて立ちぬ。君はいかにせまし、聞ありて、すきがましきやうなるべきこと。人のほどだに物を思ひ知り、女の心かよはしけることと推し量られぬべくは世の常なり。父宮の尋ね出で給へらむもはしたなう、すゑなるべきをと思し亂るれど、さてはづしてむはいとくちをしかるべければ、まだ夜ふから出で給ふ。女君例のしぶく〜に心も解けずものし給ふ。「彼處にいと切に見るべきことの侍るを、思ひ給へ出でてなむ、立ちかへり参り來りなむ」と出てたまへば、侍人々も知らざりけり。我御方に御直衣などは奉る。惟光ばかりを馬にのせておはしぬ。門うち敵かせ給へば、心も知らぬものの開けたるに、御車をやら引き入れさせて、大夫つまどを鳴してしはぶけば、少納言聞き知りて出て來たり。

惟光は源氏の命ぜられた旨を承知してその場を立つた。源氏の君は思召されるには、紫上を迎へようか、それともどうしようか、もし迎へるとするならばいろ〜な噂も出來て、女すき

○聞えありて——世の聞えがあつて。  
○人のほどだに——紫上の年齢が相當であつて世情のことも知り。  
○女の心かよはし——女も心なかよはしてゐたと。  
○推し量られぬべくは——廣く世上の人から推量されるやうであるならば世間普通のことである。  
○さてはづしてむは——さてそれだとしてこの好機をとりはづしたならば残念であるだらう。  
○女君——紫上をいふ。  
○彼處にいと切に見るべきこと——彼處は二條院をいふ。彼の二條院に源氏が是非とも見なければならぬものがあつたのを忘れて來て、只今それを思ひ出したから行つてく